

釜石での 出会いから 始まった

聖学院大学ボランティア活動支援センター



2011年から、聖学院大学の学生や教職員は、釜石に継続的に通っています。正直なところ、釜石での活動が多様にな

とも、これほど続く

は想定して

た。何年行

計画も立てず、

被災地の復興

を支援したいという想い

からスタートしました。

復興支援と銘打って始めましたが

に、私たちの方が釜石の方々か

ま

の

いま

にし

を生み出したりしています。

ボランティアスタディツアーだけでは飽き

ア活動やイベント参加のために釜石に通

う者もいます。教職員の中にも、独自の動きを始める者も出てきました。



釜石での 出会いから 始まった

聖学院大学ボランティア活動支援センター



2011年から、聖学院大学の学生や教職員は、釜石に継続的に通っています。正直なところ、釜石での活動が多種多様にな

とも、これほど続く

は想定して

た。何年行

計画も立てず、

被災地の復興

を支援したいという想い

から

復興支援と銘打って始めましたが

に、私たちの方が釜石の方々が

ま

ま

し

生み出したりしています。

ボランティアスタディツアーだけでは飽き

活動やイベント参加のために釜石に通

う者もいます。教職員の中にも、独自の動きを始める者も出てきました。



目次

| | |
|---|------------|
| はじめに（平修久） | 001 |
| 1. 釜石の人々との出会い | 003 |
| 1-1 女将さんや柏崎龍太郎さんとの出会い（野口祐子） | 004 |
| 1-2 柏崎龍太郎さんとの出会い（平修久） | 006 |
| 1-3 女将さんとの出会い（金谷京子） | 008 |
| 1-4 伊藤聡さんとの出会い（神吉乃三巳） | 010 |
| 1-5 伊藤さんとの出会い（大川愛加） | 013 |
| 1-6 市川さんとの出会い（金谷京子） | 014 |
| 1-7 佐々木姉妹との出会い（藤川友帆） | 015 |
| 1-8 漁師の健ちゃん、新ちゃんとの出会い（平修久） | 017 |
| 1-9 虎舞との出会い（坂本佳代子） | 019 |
| 2. 想い・元気を届ける | 023 |
| 2-1 初めてのサンタプロジェクト（菊地順） | 024 |
| 2-2 大学あげでのオーナメントづくり（大井恵子） | 027 |
| 2-3 被災地に桜を（山口雄大） | 030 |
| 2-4 釜石よいさ（児玉拓哉） | 033 |
| 2-5 子ども遊び広場（金谷京子） | 035 |
| 2-6 子ども遊び広場「あそびーらんど」を実施して（前島沙紀） | 037 |
| 2-7 ハンドマッサージ（守屋有紀） | 039 |
| 2-8 2年通った学童保育くりりんと鶴住居幼稚園(仮設)での遊び(坂本佳代子) | 040 |
| 2-9 キッズかけっこ教室（島村宣生） | 041 |
| 2-10 三陸ひとつなぎ自然学校での長期ボラ（古橋亮） | 043 |
| 2-11 2016年台風10号に関するボランティア（坂本佳代子） | 045 |
| 2-12 防災教室：大学生として、釜石の高校生の思いを応援！（由木加奈子） | 046 |
| 2-13 防災教室（川田虎男） | 048 |
| 2-14 釜石の話を礼拝で（西浦昭英） | 050 |
| 3. 交流 | 053 |
| 3-1 お母さんたちから教わった郷土料理（金子朋寛） | 054 |
| 3-2 同世代交流（菅原幸秀） | 056 |
| 3-3 みんなでかだっぺし（川田虎男） | 057 |
| 3-4 みんなでかだっぺし（西川正） | 059 |
| 3-5 仮設住宅での交流（新井達也） | 060 |
| 3-6 仙寿院の柴崎住職の講話（児玉拓哉） | 062 |

| | |
|---|-----|
| 4. 貴重な体験・活動 | 063 |
| 4-1 塩づくり (香椎佐久美) | 064 |
| 4-2 ワカメの収穫体験 (溝橋亮太) | 065 |
| 4-3 漁船体験 何てたって 漁船クルージング! (坂本佳代子) | 066 |
| 4-4 しいたけボランティア 原木しいたけ再生プロジェクト (島村宣生) ... | 067 |
| 4-5 しいたけボランティア (菅原幸秀) | 069 |
| 5. 調べ、学ぶ | 071 |
| 5-1 ボランティアスタディツアー (川田虎男) | 072 |
| 5-2 ボランティアスタディツアー 学生ボランティアの意義 (菊池祐太郎) 073 | |
| 5-3 ボランティアスタディツアー (西浦昭英) | 075 |
| 5-4 漁村調査 (平修久) | 077 |
| 5-5 授業になった「釜石学」(渡辺正人) | 080 |
| 5-6 釜石に関する卒論 (永松実梨) | 083 |
| 6. 味合う | 085 |
| 6-1 釜石を美味しく楽しむ会 (渡辺正人) | 086 |
| 6-2 釜石を美味しく楽しむ会 釜石の人々と味に魅せられて (阿部洋治) ... | 088 |
| 6-3 グルメリーダー (藤川友帆) | 090 |
| 6-4 釜石フェスティバル (永松実梨) | 091 |
| おわりに | 094 |
| 資料編 | 095 |
| 1. 出会いの積み重ねによるネットワークの拡大 (芦澤弘子) | 096 |
| 2. あそび広場での子どもへの注意 (金谷京子) | 107 |
| 3. 子ども対応ボランティア心得 (金谷京子) | 108 |
| 4. 子ども関連イベント in 釜石 (金谷京子) | 110 |

はじめに

この本の作成を思いついたのは、2018年3月に実施した釜石を美味しく楽しむ会で、一人ひとり、釜石と自分について話した時でした。釜石に対する想いや愛を強く感じる話ばかりでした。釜石の銘酒「浜千鳥」の酔いの影響があったとはいえ、心に染み入る話ばかりでした。参加者全員が釜石を通してしっかりとつながっていると感じたのは、私だけではないと思います。学生に聞かせたい話ばかりでした。その場限りの話にしてしまうのはもったいないということで、この本をみんなで書こうということになりました。

2011年から、聖学院大学の学生や教職員は、釜石に継続的に通っています。正直なところ、釜石での活動が多様になることも、これほど続くことも、当初は想定していませんでした。何年行かうかという計画も立てず、とにかく、被災地の復興を支援したいという思いからスタートしました。

復興支援と銘打って始めましたが、一つひとつの出会いを重ねるうちに、私たちの方が釜石の方々から、生きる力など多くのものを学ばせて頂いていることに気がつきました。それらの学びは、ボランティアスタディツアーの帰りのバスの中で、毎回、3、4時間かけて、学生、教職員の発表の中で確認しています。合わせて、これから自分がやることを発表します。このようにして、釜石での出会いが、新たな一歩につながったり、新たな活動を生み出したりしています。

学生の中には、団体行動のボランティアスタディツアーだけでは飽きたらず、個人的にボランティア活動やイベント参加のために釜石に通う者もいます。教職員の中にも、独自の動きを始める者も出てきました。いつの間にか、釜石の方々との出会いが複雑で強いつながりとなり、活動が多様化しました。

活動記録は5年や10年を区切りにするのが一般的ですが、「思い立ったが吉日」という勢いで、今年度に作成することにしました。

2011年に開始した釜石での多様な出会いと活動を振り返り、釜石の方々への感謝の気持ちを表すことが本書の作成趣旨です。また、今年（2019年）、釜石で行われるラグビーワールドカップの成功への応援にもつながれば幸いです。

紙面の都合上、一部の方々との出会いに限らせて頂いたこと、執筆者を絞らせて頂きましたことをご容赦ください。また、釜石に対する想いは人それぞれで、表現方法も違いますので、文体などに統一がありませんが、ご理解ください。

聖学院大学ボランティア活動支援センター
所長 平 修久

1

釜石の人々との出会い

野口祐子
平 修久
金谷京子
神吉乃三巳
大川愛加
金谷京子
藤川友帆
平 修久
坂本佳代子



女将さんや柏崎龍太郎さんとの出会い／柏崎龍太郎さんとの出会い／女将さんとの出会い／伊藤聡さんとの出会い／伊藤さんとの出会い／市川さんとの出会い／佐々木姉妹との出会い／漁師の健ちゃん、新ちゃんとの出会い／虎舞との出会い

釜石での出会いから始まった

1-1

女将さんや柏崎龍太郎さんとの 出会い

野口 祐子

仮設住宅調査で釜石へ

私が初めて岩手県沿岸部の被災地に入ったのは、2011年7月23日（土）のことです。日本福祉のまちづくり学会で組織した震災復興調査委員会（住まいの調査班）の先遣隊として2名で、岩手県立大学の狩野徹教授に案内していただき、岩手県大船渡市、釜石市、陸前高田市を訪問しました。その頃はまだ津波の被害に遭った沿岸部の宿泊施設は復旧しておらず、遠野に宿泊し、遠野の道の駅「風の丘」や住田町に近い陸前高田市の川の駅「よこた」を食事とトイレの拠点にし、沿岸部に通いました。

その頃、ようやく仮設住宅が建ち始め、住まいの調査班としての調査は仮設住宅が対象でした。先遣隊としての調査を終え、9月14日から本格的に、学会のメンバー総勢12名で陸前高田市、大船渡市、釜石市、大槌町、山田町の仮設住宅に調査に入りました。そして、釜石市宝来館の、津波が到達しなかった3階、4階に宿泊させていただきました。1階はまだ泥だらけで、営業再開のめどが全く立っていない状況でした。何とか電気と水は使える状態で、非常階段を使って出入りしました。2011年の9月は残暑が厳しく、連日30度を超え、一晩中窓を開けたままでした。砂浜が津波で削られたため、直接岸壁に打ち付ける波の音はとても大きく、真っ暗闇の中、余震や津波の恐怖に、緊張しながら眠ったことを覚えています。

女将さんを通して柏崎龍太郎さんや伊藤さんと出会う



岩崎女将と龍太郎さんたちの夕食会

その時初めて、宝来館の女将岩崎さんにお会いしました。そして、女将さんの知り合いを集めて、創作農家こすもすで夕食会を開いて下さいました。店主の藤井サエ子さんが美味しい食事を作って下さり、食事会のメンバーには柏崎龍太郎さんや当時宝来館の番頭だった伊藤聡さんもおられました。また、再建のめどが立たない中で女将さんは、宝来館の将来、根浜の再生計画について、熱く語って下さいました。

翌朝、鵜住居の仮設団地を訪問し、地域の相談役的存在の柏崎龍太郎さんに被災の状況や避難所の生活、仮設住宅での課題などについてお聞きしました。柏崎さんらしく、仮設団地の改革に取り組んで

おられ、例えば、鍵を管理する市に申請を出さないと使えなかった集会所を朝から夕方まで開放し、誰でも使えるようにしたり、子どもの遊び場として活用したりと、市内の仮設団地で一番活用されている集会所に変えたそうです。

入居者は抽選で入り、名簿も公開されず、どのような人が入っているかわからない中、柏崎さんはコミュニティ



根浜再生計画について熱く語る岩崎女将

の形成に力を尽くしておられ

ました。家にこもりがちな男性高齢者のために、ボランティアに頼んで将棋盤と囲碁盤を用意してもらったそうです。

「これまでは、コミュニティは役所にとってメリットが大きかった。そうではなく、ここに住んでいる人のためのコミュニティづくりが必要だ。9月はコミュニティの熟成期間、10月からゆるやかなコミュニティづくりをスタートさせたい。トップダウンで形成するのではなく、複数の人が責任を持ち役割分担してやっていきたい。」と語っておられました。

■ ボランティア活動を思い立つ

こうしたお話を伺いながら、子どもたちや高齢の方々、またコミュニティのことなら聖学院大学には専門の学科があり、お役に立てるかもしれない、学生たちも柏崎龍太郎さんの人柄に触れて学ぶことは大きいのではないかと直感し、柏崎さんに鶴住居でのボランティア活動を申し出ました。

私は2011年9月から半年間の特別研究期間に入っていましたが、早速、復興支援ボランティアセンター長（当時）の平先生に連絡し、ボランティアの可能性についてお聞きしました。聖学院大学では、がれきの撤去などのボランティアを行っていましたが、9月後半になるとそれも一段落していたとのことで、11月のヴェリタス祭（学園祭）の直後に平先生と大学職員の神吉さんと釜石を訪問することになりました。

そして、宝来館女将岩崎昭子さん、主任児童委員市川淳子さん、伊藤聡さん（当時：NPO法人ねおす・宝来館番頭）、柏崎未来さん（当時：NPO法人ねおす）からお話をうかがいました。その時の報告書を読み直し、被災された方の当時の生の声をまとめてみると次のようになります。

- 10月いっぱいねおすによるボランティアの受け入れは終了した。8月まではボランティアが殺到し、マッチングできず断ることもあった。9月で学生の夏休みが終わる頃からボランティアは激減。
- PTSD（心的外傷後ストレス障害）が深刻になっている。仮設住宅では孤独死、自

- 殺される方も出ている。子どもや高齢者の心のケアが必要になってきている。
- 仮設住宅の暮らしでは、車が一家に1台しかない。父親が仕事で使用するため、学齢期前の子どもは、母親が送り迎えできず保育園、幼稚園に通えない。子どもが仮設住宅にいるとうるさいと苦情が出る。
 - 大きなイベントは会場が遠いので車で行かなければならない。車が使えない高齢者は取り残されているという感覚がある。自衛隊のマーチングバンドで慰められて涙を流す人がいる。そうしたものに飢えている。
 - 物資の配給があると、余計なものまでもらってしまう。喪失感が大きいことが原因。心が満たされていない。被災者だけで考えていると、心はどんどん沈んでしまう。外からの力が必要。前の生活が100とすると、70を流された。今は30。100を求めてしまう。
 - ボランティアは喪失感の大きい被災者のペースに合わせることが大事。
 - 芸術（音楽、アート）が必要。詩や絵の壁掛けだけでも心が癒やされる。手作りのものが慰められる。
 - 以上をまとめると、一人ひとりに寄り添う支援が必要。焦らないことが大事。喪失感、見放され感が強い。心が満たされるためにどうしたら良いか。大きなイベントは大きな会場が必要で、車を使えない人は参加できず寂しさを助長する。芸術（音楽、アート）、手作りのものや慰められる詩などが必要。生活に彩り、非日常的なものが必要。
 - 聖学院大学の皆でリースを作って送れるのではないか。鶴住居、箱崎全体だと600個。

そして、聖学院大学でのオーナメントづくりと仮設住宅居住者へのオーナメントのプレゼント、釜石でのクリスマス会（12月10日）につながりました。

釜石でボランティア活動を行うことになった理由、そしてボランティアする人、される人を超えて、今日まで交流を続けることができたのは、宝来館女将岩崎昭子さんや柏崎龍太郎さん、伊藤聡さんをはじめとする釜石の人々の魅力であったと思います。

1-2

柏崎龍太郎さんとの出会い

平 修久

淡々と震災体験を語る龍太郎さん

柏崎龍太郎さんと最初にお会いしたのは、2011年11月に初めて釜石を訪れた時でした。次にお話を伺ったのは翌年の2月でした。仮設住宅にお邪魔して、東日本大震災後直後の話を伺いました。震災から3日間は食料がなくて大変だったこと、避難した場所は部屋が1つしかなく、規律ある生活を送るために禁酒にしたこと、その代り

にイベントを行い、被災者の気持ちを和ませたことなどの体験談を淡々と話されました。

また、地震直後の電話で娘さんの無事を確認したものの、その後、流された自動車の中で遺体で見つかったとのことでした。電話で「早く逃げろ」と言ったが、どこに逃げたらよいのかは言わなかったと後悔されていました。何回も仮設住宅にお邪魔しましたが、娘さんの話をされたのは1回きりでした。悲しみはご自分の胸の奥深くにしまわれ、娘さんの分まで釜石の復興に取り組もうという意識を持ち続けられたと思います。

■ 地域で欠かせない龍太郎さんの存在

龍太郎さんは、鶴住居地区片岸の定置漁業の網元の家生まれ漁師になるつもりでしたが、親に反対され新日本製鉄（当時）に就職しました。退職後、地域活動に深く関わり、地域の方々から頼られる存在でした。「柏崎さん」ではなく、みなさんから「龍太郎さん」と呼ばれていました。龍太郎さんがいれば、話がまとまるという期待を回りの人が抱いたようでした。地域で活動されている方は、龍太郎さんに見守られているという安心感の中で日々前進されてきたと思います。

震災後はいくつかの仮設団地の相談役をつとめながら、震災復興に関して、常に一歩先を広い視野で考えておられました。復興のご意見番として、震災メモリアルパーク整備検討委員会など重要な委員会に数多く関わっていらっしゃいました。また、地域を引っ張るという難しい役も引き受けていました。箱崎半島などの漁村の復興を推進するNPO 法人釜石東部漁協管内復興市民会議（通称：NPO おはごぎき市民会議）の理事長もその一つです。奥様をはじめ、まわりの方は龍太郎さんの体のことを心配されましたが、2017年12月に亡くなられるまで、自分の体よりも地域のことを優先されていました。

2012年2月に、生活再建のために震災前のまちの記憶を調査することを提案したところ、まだその時期ではないという答えでした。その代わりに、NPO おはごぎきの関係で、体験漁業の再開の可能性と新たな水産加工品を検討してほしいとの話が出ました。

調査などで釜石に行く時は、ほぼ必ず、お話を伺いに仮設住宅にお邪魔しました。毎回、復興の進捗状況に加えて、新しいアイデアなど、話は盛り沢山でした。

龍太郎さんは、震災前から釜石の観光の復興にも尽力され、2011年の秋に200人規模の民泊を企画されていましたが、東日本大震災でその計



まちづくりの展望を語る龍太郎さん

画は無残に碎け散りました。それでも、観光ボランティアの活動を続けられ、2015年に、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」として世界遺産に登録された橋野高炉跡のボランティアガイドもされていました。釜石の歴史、文化、地形などを詳しく調べ、それを観光案内資料としてまとめたものも見せてもらいました。

聖学院大学で2011年12月に手作りのクリスマスの飾りをお届けしましたが、室内を飾るものが少ないということで、しばらく、仮設住宅で大切に飾って下さいました。

釜石市民は桜が好きという話を聞きましたが、龍太郎さんも桜が好きで、室内でも育てられる盆栽桜をお届けする桜プロジェクトは大変喜ばれました。仮設住宅で生活をしている被災者がいる間は続けてもらいたいという要望を受けました。

龍太郎さんの遺志を引き継ぐ

2017年12月のご葬儀（享年85歳）は、龍太郎さんの人柄と、地域社会での幅広い活動を反映して、常楽寺の本堂がいっぱいになるほどの人が参列し、市長が代表して弔辞を読まれました。龍太郎さんに精神的な支えになっていただいていた方は、気落ちしている中で、龍太郎さんの遺志を継ごうという思いを固めているように見えました。

楽しみにされていた新居での生活はわずか1日あまりだったとのことでした。仮設住宅での5年間の生活は長すぎたと言えます。

聖学院大学が釜石、特に鶴住居地区でこれまで活動が継続できている背景の一つに、はじめに龍太郎さんという地域での信頼の厚い方に出会うことができ、龍太郎さんを中心にして、釜石の方々とのつながりが広がっていったことがあります。新しい人間関係を築くには、誰の紹介なのか、誰を知っているかが重要になることがありますが、聖学院大学にとって、初期の段階で龍太郎さんと出会えたことは、非常に大きな意味を持っていると思います。

改めまして、龍太郎さんのご冥福をお祈りします。

1-3

女将さんとの出会い

金谷京子

宇宙人女将から受けるエネルギー

宝来館の女将さん、岩崎昭子さんは、津波に追いかけられながら従業員や近所の人を誘って逃げる姿がYouTubeにアップされ、「津波にのまれて生還した女将」と

して有名になった方です。しかし、私はその映像からではなく、野口先生からユニークな旅館の女将さんがいると紹介されて知りました。女将さんについて私が関心をもったのは、震災が起こる前から鶴住居の海岸地区を、その自然の恵みを活かして、「どんぐりうみねこ村」にしようという構想を持っていたことでした。とても斬新な地域振興策だったからです。こういう発想をする人はどのような人な



根浜を案内する岩崎女将

のだらうと、実際にお会いする前から私の好奇心が揺さぶられました。

私が初めてお会いしたのは2012年4月の桜プロジェクトの時です。実際にお会いしてみると、旅館を営んでおられて接客に慣れていらっしゃることもありますが、とてもオープンな方で、私たちの桜プロジェクトの盆栽桜のアイデアを称賛され、私たちの訪問を歓迎して下さいました。そして、学生たちに壮絶な津波体験と生きることの大切さを語って下さいました。

決意のこもった女将語録

宝来館への支援は、「宝来館に泊まってくれることが一番嬉しい」との女将さんの言葉を聞いてから、私と坂本先生は、ボランティアスタディツアーの際は学生とは宿をともにはできなくなりますが、できるだけ宝来館を利用するようにしています。宝来館では宿泊客に、毎朝女将さんが「震災を語る」モーニングアワーがあり、女将さんの震災当時やその後の鶴住居地区について、また女将さんの地域振興計画などを聞くことができます。何回かお話を伺った中から、震災時の宝来館の様子と、女将さんの決意のこもった語録を紹介します。

- 震災当日は、宝来館の前の根浜海岸から打ち上がった津波に女将と従業員3名が呑まれました。車につかまり、先に裏山に逃げていた人に津波から引き上げられ3名は無事に山頂に避難したものの、寒さと衰弱のまま一夜を明かすか迷った。宝来館もガス漏れの危険があったので、戻れるかわからなかった。避難していた一人が様子を見に行き、4階は使えることがわかり、宝来館に皆で戻った。その後、宝来館は漁師や近隣住民が避難してきて避難所の役割を果たした。女将も食料を集めに奔走した。
- 宝来館は高台移転しない。その代わりに、裏山に避難経路を整備し、いつでも避難できるようにした。宝来館前の海岸にも14mの防潮堤を作る計画がもたらされたが、拒否し、津波に耐えた松林も保存することとした。ロンドンの方式に学び、根浜では海の消防団を結成した。

●いつまでも被災地意識では自立できない。私たちは元に戻るのではなく、未来を創る。

●宝来館はつながりを作る場としたい。世界の人に来てほしい。

震災時の様子がYouTubeにアップされたおかげで、海外でも女将さんのことを知る人が出て、震災のことを語るためにパリにも行ったり、また海外から宝来館を訪れる人も多くなったりで、世界の女将になっています。それは、単にメディアが女将さんの存在を知らしめたためということだけではなく、女将さんの生きる執念がそうさせているとも言えますし、女将さんの生き様が人を引きつけて止まないからだと思います。女将さんは、宝来館の経営をめぐり相当な苦勞をされているはずですが、しかし、ユニークな発想力で次々と難題を乗り越えているのだと思います。宝来館の元従業員で現一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤さんが、「女将は宇宙人だ」と言ったことがあります。女将さんは、この地球どころか宇宙とのつながりも持つ勢いで人々にパワーを発し続けていると思います。

これからも女将さんの人生観と自然観に学び、生きるエネルギーをもらい続けたいと願っています。

1-4

伊藤聡さんとの出会い

神吉乃三巳

釜石とのつながりのはじめ

2011年の9月以降、東日本大震災の被災各地でのボランティア活動は、津波被害による泥かきなどの初動の活動から、仮設住宅整備後の生活支援活動に移行しつつあり、本学でも初動の活動に代わる継続的な復興支援に向けた学生の活動を模索していました。その中で、野口先生から、釜石市の仮設住宅調査の際、同市の鶴住居地区でリーダー的立場にある柏崎龍太郎さんや、現地で精力的に活動している方々の非常に大きな人間的魅力に触れた、との報告がありました。すぐにその方々への連絡をお願いし、お話を伺いに11月の初旬に同先生と平先生とともに釜石を訪れました。

到着後、最初に私たちの目に映った釜石の光景は、他の被災地と同じく人間が歳月をかけて創り出してきた街並みが、いとも簡単に自然の力によって破壊されてしまった跡の衝撃的な姿でした。特に、鶴住居は釜石市の中でも津波による死者・行方不明者が最大の583名（「釜石市復興まちづくり基本計画」H23.12.22）に上った地区でもあり、その地に暮らす方々の心情は察するに余りある中、大きな緊張感とともにお会いする場に臨んだことを覚えています。

しかし、柏崎氏をはじめ、旅館「宝来館」女将の岩崎昭子さん、主任児童委員兼教

育委員の市川淳子さんたちは、最初はある種の戸惑いの様子がありながらも私たちを温かく迎えて下さいました。そして、皆さんが未曾有の震災により命の危険や、ご家族や友人、家を失うなどの過酷な体験と悲しみに直面しつつも、それらと真っすぐに向き合い乗り越えていく姿勢を謙虚に示して下さいると同時に、復興への希望とビジョンを、熱い想いとともには微笑みさえもたたえながら語って下さいました。その時、私たちはその方々の誠実な人柄と言葉に引き込まれていったのと同時に、学生たちの成長のためにも、鶴住居地区の方々との継続的なつながりの必要性を確信したのです。その際、「釜石ですでに未来を見据えて動き出している地元の若い人たちです」と最初に紹介して頂いた一人が、現一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校（通称：さんつな）の伊藤聡さんでした。

この鶴住居の方々を起点としたつながりの連鎖と伊藤さんの存在によって、聖学院大学の小さな取組みは釜石において様々な方々や団体に受け入れて頂けるようになり、ひいては自治体や教育委員会なども含め、世代も越えたネットワーク的なつながりにまで発展していくことができるようになったのです。

伊藤さんとの出会い

初対面時の彼の印象は、様々な活動の最中で緊張感と多忙さを極めながらも、常にソフトな微笑みと言葉と大らかさを持ちつつ、芯には行動の源となる力強いまっすぐな想いをあわせ持つ、信念と行動の青年でした。その印象は、見た目と心の若さも含めて現在も変わっていません。

伊藤さんは当時働いていた宝来館で被災し、避難の際に撮影した津波の映像がインターネットを通じて多くの人の目に触れ、宝来館とその個性的な女将の岩崎さんが世に知られるきっかけを作った人でもあります。自身のお宅も津波で被災し、奥様とお子様と一緒に仮設住宅住まいでした。

お会いした当時は、震災直後から釜石で復興支援活動を展開していた北海道のNPO 法人ねおすのメンバーとして活動していて、同じく釜石出身で実家が被災しながらも精力的に活動し、彼の強力な仲間かつサポート役でもある柏崎未来さんとともに、全国からのボランティアの受け入れコーディネートを日々行いながら、「放課後こども教室」での地元の子どもの居場所支援や、「あづまっぺ！ かまいし」での郷土料理の継承活動などを続けていました。



宝来館の震災当時の様子を話す伊藤さん

そして、二人はその経験を活かし、翌2012年に釜石で一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校を立ち上げました。その「さんつな」は、震災以前から失いかけてつあった釜石の誇りを取り戻すため、伊藤さんが宝来館で勤務していた時から精力的に動いていたグリーンツーリズムの手法などを震災後の復興支援活動にも応用し、NPO法人ねおすの活動も継承しながら多様なプログラムを開始しました。それらは釜石の自然の魅力を介してボランティアなどの来訪者と釜石との出会いの場を提供し、釜石ファンを着実に増やしていくというエコツアーや、子どもたちの居場所づくり、釜石の鉄鋼業・漁業・農業・食・歴史・文化などを活かした地域づくりなどの活動で、年を追うごとに発展しています。

それらの活動は、当時、東日本大震災の事態を重くとらえて「こども心理学科」や「復興支援ボランティアセンター」を設置し、学生のより専門的な学びや課外活動を通じた成長へのサポートに力を入れ始めた聖学院大学の教育方針や、福祉・心理・子ども・まちづくりなどに関する学生の学びの実践先としても合致するところが数多くありました。そのため、伊藤さんとお会いして以降、「さんつな」を窓口に、前述の方々、鶴住居地区生活応援センターの方々、そして卒業生も含む釜石の様々な方にご理解とご協力を頂きながら、大学の特徴を活かした「サンプラプロジェクト」や「こどもあそび広場」、「桜プロジェクト」などの活動を、「復興支援ボランティアスタディツアー」の中で継続してきました。

■ 人の魅力と場の魅力、そして学び

私たちがツアーなどの短期間でなしえることは限られており、大規模な活動とはなりません。ある意味、支援などと言うことはおこがましく、むしろ訪問するたびに、様々な体験や人々との交流を通してこれまでの価値観を揺さぶられ、自らを見つめ直しつつ学びを深め成長していく機会を学生たちが得ていることの方が数多くあります。しかしながら、釜石の方々はそれを理解しつつ私たちを喜んで迎え入れて下さり、被災者と支援者という一時的で一方向的な関係性よりも、細く長く続くゆるやかな交流活動の方を望んで下さる懐の深さがあります。この関係づくりと現地の理解・協力を得るためには、日々変化する現地の状況を踏まえて学生たちの活動内容に反映しつつ、聖学院大学と釜石との間を継続的に取り持って下さる伊藤さんたちの存在が不可欠であることは言うまでもありません。加えて、伊藤さんをはじめ釜石の方々がやっている様々な活動や、交流を通して得られる知識や経験、そして気づきは学生たちにとって良質な種となり、大きな糧となっています。それらは、社会に貢献しながら生きている生き様を示して下さるとともに、不安などから時には立ち止まることもある学生たちに、もう一步を踏み出す勇気を与えてくれています。そして、何よりも、釜石には自分の悩みにも自分事のように相談に乗ってくれる人生の先輩がいるという安心感は、伊藤さんを知った学生たちにとって、何にも増して心強いことだと思います。

このように、「遠くの親友」として常に様々な人々とともに歩み続けている伊藤さんたちの姿や、被災しながらも愛してやまない釜石の自然を背景とした風土の豊かさ、そして人々が創り出す場の魅力に、私たち教職員や学生は強くひきつけられてきまし

た。その結果、震災以降に釜石の土を踏んだ本学の学生・教職員や関係者、そして高校生の数は毎年増え続け、2018年10月の時点では、延べ700名に達しました。

「遠くの隣人」としてつながる

現在では釜石のみならず全国様々な地域での活動を精力的に続けている伊藤さんの取組みと行動力を拝見しつつ、同時に、釜石を訪れるたびにその場と人々が好きになり、以前は遠くの出来事であったことを自分事を感じるようになりながら、勇気を持って社会へと巣立っていく多くの学生たちを見送る中で、物理的な距離以上に「本当の距離は人の心が創り出す」という事実を、私は改めて深く実感しています。

伊藤さんというキーパーソンを中心的窓口とした釜石と聖学院大学との関係は、埼玉県の小さな大学が岩手県の方々と「遠くの隣人」としてつながることによって、ともに未来に向けて何を創造していくことが可能かという実験的取組み、かつ、「ゆるやかな共同体」の形成に向けた本質的な取組みであり、このような関係に聖学院大学が深く携われることは、非常に幸福であると考えます。この取組みが、柏崎龍太郎さんの御遺志も継ぎながらこれからも多くの実を結ぶことを信じつつ、伊藤さんたちへの感謝とともに、彼らの活動の継続的發展と、釜石と聖学院大学とのこの貴重なつながりが末永く続いていくことを心から願っています。

1-5

伊藤さんとの出会い

大川愛加

私が伊藤さんと初めて会ったのは、大学1年生の冬に行われた「サンタプロジェクト3」に参加した時で、直接関わるようになったのは、翌年の大学2年生の春に行われた「桜プロジェクト」からです。

その活動を行う前に、復興支援活動を行っている聖学院大学の復興支援ボランティアチームSAVEに入り、プロジェクトリーダーとして、スタディツアーを準備しました。そのために、釜石の方々と関わる機会が増えていきました。コーディネーターである伊藤さんとも連絡するようになりました。

聖学院大学のプロジェクトに参加するだけでなく、伊藤さんが代表をしている「一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校（さんつな）」のボランティア活動に誘われることもあり、参加することもありました。具体的に関わったのは以下の活動です。

① 釜石の夏のお祭りのよいさ！

大学2年生の時にボランティアスタディツアーで、よいさを踊らせていただきました。その後、伊藤さんに「よいさの裏方をやってみたいです！」と相談をすると、「この期間に来てもらえると手伝いができるよ」と教えてもらい、翌年は釜石よいさの手

伝いをする事ができました。手伝いだけでなく、活動を共にしたボランティア仲間ともつながることができました。

② 釜石の子どもたちとのキャンプ

釜石の地元の子どものたちと夏にキャンプをしました。みんなで川遊びをしたり、オリジナルカレーを作ったり、近隣を夜散歩したり楽しい活動をさせていただきました。

子どもたちと関わることで、自分達が子ども時に流行った遊びを教えたり、子どもと一緒に遊ぶことで子どもになった気分で触れあえ、子ども視点の意見も聞くことができ、とっても充実した活動ができました！

伊藤さんの人脈の広さには、釜石行くたびにすごいなあと感じています。個人ボランティアで3回ほどさんつなでお世話になりましたが、その3回ともボランティアに参加している学生は違って、伊藤さんの人脈がなければ出会ってない人もいたと思います。

私がボランティアで出会った人達は伊藤さんのお陰で出会えたと思うので感謝の気持ちで一杯です！伊藤さんに出会ったことで、人生が変わったといっても過言ではないと思っています。

1-6

市川さんとの出会い

金谷京子

慎重な交流からスタート



2011年11月に、聖学院大学が釜石に支援の方向性を検討するために訪れた時から市川さんは私たちのお世話をしてくださっています。

市川さんは釜石市の教育委員、主任児童委員をされており、鶴住居地区の幼稚園、保育所、小学校の子どもたちの様子をよく把握されていました。私たちが、2011年12月に初回のサンタプロジェクトを実施する際も、市川さんに子ども向けのイベントをした

い意向をお伝えすると、保健師さんたちに連絡をとって下さり、子どもたちへの宣伝をして下さいました。

私たちの中には子どもたちの心のケアができる者もいるとお伝えしたものの、震災直後は、様々な団体が釜石に訪れ、単発イベントのやりっぱなしをしていくものもあったためか、私たちに何ができるのか、どうしたいのか半信半疑でおられたと思います。

2012年4月に子どもの遊び広場を鶴住居で実施した時も、私たちに向けた市川さんの表情は固かったことを覚えています。市川さんの表情が和らいだのは、市川さんが過去に勤務していた幼稚園の同僚が私の大学の後輩という共通の知り合いであることがわかってからでした。

■ 私たちの活動のコーディネーターとして欠かせない存在に

その後、「私たちは細くても長く釜石と交流していきたい」との意向をお伝えし、繰り返し年間3回のプロジェクトを継続していく中で、私たちの想いを少しずつ理解していただけたように思います。また、釜石が変化していく姿を発信して行きたいという私の想いも汲んで、釜石の資料を多数集めて下さったり、訪問するたびに、震災後の釜石で見ておくべき所を案内して下さいました。

市川さんとの初期の交流で学んだことは、被災地に何者かわからない者がずかずかと入り込むことは、たとえボランティアをしに来たとは言え、相手に大きな不安を与えることになるということです。被災地に向く時に留意しなくてはならない点だと思っています。

今では、市川さんは釜石での私たちの活動のコーディネーターとして欠かせない存在であり、学生たちにもいつもの確なアドバイスを下さり、私たち教員も多くのことを学ばせていただいています。ことに未来を担う子どもたちへの市川さんの想いに学ぶところが大きいと思います。

釜石への訪問のきっかけを作った野口先生が、「釜石の魅力は、『人』です。」と言っていたことがあります。まさに市川さんも釜石を支える素敵なキーパーソンであると思います。市川さんとは未永くお付き合いをさせていただき、人と人をつなぎ、人を支えるわざを今後も学んでいきたいと思っています。

1-7

佐々木姉妹との出会い

藤川友帆

■ 桜の盆栽の植え替え作業で出会った結香ちゃん

震災後、初めて東北へ足を運んだ日のことを私は今でも鮮明に覚えています。



結香ちゃんと桜の盆栽の植え替え作業をする藤川さん

以前は住宅街であったであろう場所が何もないうるさな広大な空き地となっていたのを見た時は、テレビで見るよりも強い衝撃を受けました。怖かったら、もっと生きたかったら、と思えば思うほど涙があふれました。

釜石での初めての作業は、桜の盆栽の植え替え作業でした。そこに参加してくれたのが結香ちゃんでした。最初は、私を警戒している様子でしたが、植え替え作業を通じ

て徐々に仲良くなることができました。結香ちゃんが最後に私の頬に触れてくれた時は、心を開いてくれたような気がしてとても嬉しかった事を覚えています。

それからは、私がボランティアで釜石へ訪れるたびに毎回会いに来てくれるようになりました。二回目からは、姉の波香ちゃんも一緒に来てくれるようになり、3人でアクセサリーを作ったり、クリスマスにはリースを作ったり、季節ごとにいろいろな工作を楽しみました。

波香ちゃんと結香ちゃんからのプレゼント

波香ちゃんと結香ちゃんは毎回ボランティアスタディツアーの参加者に手づくりのお土産を作って持ってきてくれたので、私はもちろん、参加者の楽しみの一つになっていました。プレゼントしてもらったアクセサリーやお手紙、かわいい置物などは、今でも部屋に大切に飾ってあり、見るたびに2人を思い出しています。

結香ちゃんと波香ちゃんはいつも笑顔で元気に振舞っていましたが、震災当初は、PTSD（心的外傷後ストレス障害）に悩まされていたことを知りました。それは、大学の講義でPTSDを学んだ次の日でした。こんなに小さな子どもたちが実際に苦しんでいたのかと思うと、胸が締めつけられ思わず涙してしまいました。私は、それまで被災地の方が一番辛いのだからと涙を見せることに抵抗を感じていました。でも、結香ちゃんと波香ちゃんのご家族は、涙を流す私に涙ぐみながらも笑顔でありがとうと言って下さいました。

ボランティア活動で得られたもの

今までボランティア活動をしていく中で、「自己満」「本当に現地の方の役に立っているのか」など、厳しい意見をもらったこともありました。そして、私自身も釜石の方に喜んでほしい、少しでも救いになりたいと思っている中で本当に喜んでくれ

るのだからと悩んでいた時期がありました。その時に、榎原敬之さんの【僕が一番欲しかったもの】という曲の「僕のあげたものでたくさんの人が幸せそうに笑っていて、それを見た時の気持ちが僕の探していたものだと分かった。」という歌詞を聴いた時に、「ああ、私がボランティアをしている理由そのものだ。」思うと同時に、結香ちゃんと波香ちゃんの笑顔、ご家族の涙ぐみながらも笑顔でありがとうと言って下さったこ



藤川さんの卒業式にサプライズで駆け付けてくれた佐々木姉妹

と、釜石の方の多くの笑顔思い出しました。今までの活動が本当に現地の方の必要としていたのかと問われたら違うかもしれません。ただ、その活動を通してたくさんの方が笑顔になって下さいました。

これからの私にできることは、東日本大震災を東北の問題だけにするのではなく、全ての人の問題と捉え、釜石で見た、聞いた事実をこれからの人たちへ伝承していくことです。二度と同じことが起きないように、皆が笑顔でいられますように。それが私の願いです。

1-8

漁師の健ちゃん、新ちゃんとの 出会い

平 修久

「伝説の漁師になる予定」の健ちゃん

2012年の夏に、漁村調査で約1か月、三陸ひとつなぎ自然学校が利用していた仮設住宅で寝泊まりさせてもらっていた時に、伊藤聡さんから、健ちゃんこと佐々木健一さんを紹介してもらいました。若手の漁師さんにも話を聞きたいと思っていたところでした。

たくましい体格に日焼けした顔で、漁師のイメージにピッタリというのが、健ちゃんの第一印象でした。語り口にも豪快さを感じました。健ちゃんは、漁師は話し出すと止まらないと本人が言うように饒舌です。もらった名刺には、「伝説の漁師になる

予定」という文言が入っていて、遊び心を感じました。

健ちゃんは新ちゃん（佐々新一さん）とコンビを組み、共同でカキ専門に養殖漁業を営んでいます。まわりの方からは、親しみを込めて健ちゃん、新ちゃんと呼ばれています。

直接、市場や消費者にカキを届けたいということで、震災前から「桜牡蠣」というブランドで出荷していました。同じ商品名のカキがあることがわかり、現在では、「桜満開牡蠣」として出荷しています。ぷっくりとした大ぶりのカキで、味も折り紙付きです。

2013年に何回目かの漁村調査で釜石に行った際に、大槌町のマストのショッピングセンターの食堂で2人にばったり会いました。その時、新ちゃんが、「震災直後は2週間寝込んだ」という話の後で、「でも、店も再開し、お金を払えばごはんも食べられるようになった」としみじみと語ったことが印象的でした。食堂の再開や外食も、被災者にとって取り戻すことのできた日常の貴重な一部であることがよくわかりました。

健ちゃんは、震災前にウギヤル・プロジェクトに関わっていました。これは、若者の視点での新商品開発・情報発信と通年型体験漁業モデルにより、漁業産地と都市部の新たな交流を創出して、魚食文化の発展、漁業産地の地域力向上を目指す活動です。実際には、渋谷系の濃い目のメイクアップをしたギャルたちが、鮮やかな色のつなぎを着て、釜石で養殖漁業に挑戦し、健ちゃんがウギヤルを指導していたとのことでした。ウギヤルの「ウ」は、魚や海の「ウ」で、いわば、農業振興を目的としたノギャルの漁業版です。津波が来なければ、2012年にウギヤルが養殖作業を行ったカキを出荷する予定だったそうです。

かき養殖の復活

しかし、津波により、カキだけではなく、すべての養殖施設・機材、船が流されてしまいました。カキ養殖の再開には多額の費用がかかります。新ちゃんと健ちゃんは、千代田プラットフォーム株式会社の支援を受け、里海プロジェクトをスタートさせました。サポーター（消費者）2,000人に、一口1万円の無償貸し付け（期間は10年間）をしてもらいました。サポーターには配当や生産されたカキの代わりに、桜牡蠣無料試食クーポン券が届きます。一方で、無料クーポン券を利用できる首都圏の飲食店を確保し、桜牡蠣を取り扱ってもらうようにしました。飲食店にとっては新規顧客の獲得につながります。このように、サポーター、協力店、生産者の三者がすべて得をするという非常に賢い仕組みで、カキ養殖が再開されました。

健ちゃんと新ちゃんのカキ養殖への情熱と、人なつっこいキャラクターで、多くのファンができました。首都圏でのイベントにカキのブースを出店することで、さらにファンを増やしているようです。

何度か、学生がカキの養殖体験をさせてもらいました。学生の間でこのプログラムに人気があった理由として、めったにやることのできない作業の面白さのほかに、やはり、健ちゃんと新ちゃんの人柄がありました。豪快さの中に、心をひきつける話の

面白さだと思います。飾らない話の中で、自然に対する真摯な姿勢や生き方も学生は学んだと思います。

新ちゃんの住んでいる室浜は津波で全家屋が被害を受けました。2016年によく住宅の再建がなされ、新ちゃんは室浜の町内会長としても、地域コミュニティの再建に取り組んでいます。

健ちゃんと話していくうちに、両石港でワカメなどを養殖している久保宣利さんと健ちゃんが同級生ということがわかりました。高齢化が進む釜石の漁業において、健ちゃん、新ちゃん、久保さんたちの世代のますますの活躍を期待したいと思います。

1-9

虎舞との出会い

坂本佳代子

虎舞にびっくり

なんと、三陸海岸沿岸では、そこかしこで虎が舞っていたのです。

私は、そのことを東日本大震災まで全く知りませんでした。関東圏内で生活してきている私にとって、〈獅子舞〉が生活の中に位置づいています。しかし、張り子の虎頭に黄色地の虎模様の胴体幕が舞う虎舞にはびっくりしてしまいました。同時に、むやみに胸が高鳴ることを押さえられなかったのです。獅子舞に似ているけれど、でも違う。この動きの派手さは何なのだ、見る者に、これでもかこれでもかと挑んでくるかのような強烈さ、ともかく圧倒されました。

釜石の方に何うと、虎舞は「漁師の守り神だ」と答えてくれました。

「板子一枚、下は地獄」の漁師の^{なりわい}生業に、「虎は一日にして千里行って千里帰る」のことわざどおり、まさに虎は漁師さんの神様なのかもしれないと深くうなずいてしまいました。

なぜ、三陸に虎が？

しかし、三陸に虎が居たの?? ついでに言えば、どうして三陸に限って特徴的に虎が守り神様なの? 急に日本地図が頭に浮かび、三陸海岸にばかり虎がたくさん躍動している様を想像したら、なんだか滑稽にもなり同時に疑問が大きく膨らんでいくのでした。

私には、海と虎のつながりがどうもピンとこないのです。どうやら虎舞は三陸だけにしかないわけではないようです。しかし、これだけ集中的にビッシリ虎たちが舞っている地域は三陸をおいて他にありません。

釜石の虎舞の由来は何を調べても明白にはならないようで、だいたい次のように説

明されているようです。

今から約 830 年前閉伊地方を領有していた鎮西八郎為朝の三男閉伊頼基が、将卒達の士気を鼓舞するために虎の縫いぐるみをつけて踊らせたのが始まりであるといわれる。古い伝統を誇る釜石の虎舞は、威勢の良い独特の囃子と虎の生態を描く珍しい踊りとして全国的にも有名である。虎舞は、主に 3 種の踊り（遊び虎・跳虎・笹喰み）からなっている。（公社）日本観光振興協会 HP（2018/08/27）

私は取りあえず、今はこのように考えることで了解することにしました。

虎舞を追いかける

私が虎舞にひきつけられたのは、地域の方々の生活に虎舞が深く根ざしていることを感じたからです。津波で受けた大きな打撃から、虎舞を再開することで心を奮い立たせ、元気を取り戻していく様に、深く心打たれています。

釜石を訪れるたびに、虎舞と出会うことが楽しみとなりました。「よいさ」の時には、舞台で舞う虎舞にいつも釘付けになっていました。私のとらえた限りでの釜石虎舞の特徴は、笹を喰むこと、それから一頭ではなく二頭以上で舞うことかなと思っています。

何度も虎舞に出会うようになると、舞台で演じる虎舞ではなく、本来??の虎舞の姿を見たいと思うようになりました。そこで、私は港まつりでの虎舞を知ることが大きなヒントになるのではないかと考えました。2016年10月14日（金）の宵宮から参加し、15日はいよいよ曳き船まつりです。初めに尾崎神社奥宮に鎮座されている神様を、お召し船にお乗せするのだとか。その神事を見せて頂きたいと思いましたが、「青出浜にはまず行けないよ」と口々に言われてしまい断念しました。この日はいつもお世話になっている市川さんにご案内頂き、港で曳き船まつりの様子を拝見することになりました。虎たちはお召し船に付き従う漁船に乗って、お囃子に合わせ盛んに頭を振りながら体をくねらせています。この時に私の中でハッキリとしたことがあります。虎は神様ではなく、あくまで「神様の従者」だということ、だから神様の盛り立て役であるということです。

16日の市内お練りでは、それぞれの地区の虎舞が披露されました。私はずっと虎舞を追っかけました。中にはホワイトタイガーもいるではないですか。白と黄色の虎が舞う姿はちょっと素敵でした。クライマックスの浜町御旅所では、虎たちが相対して並び、その間を尾崎神社の神様がお通りになりました。その時です、何と虎はその頭を思いっきり高くかざし、思いっきり神様を囃し立てるではないですか。えっ！従者だったらこんな態度を取らないのではないの？現に山神社の神様がお通りになる時、鹿踊りの鹿たちは頭と立派な角を垂れ、黙してひれ伏すかのように神様にお通り頂いていたではないか。これが本来の従者の姿でしょ！

虎頭が聖学院大学に

実は、この時の港まつりで、釜石虎舞連合会会長の岩間久一さんと引き合わせて頂いたのです。いろいろ歓談しているうちに、何とその場で「聖学院大学に俺が虎頭を作ってやる」とおっしゃられたのです。耳を疑いましたが、それは実現してしまったのです。翌2017年の1月には聖学院大学に虎が送られてきたのです。梱包材の中から白虎が姿



大学に寄贈された白虎

を現し、そのキラキラ光るブ

ルーの目が私を見据えた時の感動は忘れることができません。しかも、頭だけではなく、胴体膜と立派な尻尾もついていました。それは市川さんのご主人が作って下さったのだそうです。この白虎は、現在聖学院大学で、学生たちの日常を見ています。

虎舞は、新築祝い時にも参上するそうです。慶事を祝う存在なのですね。

つれづれ思うに、虎たちは決して神様の従者ではないのではないかと。三陸沿岸の漁師さんの気持ちを表現する象徴なのではないか。三陸の方々は、虎の姿を借りて、一層気持ちを高めることができている。人の姿では超えられない気持ちの表出を、虎になることで超えることができているのではないかと。かくして地域ごとの虎舞の形は、そこで暮らす人々の思いによって様々に形成されていったのではないかと、思いをめぐらせます。

2018年の港まつりにも私は参加します。虎舞について新たな発見があるかもしれません。釜石と関わりながら虎舞考察を続けていこうと思っています。

ビバ！ 釜石虎舞

2

想い・元気を届ける

菊地 順

大井恵子

山口雄大

児玉拓哉

金谷京子

前島沙紀

守屋有紀

坂本佳代子

島村宣生

古橋 亮

坂本佳代子

由木加奈子

川田虎男

西浦昭英



初めてのサンタプロジェクト／大学あげでのオーナメントづくり／被災地に桜を／釜石よいさ／子ども遊び広場／ハンドマッサージ／2年通った学童保育くりりんと鶴住居幼稚園（仮設）での遊び／キッズかけっこ教室／さんつなでの長期ボラ／2016年台風10号に関係するボランティア／防災教室／釜石の話を礼拝で

釜石での出会いから始まった

2-1

初めてのサンタプロジェクト

菊地 順

夜行運転で釜石へ

2011年12月9日（金）夜9時30分過ぎに、私たちは釜石市鶴住居地区を目指して聖学院大学を出発しました。鶴住居地区で初めてのサンタプロジェクトを行うためです。日程は、車中泊を含めて2泊3日でした。3台の自動車に分乗して出発しました。私は、自分の車を運転しました（釜石市にはその後何度も行くことになりましたが、自分で運転したのは唯一この時だけです）。人数の関係で、車を出すことになったのです。岩手はすでに冬の季節で、雪とアイスバーンが心配でした。そこで、急遽、大学の近くのガソリンスタンドでタイヤをノーマルタイヤからスパイクタイヤに履き替えての出発でした。助手席には左近豊人間福祉学部チャプレン（大学所属の牧師）（当時）が乗り、元気に出発しました。しかし、釜石市までの約550kmの道のりは、本当に長かったというのが本音です。

途中3度ほど休憩を取りましたが、そのたびごとに寒さが増して行きました。加えて、午前1時、2時となると、体が段々自分のものではなくなっていくように感じて行きました。そして、東北自動車道を降り、一路釜石市を目指して国道を走り始めたところから雪道となり、一方ではスリップをしないように気を使いながら、また他方では眠気と戦いながら、必死の運転となりました。そのため、釜石市に無事着いた時は、本当に安堵の思いに満たされました。

みんなでクリスマスのオーナメントづくり



この年の3月11日、東日本大震災が起きました。震災の直後から、聖学院大学は被災地に向けての支援活動を始めました。最初に行ったのは、仙台市にあるキリスト教大学への支援でしたが、その後次第に釜石市の鶴住居地区との関係が深まり、そこがボランティア活動の主たる場所となっていきました。そして、聖学院大学の復興支援は、初

仮設住宅にオーナメントをお届けする

めはがれき撤去などのボランティア活動が主でしたが、次第に被災地の人たちとの交流が加わって行き、11月にサンタプロジェクトの計画が立ち上げられました。それは、キリスト教大学にふさわしい支援活動をしたいとの思いからでした。具体的には、被災地の子どもたちを集めてクリスマス会を開くことと、仮設住宅をまわって被災した人たちにオーナメント（クリスマスツリーに飾る飾り）に託したクリスマスの喜びを届けることでした。

大変だったのは、オーナメント作りでした。オーナメントを手作りしようということになり、作業が始まりました。バルベットの布地をクリスマスツリーの形に切り、それを二枚重ねて縫い合わせ、その中に綿を入れるのです。手際が良い人は数分でできましたが、人によっては悪戦苦闘でした。できるだけ多くの人に参加してもらおうということになり、学生、教職員はもちろんのこと、学長にも参加してもらい、また聖学院教会の人たちにも応援をたのみ、たくさんのオーナメントを作りました。そのため、出来上がりはバラバラでしたが、しかしすべて手作りの温かさがあって、大変良いものができたと自負しています。それを短いメッセージを記したカードとともに透明の袋に入れて配ったのです。

配布した当日、いくつかの仮設住宅を巡りました。そして、それぞれのところで、二人一組となり、一軒一軒に声をかけながらオーナメントを届けました。たいてい、どの人たちも笑顔で応じて下さったのが印象的でした。中には、クリスマスツリーに飾るオーナメントと言われても、よく分からない人もいたかと思いますが、おそらく、小さなプレゼントとともに私たちの訪問自体を喜んで下さったのだと思います。それぞれが短い出会いでしたが、訪問した私たちも心に温かいものを感じた時を過ごすことができました。

■ 心温まるクリスマス会

もう一つの目的であったクリスマス会も、大変心温まるものでした。どれくらいの子どもたちが集まってくれるか心配ではありましたが、釜石の主任児童委員の人たちの協力もあり、会場となった鶴住居地区の日向集会所には40名ほどの親子が集まってくれました。事前に会場を簡単に飾りつけし、クリスマスの雰囲気を出しました。予定の時間が近づくと、子どもたちが母親とともにやってきました。初めは慣れないのか静か



初めてのクリスマス会

でしたが、クリスマス会が始まると次第ににぎやかになって行きました。クリスマスソングを歌ったり、クリスマスの絵本の朗読を聞いたり、クリスマスグッズを作ったりと、学生たちがサポートするプログラムに親子で一緒に参加し、大いに楽しんでくれたようです。最後には、サンタクロースとトナカイのぬいぐるみを着た学生たちが現われ、プレゼントを配り、会場を一層盛り上げました。2時間ほどの会でしたが、子どもたちを中心に釜石の方たちと交流を深めることができ、非常に思い出深いひと時となりました。

復興支援を通しての出会いの不思議

この時の目的は以上の二つでしたが、3日目の11日は日曜日でしたので、私たちは釜石市にある教会を訪れ、礼拝と一緒に守りました。訪れたのは、釜石市大町にある日本キリスト教団新生釜石教会でした。この教会も津波の被害にあい、多くの損傷を受けていましたが、私たちが訪問した時は、壁や窓にベニヤ板などがはられ、応急処置がされていました。礼拝には、地元の教会員のみならず、ボランティアに来ていた人たちも多数参加していました。そして、そこでも、いろいろな出会いがありました。

振り返って見ますと、今まで、この震災がなかったら決して出会うことがなかったであろう人たちとの出会いがたくさんありました。それは、この震災の支援の取り組みの中で繰り返し経験した、不思議な出来事であったとも言えます。そして、それは、私たちの活動を支える力ともなっていました。また、参加した学生たちにとっては、そうした出会いを通して、改めて自分自身を振り返り、新たな成長のきっかけともなっていたようです。サンタプロジェクトだけではなく、その他のプログラムでも、帰りのバスの中では、参加者全員が感想を語り合う時間がありますが、今までそこで語られた一つひとつの内容は、教員としては是非ご両親に聞かせてあげたいと思うほど感動的なものでした。それは、震災という衝撃的な悲しい出来事の中から生まれ

てきた一条の希望の光でもあります。そうした希望の光が、これからも被災地の復興の力となっていけば、幸いです。



新生釜石教会で礼拝を守る学生と教職員

2-2

大学あげてのオーナメントづくり

大井 恵子

■ サンタプロジェクトのあわただしいスタート

2011年11月中旬、平先生がキリスト教センターを訪ねてこられました。クリスマスが近いので、手作りのクリスマス飾りを釜石の仮設住宅にお住まいの方々にお贈りすることはできないだろうかという相談でした。震災から少し時間もたち、被災地では音楽やアート、手作りの物など、生活に彩りを与える非日常的なものが必要とのことでした。キリスト教センターも何かお役に立ちたいと考えていましたので、協力させていただくことになりました。これが「サンタプロジェクト」の第一歩です。

12月にお届けするためにはのんびりはしてられませんでした。毎年、その頃になると聖学院教会ではバザーのためにリース作りをしていたことを思い出し、復興支援ボランティアの学生たちとお仕事会に伺い、自分たちにできそうなものを選びました。そして、翌日、11月16日の学内の復興支援委員会です承され、サンタプロジェクトがスタートしました。

■ オーナメントづくりの輪が拡大

すぐに布、針、糸、キルト、綿を購入し、デザインを考え、翌週には学生たちと一緒に、昼休みにガルスホールで、デモンストレーションも兼ねて作り始めました。クリスマス柄の布で作るツリー、鐘、ハート型のオーナメントですが、小学校の家庭科以来、針を持つのは初めてという学生たちが、まず、玉結びをマスターすることから始めました。昼休みを延長して行ったのですが、最初は一人1個、作るのがやっとでした。釜石にオーナメントを持って伺う日は12月10日と決まっていたので、約15日間で600個作り上げる必要があります。この先、どうしようかと考え込んでしまいました。



学生・教職員の有志が一堂に介してオーナメントを作成



4号館奥のコーナーは学生たちのお針子場に

それから昼休みは毎日、4号館食堂奥のコーナーは、お針仕事の場所となりました。学生たちは友たちをさそって集まり、楽しそうにおしゃべりをしながら、針を持つ手を動かしていきます。彼らの腕前はどんどん上がっていき、最後の難関、オーナメントにリボンとスパンコールを付けることも、あつという間にマスターしていきました。

各学科会でサンタプロジェクトを紹介しましたが、最初に欧米文化学科がまとめて

100個引き受けて下さり、先生方からはゼミで作るから、家で家族と作るのではと声をかけていただきました。学生相談室では部屋に集う学生たちが作り、チャブレン会でもお針仕事を行いました。オーナメントは綺麗にラッピングをして、カードを入れお渡しすることにしましたが、残された時間はなく、ラッピング作業は職員総動員での仕事になりました。

■ オーナメントとともに思いを届ける

オーナメントは600個の目標で始めたのですが、最終的には845個作ることができました。その数の多さに、学生、教職員の被災地を思う心を感じました。そして、12月9日の深夜、3台の車にオーナメントを乗せ、学生6人、教職員7人で釜石に向けて出発しました。

釜石には朝7時前に着きました。冬の冷たい空気の中、静まり返った町がありました。車を降りて歩き始めましたが、道路わきの家は枠組みと少しの壁だけが残り、それ以外は何もありません。皆、沈黙のまま歩いていました。朝食後、すぐに子どもたちとのクリスマス会が行われる日向集会所に向かいました。生の音楽に触れていただくという目的もありましたので、SPO（聖学院大学フィルハーモニー管弦楽団）の学生が4人参加していました。ビオラ、クラリネット、トランペット、マリンバの4種類の楽器でクリスマスソングが演奏できるよう楽譜に手を入れ、練習を重ねて参加しました。簡単な楽器の説明も交えての演奏やクリスマス絵本の読み聞かせを、子どもたちは楽しんでくれました。

午後はオーナメントをお渡しするため仮設住宅を訪ねることになっていました。私は釜石の少し奥まった所にある箱崎地区に何うことになり、車で向かいましたが、入り組んだ海岸沿いに建つ家はすべて流され、破壊されていました。町が消えてしまったようでした。一瞬にして家を、持ち物を、思い出を、仕事を、そして、もしかした

ら家族を失っておられるかもしれない方に、「クリスマスのオーナメントを作ったので、お届けにきました」と言ってもよいのかと、箱崎に向かう車の中でずっと考えていました。



釜石にお届けしたオーナメント

最初に伺った仮設住宅は、廃校になった小学校の前庭に建てられていました。まわりには何もない、車がなければ生活ができないような場所です。住みやすい環境でも建物でもありません。私たちのグループには鶴住居地区生活

援センターの保健師の方が加わって下さり、最初はその方と一緒にお訪ねしました。保健師は若い方でしたが、仮設住宅で生活をされている一人ひとりの状況が良く分かっていて、ていねいに声をかけ気づかっていました。仮設住宅の方は、孫のような保健師の方と安心した様子で話しをされていましたが、このような相手を思いやるあたたかな関係作りが、震災後、いろいろなところでていねいにされていたのでしょうか。その後、一人で回りましたが、皆さん自然に受け入れて下さり、こちらの緊張を取り除いて下さるような声掛けに、プレゼント作りに参加した学生や教職員の方々の思いも受け止めて下さっているような感じがしました。

釜石のファンに

その夜、海の上に大きな月が出ていました。月の光が海面に映り、一本の輝く線となって砂浜の方に向かって続いているのです。その光は釜石を優しく包みこんでいるかのような感じでした。当日宿泊をした宝来館の女将さんが、それは「月の道です」と教えて下さいました。

「釜石の、東北のファンになってもらいたい。そして、復興後も来てほしいと思っている」と、避難所のリーダーをされ、釜石の観光ボランティアガイドの顧問をされている柏崎さんが言われました。私は釜石でお会いした方々、美しい自然との出会いを通して、釜石のファンになりました。それまでは東北の被災地の一つであった釜石が、私の中で特別な場所になったのです。

被災した教会での「世界で最初のクリスマス」の話

釜石での2日目は日曜日でしたので、全員で新生釜石教会の日曜礼拝に参加しました。そこで聞いた説教を今でも覚えています。このような内容でした。「クリスマスの物語に出てくる人物は、皆、無防備の状態にいる時に神さまと出会ったのです。マ

リアにとっては、ある時、まったくありえないことがその身に起こることを告げられました。羊飼いは寒い寒い冬の夜、杖だけを持って広い草原で羊の番をしていました。博士たちは長い旅で疲れきっていました。そのような中、赤子という、一番、無防備の形で、神さまはイエス様をおくって下さったのです。」新生釜石教会の壁は津波で流され、木材で囲われただけの礼拝堂でした。その中でこの「世界で最初のクリスマス」の話が語られたのです。

3.11の大震災後も日本列島は多くの自然災害、地震、台風、豪雨、そして、尋常ではない猛暑に襲われています。大自然の脅威の前に人は無防備な状態で立たされていることを思い知らされています。でも、考えてみれば人は皆、無防備な状態で生きているのではないのでしょうか。無防備であることを実感することが、命の大切さ、生きることの意味について考えることにつながるのかもしれない。

先日、久しぶりにボランティア活動支援センターの職員とお話をし、2011年に小学生だった学生が、2018年度の釜石ツアーに参加したと聞きました。センターの働きは続き、次の世代へとバトンが渡されていることを嬉しく思っています。

2-3

被災地に桜を

山口雄大

「復活の象徴」である桜に想いを乗せて

2011年3月11日に発災した東日本大震災。発災から間もなく聖学院大学には、復興支援ボランティアセンター（現ボランティア活動支援センター）が立ち上がりました。後に、学生スタッフとして活動に取り組んだメンバーを中心に「復興支援ボランティアチーム SAVE (Seigakuin All Volunteer Effort)」が発足し、「桜プロジェクト」等の被災地のニーズに合わせた復興支援活動を大学と協力しながら行いました。

春の訪れを告げる桜プロジェクトは、2012年4月21日に宝来館の星めぐり広場で初めて行いました。桜は、自然のサイクルの中で再び咲くことから、「復活の象徴」と呼ばれています。桜プロジェクトは、「東日本大震災で多くの大切なものを失った中でも、新たな出会いや出発がありますように」というメッセージを届ける活動として行いました。また、当時の仮設住宅には様々な地域の住民が入居されていました。「住民同士の交流をしたいけどなかなかできない」「こもりがちな高齢者の問題」等のニーズに応えるために地域住民同士の交流のきっかけも作ることを目的に行いました。

桜プロジェクトの実現に向けて

桜プロジェクトは、SAVEが中心となって、ボランティア活動支援センターの協

力を得ながら準備を進めました。2011年12月、宝来館女将の岩崎さんに桜プロジェクトの説明を行いました。岩崎さんから、「釜石市は災害のたびに復興のシンボルとして桜を植樹してきた歴史がある」というお話を聞き、桜を届ける活動への想いが一層強まりました。その一方で、企画の初期段階では、仮設住宅に桜を植樹することを検討していましたが、塩害被害や復興に向けた都市整備計画が定



仮設住宅に盆栽桜をお届けする

まっている中、桜を植樹することは難しく現実的ではありませんでした。どうすれば桜を届ける活動を実現することができるか学生と教職員で協議を重ねた結果、さいたま市には盆栽で有名な盆栽町という場所があることに着目し、桜の植樹ではなく、盆栽桜を届ける活動に変更しました。また、盆栽桜は仮設住宅から再建した住宅に移る時、庭に復興の記念として植樹をすることが可能であったことも選んだ理由です。

2012年2～3月に釜石市に盆栽桜を届けるために大学内外での募金活動を実施しました。その他にも多くの援助を頂き、さいたま市北区盆栽町にある「清香園」で2本株立ちの盆栽桜を148鉢購入しました。

関東地方は東北地方に比べて春の気温が高く、関東地方に盆栽桜を置いておくと開花してしまう怖れがあったため、3月中に釜石市へ開花前の盆栽桜を送りました。盆栽桜の案内等については、主任児童委員の市川さんや鶴住居地区生活応援センターの方に協力を依頼し、仮設住宅等にお住まいの方々を中心に周知活動を行いました。

桜を通じての交流

市川さんたちの協力もあって、宝来館の星めぐり広場には、仮設住宅にこもりがちな高齢者を中心に多くの方々が参加しました。はじめに、「清香園」に協力をいただきあらかじめ撮影しておいた盆栽桜の生育方法や株分け方法を上映し、盆栽桜の株分けを行いました。株分け作業をする中で、「私はこういう細かい作業が得意なの！」「孫が株分けを上手にできたので嬉しい。息子が住む市内の社宅に飾りたい」など、住民・学生・教職員の間には自然と会話が生まれ交流をすることができました。株分け後は、盆栽桜を希望する仮設住宅にお住まいの方々に直接届けに行きました。驚いたことに到着前から外に出て盆栽桜を待っていた方が多く、「楽しみに待ってました！」と住民の方から声をかけていただき、大歓迎の中、交流を楽しむことができました。

桜プロジェクト後、仮設住宅にお住まいの方から、盆栽桜の手入れなどが共通の話



盆栽桜の株分け作業

題になって、住民同士の会話のきっかけになっていることや、一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤さんから、「今回は大きな桜を植えるのではなくて盆栽桜を配布することにして正解だったと思う。一つの場所だとみんなが楽しめないけど、盆栽桜ならたくさんの方が仮設住宅で春を感じ楽しめる」というお話を聞き、桜プロジェクトの目的を達成することができたと感じました。

桜プロジェクトを通しての自分の成長

私は、「人の役に立てるやりがいのある仕事をしたい」という漠然とした気持ちを抱いて聖学院大学に入学しました。入学後、高齢者福祉・障がい者福祉・児童福祉などの福祉の分野を一通り学んできましたが、どの分野に進みたいかと問われると、特にはっきりとした答えがあるわけではありませんでした。しかし、桜プロジェクトの経験を通して「顔の見える関係性」を築く仕事をしてみたいと思うようになり、地域の福祉活動を推進する社会福祉協議会に就職したいという気持ちが強くなりました。

桜プロジェクトの目的は、こもりがちな高齢者の問題への対応や住民同士の地域交流のきっかけを作ることでした。けれども、決してこれらのニーズは被災地特有のものではなく、日本各地で同じようなニーズがあります。私は、社会福祉協議会の活動を通して地域力を高めて、「顔の見える関係性」を築くことで、「高齢者のひきこもり」や「住民同士の人間関係の希薄化」という現代社会の課題に取り組みたいと思いました。

また、その他にも物事を主体的に取り組む楽しさを味わうことができました。私は何か行動する時は、周囲の雰囲気に合わせてしまう受け身がちな性格でした。しかし、自ら主体的に動くことで、様々なことに気づくことができること、想いをもつ人々に出会い刺激し合えること、人を巻き込みながら何かを成すことの充実感や私自身の活動の幅を広げることにつながることを実感することができました。

釜石の経験を仕事に活かす

私は、社会福祉協議会に就職して2018年で5年目になります。現在は、管理課庶務係の一員として、人事・経理・庶務等、社協の裏方の役割を担っています。主な業務は、社協会員や寄付金、退職手当金に関わること、ホームページの更新、社協だより（情報誌）の作成、契約業務、歳末たすけあい運動等多岐にわたります。配属当初は、

地域に関わる機会が薄れてしまうのではないかと正直戸惑いもありました。しかし、桜プロジェクトの経験を通して得た「物事を受け身ではなく主体的に取り組む姿勢」を意識してみると、今のポジションは決して悪くないと思えるようになりました。社会福祉協議会が何に力を入れようとしているのかを近くで感じることができること、地域に欠かせない町内会・自治会、民生委員・児童委員等と関わりを持つこと、寄付をして下さる方がどのような想いを持っているのかを知ることができること、地域活動に参加・参画する若者が少ないこと等々、受け身のままでは決して気づくことはなかった多くのことに気づくことができました。

2018年度から、若者の地域参加を促すプロジェクトチームのリーダーに任命されました。試行錯誤の日々ですが、若者が地域を受け身ではなく主体的に関われるようにしていきたいと思っています。「顔の見える関係性」というのは互いを知り、助け合うことであり、それは若者を巻き込むことで大きく発展します。重要なポジションを任せプレッシャーも感じていますが、与えられた役割に自ら進んで取り組んでいきたいと思っています。

2-4

釜石よいさ

児玉拓哉

よいさ隊長になる

私が入学した時に大学が行っていたボランティアスタディツアーは、春の「桜プロジェクト」と、冬の「サンタプロジェクト」の2つでした。2014年度から、夏に復興の象徴的イベントである釜石よいさへの参加によって釜石市民のみなさんと交流することができる「よいさっ！ プロジェクト」が生まれました。

私は2014年度に入学し、春の「桜プロジェクト」を通じて被災地ボランティアに関わるようになり、復興支援ボ



釜石よいさ実行委員にお話を伺う

ランティアチーム SAVE に入会し、「よいさプロジェクト」のプロジェクトリーダーになりました。

「よいさっ！ プロジェクト」では聖学院大学だけではなく、2014、2015年には埼玉県立常盤高校、2015年には聖学院中学・高等学校、2016年からは自由の森学園高校の生徒も参加しました。

はじめは、釜石のお祭りへの参加がボランティア活動とは結びつきませんでした。また、釜石よいさってどんな感じなのだろうと疑問に思っていました。

企画が進み、私は「よいさ隊長」になりました。その後、大学職員と先輩2名と私で「よいさっ！ プロジェクト」の下見に行きました。下見の中で、釜石よいさ実行委員長である君ヶ洞さんにお会いし、「今年の釜石よいさのスローガンは『おかえりなさい、釜石の夏』と言います。2つの意味が込められていて、1つ目は震災以降行っていなかった釜石よいさへの思い、もう一つは帰省してくる仲間たち、そして震災以降新しく生まれたご縁に対する思いが込められています。」と教えてもらいました。この言葉を聞いた時、釜石は本当に力強く、そして暖かい街だと感じたことを今でもしっかりと覚えています。この話をうかがって、釜石よいさに関わる強い思いが生まれました。

再開した釜石よいさに参加する機会が得られることは本当にありがたいことです。釜石とのつながりを強く感じられるのが釜石よいさだと思います。

よいさで得られた笑顔と一体感

暑い中1時間半踊り続けるのは、決して簡単なことではありません。釜石での練習は、長くても休憩を入れて1時間程度です。ずっと踊り続けることは、練習とは比べものにならないくらいに疲弊します。足は棒のようになり、流れるくらいの汗が吹き出し、へとへとです。でも、踊り終わった後、なぜか学生はとても笑顔になります。心の底から楽しめるのです。踊る中で見える釜石の人の笑顔、一緒に踊る中ですれ違

う団体の方の笑顔、一緒に練習をしてきた学生たちとの一体感、釜石よいさを踊っている時にその一つ一つが本当に伝わってきます。実際に話しているわけではないですが、釜石の人と踊りを通してコミュニケーションを取ることができ、釜石の暖かさを感じられる、そんな釜石よいさが私は大好きになりました。

そして、2015、2016、2017年と3年間も、釜石よいさ隊長として踊りの練習や配置決めなどを担当しました。学生



釜石よいさに踊り手として参加

の仲間と踊りの練習をする時、「不格好でも、見ばえが悪くてもいいから、全力で楽しんで笑顔で踊りきろう」と良く話をしました。それは私が初めて釜石よいさに参加した時、決して踊りが上手なわけではなく、覚えるのも遅い方だったからです。それでも、当日はたくさんの人の笑顔が見ることができて、最高に楽しく踊ることができました。私は釜石よいさに参加する学生一人ひとりが、踊りを通したコミュニケーションで、釜石の暖かさ、そして釜石よいさの楽しさを知ってほしいと思います。そのような願いを持って、よいさのプロジェクトリーダーをしました。

私が卒業した次の年も聖学院大学の学生が釜石よいさに参加したという話が聞けてとても嬉しい思いです。

これからも、踊りを通して笑顔のコミュニケーションが取れる釜石よいさが末永く続いていってほしいです。また何らかり形で関わっていきたいと思います。

2-5

子ども遊び広場

金谷京子

被災後の遊び場づくり

釜石市の鶴住居地区は津波の被害がひどく、震災後、街はがれきの山となり、避難所でも仮設住宅に移っても、子どもが安全に遊ぶ場所がありませんでした。被災後、現一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校の柏崎未来さんが所属していたNPO法人ねおすは、子どもたちのために放課後の居場所づくりをしていました。私たちは、子どもたちの支援活動を、ねおすのメンバーを支援することから始めました。

子どものための活動実施経過

私たちが釜石で、大学主催でイベントを初めて行ったのは、2011年12月の「サンタプロジェクト」であり、そこで釜石の子どもたちと初めて出会いました。その後、2012年5月と8月に、「うーのはまなす仮設商店街」の駐車スペースにテントを張って「遊び広場」としての活動を展開しました。それから毎年「桜プロジェクト」、「よいさっ！プロジェクト」、「サンタプロジェクト」を行うたびに子どものための活動を実施してきました。2016年からは、「桜プロジェクト」の縮小化に伴い、「よいさっ！プロジェクト」と「サンタプロジェクト」の時のみ子どもとの活動を行い、今日に至っています（資料-4、110p参照）。

遊び広場開催にあたっての配慮

2013年の遊び広場実施の際には、津波を思い出すのか、水を嫌がる子どもがいた



初めて開催した子ども遊び広場

り、今では常連のAちゃんは、その当時はPTSDの症状があったりしました。

また、2013年の海を眼前にした宝来館前での桜プロジェクトの際の遊び広場の時には、母親を津波で亡くした子どもが、海を眺めながら「ママが海にいるんだ」と、一緒に遊んだ学生に語り、学生がどう対応してよいか分からず動揺したことがありました。震災が子どもたちの心に与えたこうした影響の大きさを感じずにはいられないケースが

遊び広場の参加者にも散見されました。

そこで、学生たちの学習のためにも、子どもと接するための注意事項（資料-3、108p参照）をプロジェクトの事前学習の際にしっかり心に留めておくように伝えることにしました。

学生たちによる遊び広場の展開

2011～12年の遊び広場開催にあたっては、被災地での遊び広場の主催経験がある臨床発達心理士会埼玉支部のノウハウを応用して、教員がプログラムの企画を行いました。その後は、学生たちができることを企画して実施するようになりました。現在の遊び広場の準備は、ボランティア活動支援センターの支援のもと、学生のプロジェクトリーダーが入念にして行なっています。年齢制限を設けずに、赤ちゃんから高校生まで参加できる内容を準備し、親御さんも一緒に楽しめるものになっています。

プログラムの中には、必ず体を動かす遊びと製作などの静的な遊びを入れ、さらに時間的な流れも静と動を考えて組み立てています。そして、子どもが自分で遊びを選択できるように配慮しています。また、釜石という地域を意識した砂鉄遊びや釜石の海をイメージした手形遊び、防災グッズづくりなども取り入れてきました。こうしたプログラムには、釜石を少しでも理解したい、釜石について学びたいという学生たちの気持ちが現れていると思います。

被災地で遊び広場活動をする意義

被災後に子どものケアが必要なことは、阪神淡路大震災の教訓としても言われていることです。ケアは後回しにせず、可及的速やかに開始する必要があります。被災地での遊び広場活動をすることには、次のような意義があると考えています。

1) 被災地は、多くの場合、地震や津波などの被害で、日常の遊び場も安全性が確保

できない状況があります。そのため、安全で安心して遊べる場を用意する必要があります。

- 2) ことに被災直後は、保護者も安否確認や情報収集、生活維持のための行動で忙しく、子どもの面倒を充分に見られない状況になりがちで、子どもも我慢を強いられることが多くなります。こうした制限からの解放ができる時間と場所が必要になります。
- 3) 子どもは困ったことや心の痛みなどを言語化することが難しいので、面接などによるカウンセリングを実施することには困難があります。子どもとともに運動をしたり、物を作ったり、または、一緒に地域のための作業をするなどの行為を通して、支援者が子どもの状態を把握し、理解して対応することが好ましいと言えます。
- 4) 長期に被災児支援をしていくと、子どもの発達の時期によって、また家庭や学校、地域環境などの影響によって、その子にとっての課題が変わっていきます。そうした課題の変化にも注目しながら子ども支援を継続していく必要があります。
- 5) 子どもに焦点を当てて支援する意義は、子どもはその地域の未来の担い手、つまり、被災前とは異なる新たなまちづくりの担い手になる可能性があるからです。震災から7年たった釜石では、正に小学生の時に被災した高校生が震災の語り部となって次の世代に語り継いでいます。これは、釜石の人々が子どもを大事にしてきた成果でもあると思います。

被災地での遊び広場活動を通して学生たちも多くのことを学んでいます。災害の影響で自由に遊べなくなった子どもたちへの配慮や、子どもの多様性や創造性への対応など。今後も学生たちが子どもから学ぶ姿勢を忘れず、遊び広場の活動を継承していくことを願っています。

2-6

子ども遊び広場「あそびーらんど」 を実施して

前島沙紀

■ わたしが初めて関わった子ども遊び広場は「くりりんの森」

私が初めて釜石を訪れたのは、大学1年生の2016年6月でした。その時は、被災地見学と小規模の「あそびーらんど」を行いました。私はそれまで被災地を訪れたことはなく、ボランティア経験もあまりありませんでした。そのため、最初に訪れた時は知らない土地ということへの不安と、ボランティア活動への緊張がありました。あそびーらんどは「一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校」が管理・運営している「くりりんの森」という自然豊かな場所で行いました。



くりりんの森のネット遊び

木々が生える土地ということを生かしたアスレチックなども特徴のくりりんの森で、その時のあそびーらんどでは、子どもたちと体を動かす遊びや、工作を行う遊びを企画しました。企画の序盤は緊張しており、子どもたちも同様に緊張していました。しかし、子どもたちは「しっぽとりやりたい！」と自分から遊びを提案して、それに大学生も一緒になって遊びました。一緒に遊んでいると緊張感がなくなり、子どもたち以上に

楽しんで遊んでいました。子どもたちの方から笑顔で「次は鬼ごっこしよう！」と自分に近づいて来てくれました。私は子どもたちの接し方を見て、「遊ぶ」というテーマの空間では、子どもも大人も場所も関係なく、誰もが「自分が今一番楽しい」という気持ちになることが目的であって、このボランティアはすごく魅力的で何より自分自身とても楽しいなと感じました。そのような子どもたちから、「子どもと遊ぶ」というボランティアをやることへの意味と魅力を教わった最初のアそびーらんどは一番印象に残っており、私が釜石であそびーらんどなどの「子ども遊び広場」を継続していくきっかけになりました。

釜石の子どもに惹かれて

それから現在にいたるまで、私は釜石でのあそびーらんどの企画や実施に関わったり、子どもたちと一緒にクリスマスをお祝いする「こどもクリスマス会」を実施してきました。多くの釜石の子どもと関わってきて、釜石の子どもたちのパワフルさと人と触れ合う時の明るさ、人懐っこさにどんどん惹かれていきました。そして、それは子どもたちだけではなく、釜石に住んでいる人たちにも共通していました。暖かくて誰にでもフレンドリーな釜石で育った子どもたちだからこそ、私は楽しく継続してボランティアができるのだろうなと気づきました。

私は保育士を目指しています。そのような私にとって、「子どもと楽しむ空間をつくる」という事を学ぶことができたことはとても貴重で、将来につながるとてもいい経験だなと感じています。釜石で学んだことを帰ってきてからも活かし、そして、釜石に「恩を返す」というような形で経験を活かしていきたいと思っています。

2-7

ハンドマッサージ

守屋有紀

子どもたちの保護者に癒しを届ける

埼玉県立常盤高校は、県内で唯一5年間で看護師養成を行う高校です。2014年度より、社会の第一線で活躍できる専門的職業人を育成することを目指したスーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）として5年間、文部科学省の指定を受けました。本校では、豊かな人間性を兼ね備えた、生涯にわたって学び続ける看護師の育成を目標に掲げ、様々な企画を考える中で、本校のSPHの核として「被災地を知り、防災に関する学びを深めるためのプログラム」を実施したいと考えました。その時に、近隣の大学である聖学院大学が、釜石での復興支援ボランティアスタディツアーを行い、継続的に活動していることを知り、本校との連携をお願いしました。その時から3年間、「よいさっ！プロジェクト」に参加させていただき、延べ44名の生徒が釜石を訪れました。

かまっこ☆あそびーらんどの中で、本校の生徒が担当したのは、「ママカフェ」の中で行ったハンドマッサージでした。「ママカフェ」は、子どもたちの保護者の方にもくつろいでいただきたいとの思いから作られたブースでした。生徒たちは、授業で学んだマッサージやアロマの効果をもとにしながら、ハンドマッサージを練習し、リラックスしてほしいとの願いから、アロマ効果のあるハンドクリームを用意し、準備を進めました。

生徒たちの中に起こった変化

参加した生徒たちは「被災された方々の思いを聞いてみたい」と思いながらも、どのように話したらよいのかという戸惑いを抱えていました。しかし、ハンドマッサージをさせていただく中で、生徒たちの中に変化が起こっていました。以下に生徒の感想を引用します。

- ハンドクリームを使って、コミュニケーションを取りながらハンドマッサージを実施した。マッサージを始めてすぐはお互い緊張していたが、手の筋肉がほぐれていくうちに緊張もほぐれてたくさんのコミュニケーションを取ることができた。また、その中で子どもを眺める親の笑顔を見ることができたり、ボランティアに来たことに対する感謝の気持ちをいただくことができた。
- お話しさせていただく中で、自分の知識のなさや表現方法の乏しさなどを痛感した。しかし、ハンドマッサージをした後に皆さんが下さった「ありがとう」「気持ちよかつ



ハンドマッサージを行う常盤高校の生徒

た」「看護師さんになったらいろんな人を助けてね」などといった温かいお言葉から元気になれたり、笑顔をもらったりすることができた。

釜石を訪れた生徒のほとんどが、現地の様子を知り、釜石の方々の温かさに触れたことで、自分たちが励まされ、元気をいただいたとの感想を残していました。釜石での経験は、生徒たちにとって大変貴重なものであり、看護観の形成に影響を与え、今後、看護師として活躍する時に活

てくるものだと思います。このような機会を与えていただきました、釜石の皆様、聖学院大学の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

2-8

2年通った学童保育くりりんと 鵜住居幼稚園（仮設）での遊び

坂本佳代子

栗林くりりんでの学童との遊び



子どもたち一人ひとりと握手をするゼミ生たち

坂本ゼミでは、2015年と2016年の夏に釜石でのゼミ合宿を実施しました。この2回の合宿でもに関わらせていただいた活動をご報告させていただきます。児童学科の学生だからこそプログラムしていただいた活動であったらうと感謝しております。

●まずは学生が「くりりんのもり」の栗のイガ拾いをしました

- 子どもたちは大学生のお兄さん・お姉さんとすぐに打ち解け、思いっきり遊びました
- 学生も子どもに誘われ、要求されて120パーセントの力を出して遊びました
- 遊びが満たされた後の帰り道で「お姉さんは結婚してるの？」など、人生について問いかけてくる子どもたちに、女子学生たちはドギマギしていました。

■ 鵜住居幼稚園での子どもたちとの関わり

2015年は草むしり、2016年は運動会予行演習のお手伝いボランティアを実施しました。その経験を踏まえ2016年は手製の大型紙芝居「大きなカブ」を準備していききました。子どもたちからは虎舞の披露があり、心に残る楽しい交流となりました。

2-9

キッズかけっこ教室

島村 宣生

■ 田野畑村での経験を釜石で

体育会陸上競技部では、2014年から4年間継続して、部員有志を岩手県田野畑村の若桐保育園・たのはた児童館にスポーツボランティアとして派遣してきました。その経験を活かして、釜石でも「キッズかけっこ教室」を実施することはできないかと考え、2017年12月のサンタプロジェクトの際に、主任児童委員の市川さんのご紹介で、釜石市保健福祉課、生涯学習文化スポーツ課を訪れました。震災以来、公園に仮設住宅が建設され、子供たちの運動機会が不足していることから、走るという運動をテーマにした当プログラムに関心を持っていただきました。

そして、2018年9月に、かまいしこども園の園児（4～5歳）を対象にした第1回キッズかけっこ教室が実現しました。

教室の前日に、釜石こども園の川原副園長先生、東（あずま）先生、新田先生と打合せを行いました。翌日の天気



子どもたちに動きを教える陸上部の学生たち

予報が雨ということで、釜石小学校体育館で行うこととし、釜石市の担当者に了解いただきました。会場となる釜石小学校は、井上ひさしさんの素敵な校歌で著名です。小学校は小高い丘にあり、校庭からは市内が一望できる気持ちの良い環境でした。

体育館でリハーサルを繰り返しました。体育館では30m走はできませんが、うまく足を接地すると大きな音がし、足先など不十分な接地の場合音がしないというように、接地を習得することに適していることがわかりました。

■ 早く走れるようになった子どもたち

当日の9月1日は防災記念日のため、早朝から防災無線から避難訓練の放送が流れていました。都合により会場を体育館から校庭に変更し、13時から教室を開始しました。園児が3班に分かれ、走る基本的動作を指導する学生が各班に一人ずつつき、以下のメニューを実施しました。

- ジョギング
- 準備体操・ストレッチ
- 30m走（1回目）
- ラダーを用いた動き作り（3種類）
- スタート動作、ゴール駆け抜け
- 給水タイム
- 30m走（2回目）
- シャトルリレー（30m×2）

参加した園児は、かけっこ教室の参加を希望しただけにやる気があり、楽しそうでした。東先生と新田先生が素早く園児を誘導され、円滑にメニューを進めることができました。ほとんどの園児に幼児期特有の即座の習得が確認できましたが、30mを走り切れない園児も見受けられ、やはり運動機会が不足しているように思われました。しかし、園児は速く走れるようになりたいと意欲的に取り組み、大半の園児が1回目より2回目の記録が上回り、運動教室などで走る機会を増やすことの必要性を感じました。教室の最後に、学生が「また来てもいいですかー！」と園児にきくと、「いいよー！」と園児たちが笑顔で応えてくれ、このやりとりをする時が学生たちのもっとも幸福な時間です。

参加した学生たちは、活動の合間に釜石市鶴住居地区と大槌町の見学や一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤代表による「釜石の小中学生が避難した道をたどる」プログラムにも参加させていただき、初めて釜石を訪れた学生にとって最高の学習機会となり、充実した3日間を過ごすことができました。

釜石市において学生がスポーツボランティアとして活躍できたことは、課外活動の新たな一歩であり、今後も継続した活動ができるよう願っております。

釜石で修士論文を執筆

「釜石市に行くので、一緒に行きませんか」。指導教授である平先生のこの一言が、私と釜石、私とさんつなの出会いのきっかけでした。元より、NPOのマネジメント論やボランティア論について研究するために修士課程に進んでいた私は、二つ返事で釜石行きを決めました。そして、当時一緒に平先生の講義を受けていた学部4年生の岩井君とともに、2012年8月26日から9月2日の8日間、東日本大震災から1年半が経とうとしているころ、はじめて釜石を訪れたのです。

私と岩井君より早く釜石を訪れていた平先生は、私たちが釜石に到着すると、市内を案内してくれました。釜石を訪れる前の私は、ニュースなどで、復旧・復興が進まないとの報道を見聞きしていましたが、両石漁港、根浜海岸、元鶴住居防災センター等、沿岸部に生々しく残る津波の爪痕を実際に目にして、言葉が出ませんでした。

釜石ではじめてお会いした方は、うーのはまなす仮設商店街で営業していたパン屋「あんでるせん」のおかみさんでした。私が、「釜石で初めてお会いした方が、釜石一番の美人で驚きです!」と声を掛けると、おかみさんをはじめ、平先生と岩井君も苦笑。盛大に「すべった」エピソードは、今でも平先生にネタにされます。

初めての釜石滞在中は、平先生の調査の手伝いや、牡蠣の養殖ロープの重り作りのボランティア等に参加して過ごしました。この初めての訪問の折、さんつなの伊藤聡さんやジョイさん（柏崎未来さん）、埼玉から長期ボランティアに参加していて、私に「まめしば」というボランティアネームを付けた、同じ歳のしんちゃん（小川真治さん）の他、多くのボランティア仲間と出会い、震災から7年経つ現在でも交流が続いています。

その後も何度か釜石を訪れていますが、長期ボラという意味では、2013年7月25日から9月3日までの間、お盆休みを挟んだ1ヶ月程度滞在していた頃が、これにあたります。当時、私は修士論文の執筆とボランティア活動参加のため、さんつなのベースのあった栗林の仮設住宅と旧橋野へき地保育所に寝泊まりしながら、活動に参加しました。

災害時向けのまきまきパンづくり

滞在中に関わった事のひとつに、パン作りがあります。製粉会社の社員が参加する研修ツアー受け入れの準備として、災害時でも作れる小麦粉を使ったパン作りに挑戦しました。その名も「まきまきパン」。フィールドは、宝来館の駐車場でした。マッ



まきまきパン

チを使い、あたりに落ちている松葉や松ぼっくりなどをたきつけにして火をおこします。根浜海岸で手ごろな流木を拾い、洗った後に、パン生地をねじりながら巻きつけ、巻き終わったら均一に熱が通るように火にかけるのです。流木の太さ、巻きつけるパン生地の太さ、火との距離、やってみると結構奥が深いのが分かります。作る人によって大きさも形もまちまちで、お互いのまきまきパンを比べながら焼くのは、楽しくもあります。もちろん、災害時を想定してのパン作りではありますが、こうして平時に、楽しみながら災害時の対応力を高めることは、工夫

次第でどこにいてもできますし、心がけなければならないことだと感じました。

まきまきパン作りの他に、夏休みこどもキャンプ、いのちの道体験ツアー、釜石バイアスロン（当時）の海岸清掃、山田周正さんの菜の花畑の草刈り、釜石よいさの事前準備等、実にいろいろな活動にボランティアとして参加させて頂きました。残念なことに、私はどの分野も素人ですし、褒められた貢献はできなかったのかもしれませんが。しかし、そのような中でも、目の前の出来事、出会った目の前の人に対して、誠実に向き合うことはできたのではないかと思います。

■ 私にとっての「ひとつなぎ」

釜石との出会い、さんつなとの出会いで、私が一番強く感じたことは何だったのだろうか、ふと考えることがあります。そこで思い当たるのは、「ひとつのつながり」です。伊藤さん、ジョイさんが「三陸ひとつなぎ自然学校」の名前に込めた思いは、間違いなく、結実し伝播しているのだと、強く感じます。しかも、それは三陸に留まらず、日本全国、世界各地にまで。さんつなで出会った仲間は、年齢も、生まれた場所も、学校も、仕事も、得手不得手も、みんな違います。それでも不思議なことに、さんつな・釜石という共通点でつながっています。釜石では一度も会ったことがないにもかかわらず、東京など各地で開催される同窓会「さんつな会」で初めて出会う仲間もいます。そのような私たちをつないでいるのは、間違いなくさんつなの魅力ですし、釜石の魅力なのです。

さんつなボランティアのメンバーは、釜石を去る時に、思いのたけを紙に書いて写真撮影をするという伝統の「さんつなボラ voice」があります。実は、私がこの第1号だったことがちょっぴり誇りです。私は、釜石での最終日、「大きな苦難に遭っ

た釜石だからこそ、“世界一笑顔の溢れるまち”にしたい。しなきゃいけない！！
2013.9.3 古橋亮（まめしば）」と記しました。今もこの気持ちは変わりません。次に釜石に行く日に、さんつなの仲間に出会う日に、自分も笑顔で、そしてみんなも笑顔にできるように、もっと自分を磨こうと思っています。

2-11

2016年台風10号に関する ボランティア

坂本佳代子

2016年8月29日から30日にかけて、岩手県は台風10号のため甚大な損害を被りました。岩泉町では高齢者ホームが浸水し、26名が亡くなりました。釜石市においても大規模土砂災害が発生し、人的被害は免れたものの、復旧に向けて多大な労力を要する大災害となりました。

直後の9月に釜石で行うゼミ合宿を、三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤さんにアレンジしてもらっていましたが、「今回の台風では、橋野高炉辺りも大変なことになっていると伺いました。予定を変更して橋野辺りの泥かきボランティアでも何でも、出来ることをお手伝いしたい。」と、伊藤さんに連絡をとりました。そして、参加する学生にも、「現地の人のお役に立つボランティアを経験する合宿ですので、場合によっては、スケジュールを一部変更し、泥掻きや、引っ越しのお手伝いなどをすることもあり得ます。軍手・タオル・マスク・帽子も持って来てください。」と連絡しました。

かくして合宿では9月5日と6日は橋野地区の泥かきをすることとなりました。

橋野に向かう車の中から外を見ると、橋は壊され、護岸はえぐり取られていました。護岸工事と並行して、土砂でせき止められた川の中でブルドーザーが作業を進めていました。

現地の方の次の言葉が忘れられません。「3.11は海から津波が遡上してきた。今度は山津波が下流まで襲っていった。海からと山からの津波の到達地点は、たまたま同じ場所だった。これで海から山まで全部被害に遭ったことにな



泥かきをするゼミ生たち

る。」海と山が接近しているリアス地形の釜石市が抱える、苦しい被災実態を見せつけられた気がします。

2-12

防災教室：大学生として、 釜石の高校生の思いを応援！

由木加奈子

誘われて参加

当時、大学4年生だった私を、「コミュニティサービスマーケティング」という授業の1期生として、講師であるボランティア活動支援センターの川田さんが誘ってくれたことが、「釜石〇〇^{まるまる}プロジェクト」に参加しようと思ったきっかけです。埼玉県的大学生と釜石の高校生、この出会いによってどのようなものが生まれるのか、すごくワクワクしていたのを覚えています。

かろうじて結成された防災チーム

2018年2月に実施した鶴住居小学校での防災講座の当日まで、思いがぶれることなく最後まで走り切った5人の高校生。しかし、私たち大学生と出会った当初は、「大学受験に有利になるかも」という軽い気持ちでの参加だったのかなと思います。

そもそも、この「〇〇プロジェクト」が動き始めた時、高校生の興味関心は2つの方向性がありました。郷土料理の魅力を伝えたいという思いとハザードマップを子どもたちでも見やすいものにしたいという思い。しかし、どちらかといえば郷土料理に気持ちが向いている印象で、防災についての企画はなくなる可能性もありました。結局、「高校生5人と大学生5人もいるのに1チームだけだと……」と高校生が空気を読んで2つに分かれてくれて、かろうじて結成されたのが「防災チーム」でした。

ファシリテーターに徹する

参加を決めた時から、防災についての専門知識も震災の経験もない私が、高校生のために大学生としてできることは何なのか考え続けていました。そして、高校生に直接会ってみて、私の選んだ関わり方は「ファシリテーター」になることでした。当時は私自身も企画づくりの経験はほとんどなかったのですが、ボランティア活動支援センターの職員がいつも大学生にしてくれるサポートを参考にしながら、見よう見まねでやってみました。どこまでできたのかは分かりませんが、高校生の思いをていねいに引き出すこと、その場の状況を整理すること、大学生の思いを押しつけないことを意識するようにはしていました。

■ 実体験の話から空気が変わった

高校生と企画づくりをしていた中で、私が今でも忘れられない瞬間があります。高校生にとって、防災に関する「自分事」が何であるのかを知りたくて、東日本大震災当時のことを高校生に話してもらった時のことです。その時、メンバーの一人が語ったのが、津波でんでんこの言い伝えを守り、中学生のお兄ちゃんと一緒に高台に逃げたという実



小学生に向けて防災教室を実施する高校生たち

体験でした。「小学4年生だった当時は、津波のことをあまりよく分かっていなくて、もし中学生と一緒にいなかったら津波にのまれていたかもしれない。」彼女がこの話をしてくれたことをきっかけに、その場の空気が変わった気がしました。「今の小学生にも津波でんでんこを伝えて、自分の力で逃げられるようになってほしい」、高校生の思いが一つになって、私たち大学生もその思いを心から応援したいと感じました。こうして、当時の彼女たちと同じ小学4年生を対象にした「防災講座」の実現が防災チームの目標になりました。途中から郷土料理チームだったメンバーが加わり、高校生5人で企画の実現に向かって再出発することになったのですが、この思いはみんなの中で共通していて、最後までぶれることはなかったと思います。

■ 頑張りたい気持ちと不安との葛藤

「高校生の思いを形にした」、それは大学生としての私の思いで、そのために自分ができることを頑張りたいと思いました。しかし、それと同じくらい不安で、投げ出したかったというのが私の正直な気持ちでした。企画が進めば進むほど、高校生が頼ってくれるようになって嬉しかった半面、そのような高校生に自分が応えられる自信がなくなっていくのが怖かったです。



防災教室直前のテレビ会議

そのような私の背中を押してくれたのは、この企画をサポートしてくれていたボランティア活動支援センターの職員や釜石側の伴走者の方々の存在でした。大げさなくらいほめてくれるし、私たちと一緒に悩んで、真剣に向き合ってくれる人たち。私も高校生にとって、そのような存在になりたいと思うようになりました。

Ⅰ かつこよかった高校生

2018年2月27日、鶯住居小学校の4年生を対象に、高校生による「防災講座」が実現しました。授業時間の45分間、高校生が悩みながら創りあげた、「実体験をもとにした手作りの紙芝居」と「防災のクイズ」を届けました。たくさんのメディアに囲まれながらも、堂々と自分の言葉で思いを伝えている高校生は、すごくかつこよくてキラキラしていました。何より、終わった後に「やってよかった!」と全員の表情から達成感と自信が感じられたのが、自分のことのように嬉しかったです。最後まで、逃げなくてよかったと私自身も心から思いました。

Ⅰ そして、今私は釜石に

大学を卒業した私は、釜石市に移住し、釜石リージョナルコーディネーター（釜援隊）としてまちの復興のための活動を続けています。この決断のきっかけになったのは、この高校生との出会いがあったからです。

「震災から7年、これからの復興は現地の人が立ち上がることが求められている。私が主役になることはできないけど、外の人だからこそできる応援があるのかもしれない。」

この企画を通して、高校生に教えてもらったことです。

現在、この「釜石〇〇プロジェクト」は2期生が生まれ、思いの実現に向かって動き出しています。高校生の思いがどんな形で着地するのか、そこから何が生まれるのか、「釜石側の伴走者」として今年も見届けられることが、何だかとても嬉しいです。

2-13

防災教室

川田 虎男

Ⅰ 釜石の高校生の思いを形に

「釜石の子どもたちに、地震が来たらすぐに逃げることの大切さを知ってもらいたい」という、釜石の高校生の願いから始まった防災講座。本人も東日本大震災当時小学4年生で、地震直後に小学校から高台へ避難した経験をしたことで、「自分も小学校での学びや、震災当日中学生に手を引かれて、津波から逃れることができた。今度

は自分が子どもたちの命を守る番」との思いで、同級生と大学生に支えられて、講座を実現することができました。

実は、この講座は最初からやることが決まっていたものではありません。従来の活動のように、現地のニーズに基づいて大学生が活動をさせていただくことも大切ですが、地元釜石の高校生と聖学院の大学生が会うところから始めて、釜石の現状や課題、高校生と大学生の思いを語り合



学生と高校生との夏合宿

う中で、「自分たちができる

〇〇プロジェクト」「自分たちにしかできない〇〇プロジェクト」を考え、実現していこうという趣旨で本プロジェクトが始まりました。そのため、高校生・大学生は最初出会った時、何をするかも、何ができるかも、そもそもお互いのことすら知らない中から、互いに知り合い、釜石のことを学び合い、そして自分たちのできることを話し合い、たどり着いたのが「自分自身の被災経験に基づいた防災講座の実施」でした。

見本は「釜石〇〇会議」

この釜石〇〇プロジェクトには、本家があります。ご存知の方も多いと思いますが、釜石のホームページでは、本家の「釜石〇〇会議」について以下の説明がなされています。

釜石〇〇会議は、釜石に想いのある若者らが集い、語り合う場、より楽しく納得できる釜石の実現に向けて、自らの手でカタチにするための「新たな一歩・行動」を応援する場として開催しています。

※〇〇（まるまる）には、参加者がそれぞれのやりたいことを〇〇に入れて、自ら企画し行動して欲しい、という願いを込めています。

出典：釜石市ホームページ

http://www.city.kamaishi.iwate.jp/shisei_joho/keikaku_torikumi/chihouseusei/detail/1197592_3278.html

釜石の高校生と聖学院大学の学生による「釜石〇〇会議」、それが「釜石〇〇プロジェクト」です。なお、本名称の使用については、釜石市の了解をいただいております。かつ事業の後援をしていただきました。

プロジェクトが生まれた背景

このプロジェクトが生まれた背景にも少し触れたいと思います。釜石との関わりも5年を迎えていた2016年。年に数度訪れる程度の私たちから見ても、釜石の姿は少しずつ復興に向けて歩み出していることが伝わってきていました。そのような中、ボランティアとして関わる私たちも変化していかなければいけないと考えていました。三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤聡さんに、私たちのこれからの関わりについて相談していく中、マグネットアートプロジェクトを立ち上げた釜石高校（当時）の寺崎幸季さんの活動のきっかけが、域外から釜石のために活動にくるボランティア学生との出会だったことを知りました。そのことをヒントに、釜石の高校生と聖学院大学の学生による協働プロジェクトの立ち上げを思いつきました。また、2017年度から地域貢献を通して学びを深めるというコミュニティサービスラーニングという科目が始まることになっており、担当者として釜石と新しいプロジェクトを始めたいという思いがありました。それらの経緯と思いを合わせて生まれてきたのが、「釜石〇〇プロジェクト」でした。

2-14

釜石の話を礼拝で

西浦昭英

聖学院中学高等学校 朝の礼拝（2018年9月15日）

そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませて下さい」と言われた。（ヨハネによる福音書4章6-7節）

聖学院大学は、毎年夏、岩手県釜石市での震災ボランティアを実施して、男子中高にお誘いをして下さっています。今年の中3と高1の合計4人が参加しました。

皆さんは、「釜石の奇跡」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。2011年3月、釜石でも多くの犠牲者を出しましたが、市内のほぼ全員、99.8%の小中学生が、命を落とさませんでした。

釜石市北部にある釜石東中学校は、地震発生直後、校庭に並び始めた生徒たちに、副校長は「避難所へ走れ！」「点呼など取らなくていいから」と大声で叫びました。

一方、隣の鵜住居小学校は校舎の3階に児童を誘導しました。しかし、「津波が来るぞ」と叫びながら走っていく中学生らを見て、避難場所の福祉施設行きを決断し、小学生も一斉に走り出しました。小中学生は、学校から約1km、標高約10mの福祉施設に到着しましたが、裏手の崖が崩れそうになったため、中学生らがかもって高台

への移動を提案し、約 400m 離れた標高 30m の介護施設へ避難しました。この直後、高さ 20m の津波が襲いました。学校は勿論、福祉施設も水没しましたが、犠牲者は 0 でした。

学校にいた小中学生は全員無事でしたが、当日病気で自宅にいたり、保護者が引き取った児童ら 5 人と学校職員 1 人が犠牲になりました。「奇跡」と言われるのをつらく感じる遺族がいました。また、学校現場としての訓練や防災教育の成果だから、「奇跡」という言葉に違和感がありました。「釜石の奇跡」は、その後、「釜石の出来事」に改められました。

図書館から、釜石の出来事を題材にした絵本を借りてきました。主人公の中学生が、避難所で生活をしていたページを引用します。

ある日、僕は、おばあちゃんに声をかけられた。「地震のあと、皆さんが必死に逃げるのを見て、私も連れられて逃げたんだ。年よりだけだったら、諦めていたかもしれないね。」おばあちゃんが両手をあわせた。

さて、3泊4日の釜石でのボランティア活動を終えて、私たちは、宮城県石巻市大川小学校を見学しました。震災当日、在籍 108 名のうち、保護者が引き取りに来た児童以外の 74 名は校庭に集められました。小学生の足でも 3 分くらいの裏山は傾斜約 9 度、シイタケ栽培などでよく登っていました。石巻市の広報車が、高台に避難するように、ラジオ放送も津波の発生を伝えていました。ところが、教員が生徒と避難を開始したのは、地震発生後 50 分が経っていました。その 1 分後に津波に襲われ、生徒 74 名中 70 人、11 人の教員のうち 10 人が亡くなるという惨事となりました。なぜ、これほど避難が遅れたのか、ほとんどの方が亡くなったため、詳しい原因は分かっていません。

私たちを案内して下さったのは、遺族の佐藤さんという方でした。遺族は、「小さな命の意味を考える」という会を作り、積極的に語り部の活動を始めています。「子どもの話をするのはつらい。でも、もっとつらかったのは、亡くなった子どもではないだろうか」という言葉が印象的でした。

話を釜石に戻します。釜石は、来年日本で行われるラグビー W 杯の会場の一つに選ばれ、2018 年 8 月 19 日にこけら落としのイベントが開かれました。スタジアムの正式名は、釜石鵜住居復興スタジアムと言います。先ほど紹介した、鵜住居小学校と釜石東中学校は津波の被害にあい高台に新築移転。跡地を整地しラグビースタジアムを作りました。津波を克服し、復興しようという住民の熱い希望が、W 杯の誘致につながりました。

最後に、新生釜石教会の柳谷牧師の話引用します。

教会の前に、のちに「赤テント」と言われた場所を作りました。「どなたでもここへ来て休憩して、お茶を飲んでいって下さい」という場所です。最初に来たのは子連れのお母さんで、「なんか疲れちゃいますよね。みんな殺気立っていて」

と言って、一休みしました。その様子を見て、やっぱり休む場が必要なのだなと思いました。一粒の飴があるだけで、一杯のお茶があるだけで、ちょっとしたことで人々が和んでいって笑顔になっていきました。テントにはぞくぞくと人がやってきました。その人たちは疲れてテントの中に座って「水を下さい」と言うのですね。

今日読んでいただいた、ヨハネによる福音書4章は、シカルの井戸でサマリヤの女性がイエスと出会った話です。「イエスは旅に疲れて井戸のそばに座っておられた。」(6節)とあります。イエス様が水を汲んで、疲れている人に「どうぞ飲んで下さい」と言ったのではなく、イエス様が疲れて座っていて、水を汲みにきたサマリヤの女性に「水を飲ませて下さい」と言ったわけです。

被災現場で、キリスト教の牧師である柳谷先生が「はい、水をどうぞ」と言ったのは事実ですが、このヨハネの福音書を読む限りでは、反対です。「水を飲ませて下さい」と言ったのがキリストです。そして、そのようにキリストに声を掛けられた人が、救いを必要としていたサマリヤの女性でした。

常識とは反対のことが、聖書の中で起こっています。「水を下さい」と言う人に、牧師が飲ませた水は、また渴く水です。けれども、疲れてテントの中で座って「水を下さい」と言った人との触れ合いを通して、決して渴かない水が、柳谷牧師の中にワッとあふれてきました。

柳谷牧師は、このヨハネの4章に何度も何度も励まされ、「水を飲ませて下さい」と言う人々を通して、キリストに出会わせて頂いた感激に、胸が震えるような思いを幾たびもしたと語っておられます。

3 交流

金子朋寛

菅原幸秀

川田虎男

西川 正

新井達也

児玉拓哉



お母さんたちから教わった郷土料理／同世代交流／みんなでかだっぺし／仮設住宅での交流／仙寿院の柴崎住職の講話

釜石での出会いから始まった

3-1

お母さんたちから教わった郷土料理

金子朋寛

毎年、「サンタプロジェクト」で郷土料理づくり

私が郷土料理のお母さんたちに初めて出会ったのは一年生の冬でした。

当時、どのような方に教えていただくのだろうかというワクワク感と、話せるのだろうかという不安で、気持ちがいっぱいでした。しかし、実際にお逢いするとお母さんたちは、皆さん優しくて最初の挨拶から東北のなまりがあって昔から住まわれている方たちなのだと言葉を受け入れたことを今でも覚えています。

実際に作った料理は以下のとおりです。

| | | |
|---|-------|-------------------|
| ① | 2014年 | ひつつみ汁、うちわ団子 |
| ② | 2015年 | 五目おこわ、あら汁、かま団子 |
| ③ | 2016年 | 祭り寿司、じゃがいももち、どんこ汁 |
| ④ | 2017年 | 五目おこわ、ひつつみ汁、くるみ豆腐 |



郷土料理づくりでの思い出

郷土料理づくりで、今も心に残っていることを3つ書きます。

1つ目は郷土料理を作った時のことです。まず、お母さんたちが私のために料理を考えて下さり、学生の要望に合わせて料理の準備をして下さいました。

聞いたことのない料理がたくさんありました。郷土料理の由来を教えてくださいました。お母さんたちに見本を見せてもらい、更にコツもたくさん教えてくださいました。一緒に料理を作りました。野菜や魚の切り方などを知らない学生（私も含め）もいましたが、切り方も教えてくださいました。とても恥ずかしく「もう少し勉強しておけば良かった」と、先生のようなお母さんと笑いながら話したり、たくさん味見をさせて下さったりと、明るい雰囲気の中で料理を作りました。

2つ目は、実際に作った料理をお母さんたちと食べた時のことです。

最初は、私が学校生活の話をし、お母さんたちが釜石の良いところを教えてくださいました。あるお母さんが「とても良い笑顔で食べてくれて嬉しい」と、急に涙を流しながら話して下さいました。私は美味しかったのでたくさん食べていたのですが、お母さんの涙に驚きが隠せませんでした。そのお母さんは続けて、「震災時は食べる物がなくて、お母さんたちで力を合わせておにぎりを作って炊き出しをしたのよ。」と話して下さい、料理を作っていた時の笑顔や笑いが嘘のように震災時の悲惨さを話して下さいました。そこで感じたのは、建物などの再建が進み新しい町ができてきていますが、心の復興はまだまだ時間が掛かるのではないかとということです。また、もし、自分が被災し食べられない状況になったらどうなってしまうのだろうと考えてみましたが想像できません。そのようなことが起きても良いように対策をしっかり立てておきたいと思いました。そして、何よりも、お母さんたちの活動によって救われた人もたくさんいるのだろうと思い、お母さんたちは自分自身が辛くてもまわりのことを考えられる「強いお母さんたち」だと感じました。また、食べられることの幸せが本当にありがたいことで、食べ物を粗末にはしてはいけないと痛感しました。作って食べて終わりにするのではなく、大学に戻ってからお母さんたちにお礼の気持ちを込めて、作った料理をレシピにしてお母さんたちに贈りました。



地元のお母さんたちに料理を教わる学生たち

お母さんたちの優しい言葉

3つ目は、4年生の時の出来事です。

お母さんたちは、再会してすぐに「また来てくれたの？ 今年最後じゃないの？」と言葉をかけてくれました。いくら、印象が強いからといっても気にかけて下さり、私のことを覚えてくれていて嬉しかったです。また、料理を一緒に作って食べて、お母さんに「美味しそうに食べてくれて嬉しいよ。」と3年前にも他のお母さんに言われ、今回も同じように言われて、食事を美味しく感謝して頂くことは大事なことだと再認識しました。そして、4年生だったため、お母さんたちと別れる前に感謝の気持ちを伝えに行くと、何故か涙が出てきました。お母さんはたくさん暖かい言葉をかけて下さいました。「4年間来てくれてありがとう。元気が出ない時、辛い事があった時には、釜石や、釜石のおばちゃんたちを思い出してね。応援しているからね。遊びに来てよ。」と声を掛けて下さいました。

他にも色々とお話させていただきましたが、「当たり前が当たり前のようにできること。辛い時、自分を見失うことがないように頑張るだんよ。釜石を思い出してね。」と言われ、お母さんたちから逆に元気や力をもらい涙がたくさんあふれ出てきました。

4年間関わりを持たせていただき、お母さんたちからたくさんのお話を学びました。家族やまわりの人に感謝することをはじめ、挨拶すること、ご飯を食べる時には「いただきます。ごちそうさまでした。」など、食べ物に対して感謝という当たり前のことが当たり前でできること。そして、4年生の時にいただいた言葉。

お母さんたちの温かさを思い出しながら、今、生活しています。また釜石に絶対に行きたい、お母さんたちに会いたいです。

3-2

同世代交流

菅原幸秀

聖学院大学の学生と釜石の若者の意見交換会として、同世代交流を行っています。交流を通して、震災当時のことや今の生活、釜石の魅力など住んでなければ分からないことを教えてもらっています。同世代交流では、年に3回ボランティアに訪れている私たちと釜石を知る現地の方々が、釜石のためにどのようなことができるかということをお話し合う貴重な機会でもあります。

2018年4月に実施した同世代交流では、「20代で釜石を盛り上げようぜの会」の方々と一緒に、震災から7年経ったということで、今後の釜石でどのような活動をしているかということをお話し合いました。内容としては自分たちが感じている釜石の特徴をお話し合い、そこから話を広げ、どのようなことが釜石でできるかを出し合い、模造

紙に書いていきました。参加者も多く、二つのグループに分かれてグループワークの形式で意見を出し合いました。どちらのグループも個性豊かな意見が多く出ました。

釜石の特徴として挙げられたのは「海があり、山も多く、自然が豊かであり、食べ物もとても美味しいこと」です。他にも「人が温かく外の人たちを受け入れてくれるので、来た時にとっても居心地が良く、人のつながりが強いこと」、「色々なことに挑戦をし



同世代交流の進行をする菅原君

ていて、とても可能性がある地域であること」が挙げられました。また、肯定的な意見だけではなく、現地の方々からは「交通が不便なこと」「働く場所が少ない」等の意見もありましたが、私たちがそういった釜石のマイナス面を知ることで、また一つ釜石のまちの現状を学ぶことができたと思います。

また、どのようなことができるかということに関しては、「釜石の魅力ツアー」「一人暮らし世帯への訪問」「子どもと一緒に海を知ろう企画」「第二の故郷を作ろう計画」「郷土芸能を色々な人に伝えていく」「SNSを介して幅広く釜石のことや人を知ってもらう」等の意見が出ました。

参加した学生からは、震災を目の当たりにして「海」を初めて大きく意識したという話を現地の方々から聞いて衝撃的だったという話や、釜石に対するそれぞれの思いがあるからこそ釜石の人たちは魅力的だと思ったという感想が出ました。

3-3

みんなでかだっぺし

川田 虎男

釜石の人と一対一で語りたい！ 出会いたい！

釜石の人と語り合いたい。釜石のことをもっと知りたい。そんな学生たちの思いがあり、復興支援ツアーでは毎回必ず、釜石にお住いの方の話を伺い、交流をさせていただく機会を持ってきました。しかし、30人からの大所帯でお邪魔するツアーでは、



「かだっぺし」に多くの地元高校生が参加

中々釜石の方と学生が1対1で語り合う機会を作ることができず、一人のお話を30人で聞くことがほとんどで、せいぜい6～7人で一人を囲んで話を伺う機会までしか作れませんでした。「もっと一人ひとりの方と固有名詞で出会いたい。呼び合いたい。知り合いたい。」そのような、私たちのわがまをかなえるために考えられた企画がサンタプロジェクト5で実施した「みんなでかだっぺし」でした。

まず大変だったのは、釜石のみなさまに30名集まっていたいただくこと。これは完全に釜石の皆様による、学生たちへのボランティア活動です。幸いにして、当日ご一緒させていただいていた、釜石・大槌郷土料理研究会のお母さん方、そして聖学院大学がそれまでに関わりを持たせていただいた、釜石の皆様（宝来館の女将さんや、地域の民生委員の皆様、NPO おはごさき市民会議のスタッフの方々、三陸ひとつなぎ自然学校のスタッフやボランティアの皆様等々）に集っていただき、実現することができました。当日集まってくださったみなさま、本当にありがとうございました。

■ みんなでかだっぺしから生まれてきたもの

トークフォークダンスという手法で行われるこの交流会は、「学生30人×釜石の方30人」が二重の輪になって互いに向き合います。自分の目の前に座った方と、司会から投げかけられるテーマについて、1分間自分が話し、1分間相手の話を聞く。わずか2分の語らいで、すぐに次の席へと移動していくこととなりますが、そんな短時間でも一対一で語り合う時間は、学生にとっても、釜石の方々にとっても素敵な出会いの場になったようです。トークフォークダンスの後もずっとおしゃべりが続き、ここでの出会いから毎回釜石に足を運ぶ学生が生まれました。「〇〇さんにまた会いに行かなきゃ！」と。また、サンタプロジェクト7の際に行われた第二回みんなでかだっぺしでは、地元釜石の高校生が10名以上参加してくださり、学生や埼玉から来た同じ高校生との親睦を深めていました。このことがきっかけで、のちに釜石高校の生徒さんと聖学院大学の学生による協働プロジェクトも生まれました。出会いが活動を生み、その活動からまた次の出会いが生まれる、そのような循環の種になったのがこのかだっぺしだったように思います。

3-4

みんなでかだっぺし

西川 正

■ トークフォークダンスの運営上の肝は人が集まるかどうか

あたたかい釜石のみなさんと、何かしたいという学生たちが出会うのだから、集まった時点ですでに、嬉しい時間になっていたと思います。

「みんなでかだっぺし」という名前でイベントの広報をさせていただいたのですが、当然ながらはじめてのことなので、それだけでは何をするのか想像が付きません。ということは、つまり“普段のつきあい、これまでの間柄”だけを頼って、集まっていたただくことになります。「何をするかはわからない、不安だけれど、この人の頼みならおつきあいしましょう」と。信頼関係だけが頼りです。用意した座席に全員が座った時点で、感謝の気持ちでいっぱいでした。

信頼関係で集まった人たちが話すのだから、いい時間、あたたかい出会いにならないはずはありません。実際、トークがはじまると、部屋中にあたたかい対話の輪がひろがりました。

声をかけて下さったすべてのみなさんに感謝です。

■ 進行上の肝は質問の内容。

トークフォークダンスの中では、「考え」を聞く質問、経験を聞く質問、想像力で答える質問、いろいろとあります。いずれにしても、質問に答えるというのは、「自己開示」をしてもらうということになります。どこまで自分のことを話すか、参加者のみなさんは突然の質問にとまどいながら、しかし、目の前の人の、「聞きますよ」という気持ちに支えられて、一所懸命話して下さいます。

質問はその場によって変えることもあります。「この雰囲気なら深い質問もできる」と思ったら、ちょっと答えに



楽しく1対1で語り合い

くいかもしれない質問もします。逆に、ゆっくり楽しく交流した方がよければ、「子どものころのあれはおいしかったなあというものは？」などの楽しい答えやすい質問にしていきます。

はじめての「がたっぺし」で、私が一番やりたかったけれど、実際やるかどうか迷った質問は、次のようなものです。

「震災の時、会えて、一番嬉しかった人は？」

一番嬉しいというのは、一番苦しい時の話ということなので、フラッシュバックにならないか、と心配でした。語り合う場の安全性は、進行役のもっとも気をつけなければいけないことだからです。

当日、みなさんの対話が深まっていく様子を見せていただきながら、この雰囲気なら大丈夫かと、最後の方で質問をさせていただきました。

学生が後で教えてくれた話では、ある年配の女性はこう答えてくれたそうです。「震災の時にたくさんの自衛隊やボランティアの方がきて下さった。申しわけないが誰一人名前は覚えていないの。でもね、その人たちが、私たちに何をして下さったかは全部覚えているよ」と。思い切ってこの質問をさせていただいてよかった、とほっとしたことを覚えています。

経歴も住む場所も世代も違うからこそ、互いに出会うことが学びやよろこびになっていきます。一人ひとり違うことが豊かさとして感じられる、そんな場づくりとして「トークフォークダンス」のもつ力をあらためて確認する機会になりました。

「あなたのことを教えて下さい」という、聞き手の気持ちが話し手にまっすぐに伝わる時、話し手は思わず、自分を開いてしまいます。「あなたに関心がありますよ、ということが、愛するということ」といったマザーテレサの言葉を思い出しました。

「聴き合える時間」をまた持てたらと願っています。ありがとうございました。

3-5

仮設住宅での交流

新井達也

「何をしたいか」からのスタディツアーへの参加

「自由の森の高校生のみなさんはどんな活動をしたいですか？」

聖学院大ボランティア活動支援センターの方々の言葉から、私たち自由の森学園の復興支援スタディツアーへの関わりが始まりました。

2011年から継続している聖学院大学の東日本大震災被災地支援活動に、2017年から関連校でもない本校の生徒たちも参加できるということだけでも希有なことなのですが、「何をしたいのか」という「活動の作り手」として参加させてもらえるという

ことが、生徒たちにとって大きなことだったと思っています。

震災から6年たった被災地で、自分たちは何をしたいのか、何ができるのか、その問いを生徒たちは考えていきました。

■ 仮設住宅で暮らしている人たちに会いたい

「今でも仮設住宅で暮らしている人がいるのなら、その人たちに会いたい」「仮設住宅で何かお手伝いをしたい」「何で仮設住宅がなくなるのか知りたい」いろいろな意見が出た末に、ほぼ全員が共通していたのが「仮設住宅での活動」でした。

聖学院大学の方々に相談したところ、日向仮設住宅の自治会のみなさんにつながることができ、仮設住宅の周辺の除草作業と交流会を企画することになりました。

当日集会所の入り口には「自由の森学園高等学校様 歓迎 感謝」の文字が掲げられ、生徒たちは大変感激していました。自治会のみなさんと一緒に草むしりを行い、いよいよ交流会。小学生からお年寄りまで多くのみなさんに集まっていただきました。参加したみなさんと、木の枝を加工したブローチづくりをしたり、パンケーキを焼いて一緒に食べながらおしゃべりをしました。住民のみなさんも生徒たちもみんな笑顔で、とても楽しいひと時でした。

「ぜひ高校生のみなさんに知ってほしい」と自治会の両川良男さんが震災当時の体験をお話してくれました。想像を超えた自然の力の恐ろしさ、自分の命は自分で守るということの大切さなどを語っていただきました。そのお話を聞いている住民の方々の表情からも、いろいろなことが伝わってきました。

ここでの体験は生徒たちにとってとても貴重なものでした。

釜石市の仮設住宅での入居期限は最長で2019年3月までということが発表され、釜石の仮設住宅は一区切りを迎えることとなります。しかし、ここで暮らしていた方の記憶や思いはなくなるものではありません。

「もう一度仮設のみなさんと会いたい」「仮設がなくなる前に住民のみなさんの思いを少しでも知っておきたい」そのような生徒たちの声を聖学院のみなさんに受け止めていただき、2017年の冬と2018年の夏、日向仮設のみなさんとお会いすることができました。だんだんと仮設に住んでいる世帯数が減る中で、仮設のみなさんは生徒たちを本当に温かく迎え入れてくれました。

そして今、仮設のみなさん



集会所で両川さんに震災当時の話を聞く生徒たち

の言葉や思いをどのように受け止めたのか、生徒同士で共有しながら、次の「何をしたいのか」を探っていくことが始まっています。

3-6

仙寿院の柴崎住職の講話

児玉拓哉

私が初めて仙寿院を訪れたのは1年生の春でした。当時は東日本大震災のこともあまり分かっておらず、また東北に行ったこともなかったので、どのような話が聞けるのか見当もつきませんでした。また、当時の私は入学して間もないこともあり、何となく参加しました。そのような中で聞いた仙寿院の住職のお話はとても衝撃的な内容で、震災の恐ろしさ、震災が何を奪ったのかを教えてくださいました。また、前日の夜行バスの疲れのためか、お話の途中でうとうとしている学生がおり、住職は「震災のボランティア活動はそんな中途半端な覚悟で来るものではない」と言われました。厳しい口調でしたが、私たちに対する励ましの言葉だったと思います。その言葉を聞いた時、私は被災地に対して何かできるのだろうか？役に立てるのだろうか？と、自分に強く問いかけたことを覚えています。その言葉を聞いたおかげで、ボランティアのふるまい方や、震災が奪ったもの、震災後の街の変化などたくさんの学びがありました。ツアーが終わってからも仙寿院で聞いた話が忘れられず、埼玉に帰ってきて何かできることはないか？自分が同じ立場だったら何をしてほしいか？を考えるようになっていました。結果として、大学のボランティアサークル「復興支援ボランティアチーム SAVE」に入会し、大学のボランティアスタディツアーに毎回参加するようになりました。



卒業後振り返ると、釜石の復興の支援のために何かできたのだらうかと思います。一方で、今でも、釜石を訪れるたびに皆さんが温かく迎えて下さることを本当に嬉しく思います。

あの時、仙寿院であの言葉を頂いてからこそ、学生が震災復興支援ボランティアについてより本気で考え活動をしていくことができたのではないかと思います。

4

貴重な体験・活動

香椎佐久美

溝橋亮太

坂本佳代子

島村宣生

菅原幸秀



塩づくり／ワカメの収穫体験／漁船体験／しいたけボランティア

釜石での出会いから始まった

4-1

塩づくり

香椎佐久美

東日本大震災から2年目の学園祭で、私たちは復興支援の取り組みとして釜石市のものを大学や地域の皆さんに食べてもらおうと考え、被災地の米と塩で作った塩むすびを販売することにしました。

まず、現地の一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校（略称：さんつな）の皆さんに協力していただき釜石の海水で塩を作ることにしました。夏休みにメンバー5人で新宿から高速バスに乗り、釜石に出発しました。

到着してすぐに取りかかった塩作りは想像以上に大変なものでした。太陽が照りつける中、釜でひたすら海水を煮つめます。炭に火をつけたことのない私たちにとって、火を起こすだけでもひと苦労です。塩を焦がさないように交代でかき混ぜながら16時間ひたすらひたすら煮つめます。すると、海水の水分が蒸発し、だんだん白い結晶になり、ようやく塩ができあがりました。

できあがるまでには、道具の準備不足や事前の勉強不足のために「さんつな」の方々にはたくさん迷惑をかけてしまいました。それまでのプロジェクトでは先生方に助けられていましたが、この塩作りでは学生だけで連絡を取ったり準備をしたりと計画を進めました。

復興支援ということではありましたが、結局私たちは現地の方々に助けをもらいながら塩作りをすることができました。この経験を通して、細かいところまで気を配って物事を進める事の大切さと人と人とのつながりの大切さを学ぶことができました。

できあがった塩を持ち帰り、現地で買ったお米もそろい、学園祭当日はお米を炊くのも追いつかないほど塩むすびは好評でした。買いに来て下さった方々に釜石の事などを聞かれて当時の状況を伝えることもできました。塩を通して多くの人とつながることができたこの体験は、大学を卒業してからの自分の生活や仕事にとっても生きています。

4-2

ワカメの収穫体験

溝橋亮太

2011年3月11日午後2時46分18秒、未曾有の大災害が日本で発生しました。東日本大震災です。私はその時自宅で持続的な揺れを感じました。「これはただの地震ではない。」と思い、机の下に隠れるほどでした。不安に思った私は、テレビをつけるとそこには目を疑う光景が入ってきました。津波が発生し、東北の町を飲み込んでいく様子が映っていました。道路を走る歩行者や車両が次々と飲み込まれていきました。私は言葉を失い頭が真っ白になりました。この地震により死者は1万8,432人、災害による被害額は16兆円から25兆円とされています。岩手県、宮城県、福島県の多くの方が亡くなりました。

大学生になった私は、平先生が担当するまちづくり学ゼミに所属しました。ゼミでは主に宮原駅での街頭アンケートや様々な地域のまちづくりに関する調査を行いました。その中で、ゼミのメンバーで釜石市へボランティア活動をしにいくという話が出ました。私は喜んで参加の意思を伝えました。東北のために何かできることはないか常々考えていたからです。

当日、電車を乗り継ぎ釜石市に着いた私たちは、現在の釜石市の状況の視察、被災者の方々の貴重なお話を聞く機会を与您にいただきました。被災状況等、目を疑うような光景でした。その中で、ワカメの収穫体験をさせていただきました。

収穫作業を教えて下さったのは、久保宣利さん。海鮮物のスペシャリストです。私はワカメの収穫作業はどのようにやるのだろうか、と興味を持つとともに、不安な面もありました。作業は、収穫したワカメを陸に上げ、その後塩水でボイルするというものです。陸に上げる前のワカメは茶色です。ボイルすることでワカメが化粧をしたみたいに綺麗な緑色になるのです。その後、冷水に浸し、ワカメ、塩、ワカメ、塩。。。。というようにミルフィーユ状に塩蔵ワカメにしました。私たちは陸に上げるところから冷水に浸



ワカメの冷却作業

し、その後の塩漬けまでの作業をやらせていただきましたが、非常に大変だった記憶があります。それを漁師の方々は毎日行っており、非常に感心しました。

はじめに抱いていた不安はもう一切なくなりました。それは、やはり久保さんのおかげです。久保さんの明るい笑顔と楽しい話術で収穫作業を楽しくさせてくれたのです。私はワカメに対する久保さんの気持ち、人情味あふれる環境を、身をもって感じることができ、釜石に来て本当に良かったと実感しました。

4-3

漁船体験 何てったって 漁船クルージング！

坂本佳代子

ボランティアの後の美味しい浜焼き

2015年夏の坂本ゼミ合宿では、〈釜石の海で楽しむ企画〉を重要ポイントとしました。コーディネートしてくださったさんつなの伊藤さん、協力してくださった尾崎100年学舎や地元漁師の皆様は私たちに思いがけないほどの海での楽しさを提供して下さいました。

まず私たちが行った活動は、尾崎神社奥宮境内でもある青出浜のゴミ拾いと草取りです。私たちが慣れない作業や水路作りをしている間に地元の漁師さんたちが浜焼きを作ってくれていました。

これまで貝を食べることのできなかつた女子学生が「美味しい！」と、最初から最後まで網のそばから離れず、誰よりもたくさん食べていました。

そして、気がつくと伊藤さんは海で泳ぎ始めていました。伊藤さんに「えっ、水着持ってこなかったの？」と挑発されてか、男子学生たちはトランクスのままで飛び込みます。女子学生たちは「いいなあ」といいながら裸足になって海遊びを始めました。

ゼミの指導教員である私は、ここまでで十分目的を達成と確信しました。釜石の海



クルージングを堪能させていただいた漁船

の恵みを食し、その海は私たちを体ごと受け入れ戯れさせてくれました。もう言うことないじゃないですか。

大興奮のクルージング

ところが、さらに、驚きのプログラムが用意されていたのです。それは、漁船でのクルージング。

私たちは漁船2艘に分乗し、尾崎半島の先端までクルージングすることになりました。それだけだったらまあ普通なのですが、ここは釜石リアスの海です。小さな島々が点在しています。その間を漁船はスピードを出してすり抜けていくのです。

想像して下さい、観光船の島巡りを。女声の優しいアナウンスが流れ、船はゆっくと走りますよね。ここの漁船クルージングは全く逆です。スリリングなほどにスピードアップして走るのです。操舵室には真っ黒に日焼けした^{いか}巖つい漁師さんが、満面の笑みを浮かべているじゃないですか。学生も私もキャーキャー言いながらクルージングに酔いしれていました。その間にも半島の崖の凄みや、先端に見えたやさしげな灯台、そして美しさを演出している小さな島々の景観にため息をついてもいたのです。女子学生は「ディズニーより楽しい！！」と感嘆していました。

白浜港に着いてからも興奮冷めやらず、ふと、私は本来船酔いするはずだったことを思い出しました。一人の女子学生はこれまで乗り物酔いがひどく、伊藤さんと青出浜で待機するはずだったのですが、意を決して乗船してしまいました。その彼女も「酔いませんでした」と狐につままれた様子です。

釜石に訪問するたびに、津波の恐ろしさを学習させて頂いています。だからこそ、私は海の良さの証明が欲しかったのかもしれませんが。海なし県に住む人間の身勝手さかもしれません。それでも釜石の海は、私たちを至福体験へと誘ってくれる歓びの海でした。

4-4

しいたけボランティア 原木しいたけ再生プロジェクト

島村 宣生

個性的な古川さん

一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤聡代表より「釜石原木しいたけ再生プロジェクトに孤軍奮闘されている古川文恵氏を聖学院大学の学生に応援してほしい」との申し入れを受けて、2017年7月9日（日）「よいさっ！ プロジェクト4」の下見のために釜石市鵜住居町の原木しいたけの山林に向かいました。国道45号線を左に曲がり三陸自動車道の高架橋をくぐり「さんつなハウス」を過ぎて溪流沿いの細い



古川さんを囲んで

道を車で10分ほどのぼると古川氏の山林があります。原木しいたけ場は、美しい溪流に架かる幅20cmの橋を10mほど渡った対岸にあり、橋の入り口には山神様（石像）となぜか車椅子が置かれていて、「しいたけを」という手製の看板が掲げられて異様な雰囲気があります。まさかこの先でしいたけ栽培をしようとは地元の鹿以外にはわからないでしょう。

我々の到着を確認すると軽トラからさっそうと（私には

そう見えた）降りてきたのは、身長180cmほど、頭に白いタオルを巻き斜のついた眼鏡をかけ、作業ズボンに長靴姿の古川氏でした。挨拶もそこそこにいざお話してみると、いかつい外見とは裏腹に、古川氏は煙草をふかしながら「これは何でこうなると思います？ わかります？」とクイズ番組の司会者のように私たちにいたずらっぽく問いかける、親しみあふれる明るい人柄でした。それもそのはずで、古川氏は、昼間は鶴住居仮設商店街にある釜石キョウセンター東洋治療鍼灸院の院長、夜は「ごいしょの里グループホーム」で勤務する鍼灸師で、患者さんへの優しい声かけが評判なのです。その傍ら先祖伝来の原木しいたけ農家をも営んでおられる活躍ぶりは、まさに鍼灸師としいたけ栽培という二足の草鞋で活躍しているスーパーな方なのです。三陸漁業が東日本大震災で甚大な被害を受けたという報道は日本中に流され周知のことと思いますが、三陸農業も同様に大きな被害を受けていました。特に、福島原発の放射性物質（セシウム）が大気中に大量放出されたことにより岩手県内の農産物もセシウム汚染を受け、陸の鮑と呼ばれ珍重されてきた釜石産原木しいたけの栽培をあきらめる農家が後を絶たず、現在では古川氏のみが唯一釜石市鶴住居で孤軍奮闘されていることを伺いました。釜石産しいたけ栽培など釜石農業を保護しようという行政の動きは未だになく、三陸ひとつなぎ自然学校代表伊藤氏が釜石産原木しいたけ再生に取り組んでいる古川文恵氏を応援したいという想いから聖学院大学に声がかかったのです。この想いを共有するべく2017年8月4～7日に実施される「スタディツアー よいさっ！ プロジェクト4」において2日にわたりお手伝いさせていただくこととなりました。

古川さんの活動を応援する人が着実に増加

古川氏は、東日本大震災で釜石駅付近にあった鍼灸院とご家族をなくされ、仮設住宅に住んでいます。今年2018年8月3～6日に実施された「スタディツアー よい

さっ！ プロジェクト5」はあいにくの雨で作業を正午で切り上げて、古川氏の鍼灸院で雨宿りをさせていただきながら、釜石原木しいたけの歴史とホダギと鍼灸の研究について午後2時まで昼食を取りながら教えていただいた際に、話題が釜石の出来事になると、あの日（2011.3.11）のことを古川氏の言葉で学生たちに詳しく語って下さいました。「鶴住居で『よかったね』という言葉は無事を喜ぶ言葉ではなく『遺体が戻ってきてよかったね。』と隣人に語り掛けるそういう言葉なんですよ。」と教えてくれました。あの日津波でホダギ生産の豊富だった釜石の原木しいたけ栽培農家は、古川氏を除きすべて廃業しました。先祖から受け継いだ山で伝統のしいたけ栽培を行いながら鍼灸院を営み、夜はグループホームで老人のお世話をしながら古川氏が原木しいたけ栽培を守っているのは、古川氏のあの日悲しみに負けまいとする思いではあるまいかと私は想像しています。このように釜石原木しいたけ栽培に孤軍奮闘されている古川氏を応援する団体がこの2年間で着実に増えています。

三陸ひとつなぎ自然学校の呼びかけで他大学やNPOが頻繁に訪問するようになり古川氏の山林にもぎわって来ました。この農業ボランティアの作業は、①しいたけ床の杉の葉除去、②原木用水の水くみ、③新たなしいたけ床の整備等を古川氏の指示によって行うもので、作業時間は災害ボランティアの作業時間と同様に1クール（作業50分・休憩10分・バディ制）×3～4回として、1日10～15時（昼休み1時間）を作業します。この農業ボランティアでは常に災害ボランティアを意識しています。特に、災害ボランティアとして民家の泥出しを担当するならば、被災された方々がボランティアの手によって自宅がきれいに清掃された様子を見て復興の勇気が与えられるような質の高い作業が求められます。この農業ボランティアも同様に、参加する学生には古川氏が我々の作業した現場を見て元気がでるような作業を行ってほしいと指導しています。

昨今では、古川氏の人柄に親しみを寄せる学生が、プライベートで古川氏を訪ね作業を手伝っているという話を聞きました。農業ボランティアとして、四季を通じて釜石市の自然と人々に触れ合うことで釜石農業がより身近なものになることでしょう。このように、社会人になっても継続した関係が続けられるような学生が、このボランティアから出てくることを心より願っています。

4-5

しいたけボランティア

菅原幸秀

聖学院大学では2017年の夏の「よいさっ！ プロジェクト4」から、「原木しいたけ再生プロジェクト」のボランティアを行っています。このプロジェクトのリーダーである古川さんは、2012年から「祖父の代から続く原木しいたけの文化を絶やした



作業に夢中になる学生たち

くない」という思いで、この7年間1人で活動をしてきました。原木しいたけはかつて釜石の名産でしたが、2011年の原発事故の影響で生産が難しくなっていました。

私たちが行う作業内容としては、写真のように丸太やスギの枯れ葉を移動させ、原木の設置場所を広げることで、原木しいたけの採算が取れるラインは一般的には一万本ですが、古川さんが栽培している原木しいたけは千本です。そのため、しいたけを育てる場所をこれからも広げていかなければなりません。まだまだ移動させなくてはならないものが多く、一生懸命やってもかなりの年月が掛かることになると思います。

活動に参加して、とにかく人力でやるには人手がかかる作業だと感じました。丸太は重くて運ぶことが大変です。スギの枯れ葉は地面に落ちている数が多いので、集めて他の場所へ持っていくということを繰り返さなければなりません。これを1人で

行っている古川さんは改めてすごい人だなと感じました。

現在、古川さんが栽培する原木しいたけは採算が取れないため、古川さんは自分の夜勤の仕事と掛け持ちでこの活動をしています。仕事の時間外に、山奥で作業をしていることもありました。そのため、睡眠時間が取れないことも多く、体にも負担がかかるということでした。しかし、私たちがボランティアとして訪れると、忙しい中でも時間を取って会って下さいます。私たちとしてもお会いできることは嬉しいことですが、睡眠時間を削っても会って下さることについて辛くないですかと訊きました。すると、「寝る時間を削るのは辛いですが、今まで一人のことが多かったから、しいたけの活動に人が来てくれることは嬉しいし、自然と笑顔になる」と言ってくれました。そう言っただき、私たちも頑張っって古川さんの活動の力になりたいと、ますます思いを強くしました。今後も、私は古川さんが続ける限り、ボランティアとしてお手伝いを続けたいと考えています。

5

調べ、学ぶ

川田虎男
菊池祐太郎
西浦昭英
平 修久
渡辺正人
永松実梨



ボランティアスタディツアー／漁村調査／授業になった「釜石学」／釜石に関する卒論

釜石での出会いから始まった

5-1

ボランティアスタディツアー

川田 虎男

聖学院大学と釜石をつなげる基盤「復興支援ボランティアスタディツアー」

復興支援ボランティアスタディツアーは、釜石の皆さんと聖学院大学をつなげる基盤となる取り組みとして、東日本大震災が起きた2011年から続いています。春は「桜プロジェクト」、夏は「よいさっ！プロジェクト」、冬は「サンタプロジェクト」と一年間を通じて、活動が展開されています。大型バスを借り切って、毎回30名前後の学生と10名前後の教職員が参加しています。夏は、埼玉県内の高校生の参加もあり、大型バス2台総勢70名規模でのツアーも行われています。一番長い歴史があるサンタプロジェクトは、2011年から始まり2018年で8回目、2012年から始まった桜プロジェクトも7回、2014年から始まった夏のよいささも5回を数えます。

ツアーの目的に合わせた多様なプログラム

ツアーの目的は、①釜石の方々との交わりを通して、東日本大震災で何が起きたのかを知ること、そして、②震災からの復興に向かう釜石の人やまちの魅力を体感すること、③①②を知り、体感したうえで復興に向けて「今の自分たちにできること」を真剣に考えること、の3つです。ツアーに参加するメンバーの半分ほどは、初めて釜石を訪れる学生です。ツアーに参加し、釜石の方々と交わる中で、津波の恐ろしさ

を知り、人が亡くなったという現実とその悲しみの深さを感じ、それでも復興に向けて歩み続ける釜石の皆さんの力に逆に勇気をいただき、自らの思いと考えを深める機会になっています。結果として、復興支援チームSAVEのメンバーに加わり、本ツアーの企画を行うリーダーになる学生、また団体には加わらずとも、毎回ツアーに参加し、釜石の魅力を学園祭で発信する学生など、その後の多様な活動につながっています。現在



プロジェクトリーダー会議で企画を練る

も活発に続く、釜石での活動の大きな原動力になっています。

プログラムの基本構成は、ツアーの目的に対応して、①被災地見学と震災当時のお話を聞く、②釜石の皆さんとの交流、③ボランティア活動、④ていねいな振り返りと復興のために「自分たちができること」を考える、となっており、ツアーを行うごとに、新しい出会いがあり、交流があり、ニーズの変化に応じた活動プログラムが展開されています。特に、ボランティア活動については、復興支援チームSAVEのプロジェクトリーダーが、毎回現地のニーズを伺ったうえで、そのツアーの活動をゼロから考え企画していきます。そのため、たとえ前年度と同じ名前の活動でも、一つ一つの中身についてリーダーたちが話し合い、活動を作り上げています。

このような復興支援ボランティアスタディツアーを通して、釜石の皆さんと出会い、活動する学生が生まれ、次の活動が生まれ、そこからまた新たな出会いが生まれています。そのような循環が今も続いています。2018年度をもって盆栽桜をお届けする活動は終了となりましたが、これに代わる新しい桜プロジェクトも生まれてきそうです。

5-2

ボランティアスタディツアー 学生ボランティアの意義

菊池祐太郎

SAVEの活動の変遷

復興の進展により地域課題が変わるように、ボランティア活動には変化が求められます。私がSAVEの共同代表に就任した2013年は、震災当初からボランティアに携わった創設メンバーが引退し、ボランティアスタディツアーの取り組み・団体の存在意義が問われる年でもありました。

当時の活動を振り返り、SAVEの活動の変遷から学生がボランティア活動に取り組む意義を述べます。

2013年のSAVEの主な活動はボランティアスタディツアーでした。4月の「桜プロジェクト3」では、桜の株分け作業・配布や子どもの遊び支援等を行い、12月の「サンタプロジェクト2」では、クリスマスオーナメントの配布、子どもの遊び支援、郷土料理作り等を行いました。

学生のアイデアが盛り込まれたサンタプロジェクト

両ツアーの相違点は、学生の主体性にあります。

4月のツアーは、プログラムの発案から進行まで大学に委ね、主催団体でありながら、SAVEメンバーは指示どおり行動するだけでした。その状況にメンバーも危機感を覚えていましたが、新体制になって間もない私たちには状況を打開するための筋



ツアー準備会でリーダーが活動について説明

道が見えない状況でした。

その状況を打破しようと、ボランティア活動支援センターに相談を持ち掛け、導き出された解決策が、プロジェクトリーダーの配置でした。

同リーダーがSAVEの代表となり、大学側と打ち合わせすることで、大学・学生間で円滑なコミュニケーションが可能となり、学生の意見がプログラムに取り込まれるようになりました。

その結果、12月のツアーは、プログラムの発案から進

行まで学生が担うようになりました。特に、「子どもの遊び支援」のボランティアは、学生のアイデアが盛り込まれ大幅な改善がなされました。例えば、一般参加者を対象にした事前学習会を開きプログラムの趣旨を共有することで、ツアー参加者が目的意識を持ってボランティアに取り組むことができました。

大学時代の私たちの活動は直観的・情動的で、活動には粗さが目立ったかもしれませんが、ですが、教職員に協力してもらい、学生が主体的に活動に参画できる場を設計したことで、学生の柔軟な発想がツアーに盛り込まれ、プログラムをブラッシュアップすることができました。そして、課題解決力等の社会人で必要となるスキルも磨き、自身の成長につなげることもできました。

私を育ててくれた釜石

学生時代の私は、自分に自信が持てず、ネガティブな考え方を持つことが多い学生でした。しかし、ボランティアを通じてSAVEのメンバー・大学教職員・釜石の皆様と関わりを持ち、共通の目的に向かってボランティアを続けることで、自分が変わる実感を得られました。これは東北のどこかの町ではなく、優しく私たちを受け止め続けて下さった釜石だからこそその成長だと思います。

SAVEは、今後も純真な気持ちでボランティア活動を続けることと思いますので、釜石の皆さん、大学の教職員の皆さんには、今後も相変わらぬご指導をお願いします。

5-3

ボランティアスタディツアー

西浦昭英

聖学院中学・高等学校のボランティアスタディツアー

震災1年後の3月、被災地の姿を見てもらいたいという願いから、ある旅行会社が企画したツアーに、聖学院中学・高等学校の海老原先生(2016年退職)が参加しました。充実したツアーで、その後、是非生徒にも体験させたいということで、本校の生徒を対象に8月に実施しました。1日目は、新幹線で盛岡まで行き、そこから貸し切りバスを使って宮古へ行きました。2日目は、宮古から釜石を経由して大船渡へ、3日目は、大船渡から陸前高田を経由して気仙沼へと移動し、被災地を見学しました。4日目は、気仙沼から南三陸、石巻、仙台に足をのばし、新幹線で東京に戻りました。

私は、4月頃から、主にミッションスクールのボランティアの状況を調べ、ゴールデンウィークには仙台にある日本基督教団のエマオに、5月末には出席している教会のツアーで、カトリックカリタスジャパンの米川ベースに宿泊し、南三陸町でのボランティアを経験しました。

並行して、海老原先生の呼びかけで、すでに個人的にボランティアに行った経験のある教員が集まり、日程や内容、募集の学年の検討をしました。交通費がかかりますが、移動時間の短い新幹線を利用することや、プログラムとして、震災後の被害の実態の視察と、地元の生徒や教会との交流、ボランティアを経験することになりました。結果として、汗だくになりながらの畑の泥かきや、海岸の清掃などの「肉体労働」の時間が多く取れ、良かったと思いました。旅行会社は全期間添乗員をつけてくれ、ほとんど利益のないような費用で対応してくれました。

案内が6月で実施の2ヶ月前であったため、部活の合宿で行きたくても行けない、という生徒がいました。また、費用が6万円を超えたことから、費用の面であきらめた生徒もいましたが、高1が12人、



子どもたちと遊ぶ生徒たち

高2が10人、教員が6人の総勢28人が参加しました。

「よいさっ！ プロジェクト」への参加

2年間は、聖学院中高では単独で実施することができませんでした。ちょうどその時、聖学院大学ボランティア活動支援センターの川田さんと芦澤さんが、中高を訪問し、「よいさっ！ プロジェクト4」に誘ってくれました。まさに渡りに船の状態、早速8月に向けて参加する方向で話を進めていきました。学内での了解をとり、中3から高2生徒全員にチラシを配布しました。生徒に向けた案内文は次のとおりです。

「東日本大震災で大規模な被害を受けた岩手県釜石を訪れる旅行を計画しました。震災から4年以上経過しましたが、家を失った多くの方々は、まだまだ仮設住宅に住んでいます。堤防や地盤の高上げの大規模な工事は行なわれていますが、日常生活への復帰への見通しは見えません。復興の現場を訪れ、働く人々の話に耳を傾け、何ができるのか、一緒に考える時を共有したいと思います。なお、今回のツアーは、3年前から実施している聖学院大学のボランティアツアーのプログラムに参加させていただくこととなります。」

被災地は、清掃・片付けから次の段階に変わりつつあり、地元のニーズを聞きながら、夏祭り「釜石よいさ」に踊り手として参加したほか、小学生対象に、あそびのイベント「かまっこ★あそびーらんど」を運営するなど、ボランティアの内容が次第に変化していく様子が見られました。

結果的に、2015年は、中3が1人、高1が2人、高2が5人の計8人が参加しました。翌年は、高1が1人、高2が5人の計6人が、2018年には、中学3年生が2人、高校1年生が2名の計4人が参加しました。

単独の学校では実施できないプログラムに参加できたことは、生徒にとっても教員にとっても貴重な経験でした。聖学院大学、本校、そして埼玉県立常盤高校あるいは自由の森学園高校の3つの学校の合同プログラムのため、リーダー会議からして、日程調整が難しいことがありました。しかし、3回の会議の場所を持ち回りで行うなど、他校の様子を知る機会になり、有意義でした。

また、聖学院高校を卒業して、聖学院大学に進んだ学生と、ボランティアツアーで再会できたことは嬉しいものがありました。ツアーに参加したことで、聖学院大学への進学を考え始めた生徒がいたことも、喜ぶべきことだと思います。

5-4

漁村調査

平 修久

思いがけない依頼

2012年8月19日から9月17日にかけて、釜石東部漁業協同組合に属している8つの漁村の調査を行いました。この調査は、釜石に行き始めた時期に、柏崎龍太郎さんに、「何かお手伝いすることはありますか」と伺ったところ、出てきた話でした。被災者の方々に触れ合い、震災前の生活に戻る手助けをしたいと思っていましたが、それまで、漁師さんの知り合いもおらず、漁業に関しては全くの素人でしたので、一瞬、返答に悩みました。

幸い、短期特別研究休暇制度が適用されて夏休み期間の学内業務が免除され、財団法人JKAの公益事業振興補助事業（東日本大震災復興支援）の助成金を得ることができ、調査を行いました。

漁師さんにインタビュー

他のインタビュー調査と同じような感覚で準備し、漁師さんに質問をしたところ、期待する答えがなかなか得られませんでした。漁師さんは自然相手の仕事なので、口が重たい方が多いようです。初対面の私にべらべらと話すというのは無理なお願いだったと気づきました。どのようにして漁師さんの本音を語ってもらおうかを考えながら、インタビューを重ねました。

とはいえ、熱く語る漁師さんとも出会いました。2番目に話を伺った箱崎の荒屋さんもその一人です。漁師になる前は長く営業関係の仕事をされていたということでした。若いころから漁業に携わっている方と、陸上での仕事をしながら週末などに漁業を行い、定年後、あるいは定年間際に漁師になった方がいることを知りました。

地方ではどこでも高齢化に



定置網の引き起こしをさせて頂いた前川夫妻と

直面していますが、釜石の漁業も例外ではありません。60歳過ぎの方が多く、後継者のいない漁師さんが大半のようでした。そのような状況の中で、20代前半の漁師がベテラン漁師に交じって、養殖漁業の再開に取り組んでいる姿を見て、少しホットしました。その方は、漁師の祖父と一緒に養殖を始めた方でした。

話を伺った漁師さんは、ワカメ、コンブ、ホタテ、カキ、ホヤを養殖している方々です。漁師さんたちは、普段は単独で作業します。しかし、養殖施設が津波で流され、その再整備は共同で行いました。漁村調査を実施した時期は、養殖ロープの重りづくりの真っ最中でした。漁師さんと顔見知りになるために、ボランティアの人たちと、砂利を土嚢袋に詰めて重りをつくる作業を非力ながら手伝いました。この共同作業は、漁師さんたちにとって養殖方法などの情報交換の機会にもなったようです。

■ 苦労した水産加工品の検討

柏崎さんから出された課題は、震災前に実施していた体験型漁業の再開の見通しと水産加工品の検討でした。

体験型漁業の再開に関して、関係者の話からインストラクターとの調整次第で再開可能なものは、①養殖漁業体験、②漁船遊覧体験、③船釣り体験、④網おこし体験、⑤ホタテ・ホヤ・カキ剥き方体験でした。再開に向けた施設整備などが必要なものは、①新巻鮭作り体験と②蟹釣り体験で、再開が困難なものは、①地引網おこし体験、②すき昆布作り体験、③シーカヤック体験ということがわかりました。また、新しい体験型漁業として、①養殖準備体験、②カキの出荷体験、③養殖体験、④ウニ、アワビ採りを提案しました。

苦労したのは、水産加工品の検討でした。はじめは、美味しい魚介類の家庭料理があるはずだと思い込み、愚直に、魚介類の美味しい食べ方を漁師さんに訊いてまわりました。新鮮なお刺身が美味しいに決まっています。しばらくしてから、馬鹿な質問をしていたことに気づきました。また、料理のことを訊くのであれば、漁師の奥さん方に伺う必要があると気づき、調査の途中で、漁協の婦人部の方にも料理の方法を訊きました。婦人部の中には、岩手県の食の匠の認定を受けている方もいました。

■ 観光ツアーなども提案

震災前はアルバイトを雇っている漁師さんはごくわずかでした。しかし、震災後、多くのボランティアが漁業の再生を支援するようになり、漁師さんもそのような人たちと交流する楽しさを実感したようでした。そこで、体験漁業のほかに、漁業ボランティアや漁業アルバイトをコーディネートする仕組みを提案しました。

また、漁協所有の船で箱崎半島を一周する機会を与えてもらい、三貫島周辺の奇岩、千畳敷、鬼石などをめぐるツアーも提案しました。鬼石は箱崎半島以外ではあまり知られていないとのことでした。これは、岩のくぼみに別の岩がはまっているポットホールで、極めて珍しい垂直方向のものです。海上からしか見ることのできず、また、未だにウェブに写真が掲載されておらず、貴重な観光資源になると思います。

「美味しいものを食べさせて下さい」が調査の早道

漁師さんが住んでいる仮設住宅を訪ねると、お菓子の代わりに、焼きホタテを出してくれました。新鮮で貝殻つきの大きなほたてを丸ごと食べる機会はあまりありませんので、喜んで頂きました。ホタテの独特の美味しさと絶妙な食感は今でも覚えています。別の漁師さんのお宅では、海の幸の料理に加え、漁師さんが浜でおやつ代わりに食べる団子も頂きました。焚火を起こして焼いて食べるとのことで、少し甘く、素朴な味わいでした。

また、塩蔵わかめをつくっているお宅に訪問した時は、イカの一夜干しを頂きました。イカの甘じょっぱい香りと噛みごたえは、後を引く美味しさでした。お土産にもいただき、帰宅後再度味わいましたが、同行した大学院生は、親にすべて食べられてしまったと嘆いていました。

今回の調査を通して、「美味しいものを食べさせて下さい」というのが、食べ物に関する調査の早道であることを実感しました。漁師さんたちも、美味しそうに食べる我々の姿を見て喜んでくれたと思っています。

学生と一緒に話を聞きに行くと、漁師さんの口が軽くなることにも気がつきました。三陸ひとつなぎ自然学校に来ていた他大学の女子学生と一緒に行った時は、特にそのような印象を受けました。

多くの方々との出会い

NPO おはこぎきが報告書を様々なところに配布して下さり、不足分をコピーまでして使ってくれました。報告書をもとに、体験漁業の機運が高まり、いくつかのプログラムが開始されました。それにより、漁業関係者と消費者の距離が多少縮まったのではないかと思います。

調査を通して、組合長の小川原さん、ワカメ養殖をやっている久保宣利（のりとし）さん、桜満開牡蠣を養殖している新ちゃん（佐々新一さん）と健ちゃん（佐々木健一さん）と出会い、その後、ボランティアスタディツアーのワカメ収穫体験やカキ養殖体験へとつながりました。また、ゼミ合宿では、組合長にお願いし、番屋で新鮮な刺身をごちそうになりました。漁師さんたちは、毎日、こんなに美味しいものを食べているのかと学生も私も思いました。

調査の約1か月間、三陸ひとつなぎ自然学校（さんつな）が利用していた仮設住宅に居候し、お世話になりました。その間、多くのボランティアと出会えたことも、私にとって貴重な体験でした。ボランティアの方々は、意外に埼玉県民が多かったことを記憶しています。その後も、その方々とさんつな応援団の会合（飲み会）に参加しています。

5-5

授業になった「釜石学」

渡辺 正人

「釜石学」授業のねらい

聖学院大学の東日本大震災にかかわる復興支援の特徴のひとつに、「釜石学」という授業を設置していることがあります。この授業は2015年度から開始しました。シラバスでは、授業の目的として「聖学院大学と釜石市の提携関係の中、本学学生の釜石地域に対する理解を深め、今後の連携関係を進めてゆく基盤をつくる。」としました。この授業の第一の目的として、釜石地域への理解ということです。関東近県から通う者が多い本学の学生にとって、釜石地域はそう身近なものではありません。ボランティアに参加して初めて知った、という学生も多いのです。ツアーの前には研修が行われますが、簡単な内容や震災から復興にいたる経緯などが中心であるため、どうしても普段着の釜石ということについて触れることは少ないためにこの授業を設けました。

第二の目的としては、シラバスに記した「2011年の東日本大震災で、東北は大きな被害を受けた。東北は、歴史的にも数度の地震やそれに伴う津波による被害を受けながらも、そのたびに立ち上がり、今日を迎えている。それには、東北の持つ風土的な特性があり、そこに暮らす人々の精神性が深く関係していると言われる。そうした東北の中でも、本学と関係を深めてきている釜石市とその周辺を取り上げる。釜石市は、他方ではラグビーの町としてグローバルな地域でもある。本学の掲げる「グロー

カル」な場としてのモデルとして考えていく。「東北に生きる」ということを通じて「地域で生きる」ということはどういうことかを、考えてみたい。」としていることがあります。これは釜石を通じて東北や自分の故郷に生きる、ということを考えてほしい、という願いがあったことによります。

そもそも、釜石という土地は、東京大学社会学研究所による希望学の現場でもありました。希望学に関して、2006



釜石からゲストを招いての授業

年から釜石地域で総合調査が行われています。その理由は、まず、釜石が日本の将来の姿とされたからでした。釜石は、「鉄と魚とラグビーの町」というキャッチフレーズをもっていますが、そのとおりに、明治期から製鉄業を基盤に発展してきた町でした。ところが、製鉄業の衰退や少子高齢化などの社会的要因により、人口も最盛期の9万人ほどから2018年現在は3万4千人程度と減少しています。現在、日本各地で地域社会の維持が困難になりつつあり、釜石はその先駆けと見られたことによります。

ところが、釜石という所はそうした社会の変動を受け入れつつ、その困難に立ち向かう人々の住む希望の土地であった、というのが希望学の主旨でした。それは東日本大震災での大きな困難にあっても同じで、釜石の復興の原動力でもありました。つまり、釜石での復興支援のボランティア活動に際して、その土地をよく知り、その土地に暮らす人々の特性を知ることが重要でした。同時に、それは東北という地域や、自分の住む土地を見直す視点となりえます。それは極めて今日的な視点だと考えました。

釜石を幅広く学ぶ授業

2018年度の「釜石学」の授業の構成は次のとおりです。

- 第1回 はじめに 本学と釜石市の関係を巡って
- 第2回 2011年3月11日から今日まで
- 第3回 東北の歴史① もののけ姫の世界～山の民の世界と金属～
- 第4回 東北の歴史② 東北に花開く文化～奥州三代と平泉～
- 第5回 釜石市の歴史 近代製鉄の幕開けとラグビーの町釜石
- 第6回 東北の民俗と文学 遠野物語と宮沢賢治の世界
- 第7回 釜石市の民俗—海と山の世界—
- 第8回 震災とボランティア—阪神淡路大震災から東日本大震災を巡って
- 第9回 東日本大震災とボランティア活動—本学も含めて
- 第10回 東日本大震災とこども
- 第11回 釜石市における復興支援ボランティア活動
- 第12回 釜石市民による復興と応援団—三陸ひとつなぎ自然学校・釜援隊ほか
- 第13回 釜石の漁業の被災と復興への取組
- 第14回 復興まちづくり
- 第15回 まとめ

第1・2回は、釜石と本学の関わりと東日本大震災の概要です。本学の活動が継続できている理由は、人のつながりです。本学に関わるきっかけとなった柏崎龍太郎さん、宝来館の岩崎女将や三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤聡さん、柏崎未来さん、釜石市主任児童委員の市川淳子さん、といった核となる人たちと初期に出会い、その後、そこからのつながりで様々な広がりができたことなどを紹介します。3回目から7回目までが東北全体の歴史と文化、その中での釜石の民俗文化です。東北という土地柄が、どのような歴史的文化的背景でできてきたのか、また釜石地域の成り立ちと特性を解説します。第8・9・11回はボランティア活動支援センターによる震災とボランティア活動の概要です。毎年、釜石からゲストスピーカーを呼んでお話を聞くことがあり

ますが、この時に行います。三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤さんや、マグネットぬりえプロジェクトの寺崎幸季さんといった人たちです。2018年度は3月に本学を卒業して釜石で釜援隊にはいった由木加奈子さんに登壇してもらいました。第10回目は、金谷先生が東日本大震災とこどもの関係を話します。第12回から14回までがボランティア活動支援センター所長であり、当初から釜石に関わってきた平先生が、釜石の復興のまちづくりなどを取り上げます。

■ 釜石への受講生の関心の高さ

初回の授業において、授業を履修登録した理由を学生に書いてもらっています。修了時よりも開始時の方が、この授業に対する関心や受け止め方がわかると思います。2018年度は、次のようなコメントがありました。

- 東日本大震災があって数年たった今、どのような状況になったのか気になったからです。また、震災時はどんな状況になっているか気になったからです。(4年)
- 少しでも東北の方の力になりたいから(1年)
- 東日本大震災が起こり、被災地の現状などを細かく知り、被災された方たちの気持ち・生活を知りたいと思いました。(3年)
- 正直、私は被災地の事は詳しく知りません。この履修理由も、時間割の埋め合わせくらいにしか思っていませんでした。しかし、被災地でとれるコメなどのいまだに続く風評被害などTVやインターネットで見て、本当はどのような実際なのかが気になりました。同時に民族学が好きなのでその点も興味があります。(3年)
- スタディツアーに行ったり、SAVEでの活動を通して釜石を知って、もっと知りたいと思ったからです。(3年)
- 復興支援ボランティアチーム(SAVE)に所属していて、サンタプロジェクトで釜石に行きました。その際に、もっと釜石について知りたいと思ったからです。また、この授業で学んだことをこの先のボランティアに活かしていきたいからです。(2年)
- 授業名がとても不思議だったので取ってみようと思いました。(3年)
- 母の実家が青森県なので、青森や東北に行く機会が多いのですが、釜石学を学ぶことでより東北や東日本大震災を知ることができると考え受講しました。(4年)

本学の学生が、7年たっても被災地に関心を忘れず、機会があれば何かしたいという思いがあることが分かります。この授業が、学生たちの行動の何かのきっかけになってくれればという願いは、それなりに達成できているのではないかと思います。

■ オープンキャンパスで釜石と出逢う

高校3年生の夏、聖学院大学のオープンキャンパスで、復興支援に関わるボランティアの展示を見たことがこの大学に入学するきっかけになった私は、入学後すぐの桜プロジェクトで、初めて釜石を訪れました。その時はまだ、私にできることがあるのか、という問いが自分自身を苦しめ、よそ者はよそ者でしかないのではないかとすら思っていました。

しかし、そのようなもどかしさは、その後継続的に釜石を訪れ、現地の方々と関係を築いていくうちに、いつの間にか薄れていったのでした。

それは訪れるたびに釜石の方々が私たちを受け入れ、釜石のまちを築き上げてきた歴史、釜石での暮らし、そして何より釜石を誇りに思う気持ちを語って下さったことで、自分の中の何かが変わったのだと思います。

■ ボランティアという形を越えて

そのような気持ちの変化があったのは、私だけではありませんでした。一緒にボランティアスタディツアーに参加する学生、現地で出会った他の地域から来た方々など、釜石を訪れた多くの方が、同じように人々に、まちに魅了され、何度も釜石を訪れたり、あるいは移住した方までいました。

私は、訪れた人を虜にしてしまう釜石の魅力って何なのだろうと思いました。そして、震災という逆境の中でも希望を持ち、自らが立ち上がって釜石を作っていく皆さんの姿に、私は、「この釜石の人々を突き動かすものは何だろう」と思いました。

そこで、大学4年間の集大成として、卒業論文を「釜石のDNAをさぐる」と題して、もう少し自分の問いに真正面からぶつかってみようと思い、このテーマに挑むことを決めました。

■ 調査で向き合い、知っていく釜石の姿

卒業論文を書くにあたり、これまでボランティアでお世話になった方々に調査にご協力いただきました。

「釜石らしさとは何か」を明らかにするために、釜石に生まれ育った方と、移住された方にお話を伺い、それぞれ別の立場から見た「釜石らしさ」をみていくことで、本質を探っていこうと考えました。

また、その釜石らしさというのは、多くの要素が混在しているようにも思いました。

釜石の海・山・まちという違った要素は、それぞれの暮らしをしながらも、互いに違いを受け入れ、理解し合い、共存しているように見えていました。それが果たしてどうして共存し、一つのまちとして受け入れられ、一人ひとりが誇りを持つことができるのか、何がそうさせているのか、そのような疑問も調査にぶつけていきました。

海、山、まち、それぞれの暮らしやまちの見え方は、同じ釜石に住む人とは思えないほどに違っていました。しかし、釜石のキャッチフレーズのように、どの地域の方も、「海、山、まち、どの要素も含めて釜石だ」と、口にするのです。

私は調査の中で、それぞれが違った暮らしをしながらも、普段の暮らしの中で深いつながりを持っていることを確かに実感しました。

その地域を越えた確かなコミュニティがあるからこそ、自分の地域に誇りを持ちつつ、苦しい時には互いに助け合い、共存できるのだと確信しました。

海、山、まち、すべての暮らしとその歴史は、今の釜石を作り上げるのに必要な要素であり、そのどれかが欠けてしまえば、どの地域に暮らす方からみても、釜石として成り立たない、そう私は強く感じました。つまり、そのすべての要素を何一つ落とさずに尊重してきたことこそが、それぞれの地域への「誇り」を守り抜いてきたポイントであり、一人ひとりがその中で役割を持って、釜石を自らの力で立ち上げようという原動力になっているように思いました。外から来た人にとっては、その背中とはとても眩しく、そのような皆さんの生き方そのものに憧れてしまうのではないのでしょうか。少なくとも私が釜石に4年間通い続けた理由は、私に「暮らしの価値観」を魅せて下さる皆さんの存在であったと、はっきりと感じることができました。

卒論を通しての気づき

卒業論文を書くために、一人ひとりにじっくりとお話を伺い、ご自身のこれまでの歩みや釜石への思いに触れることで、私はある意味で、その後の人生のための大きな壁にぶち当たった気がしています。

ボランティアで通っていた時には、いつでも優しく受け入れて下さる温かさや、釜石を心から思い、逆境の中でも前を見て突き進む背中に、ただただ憧れを持つばかりでした。しかし、調査を通して、皆さんの歩みと、それを突き動かすものに触れた時、私はいつの間にか自分自身のこれからの生き方を、真剣に考え始めていることに気づきました。釜石の復興のために立ち上がっている皆さんのように、何かに本気になれる生き方を見つけていきたいと思ったのです。

大学4年間の集大成として取り組んだ卒業論文は、こうしていつの間にか、社会に出るための大きな決意にもなっていました。これまでお世話になった皆さん一人ひとりのように、どのような逆境にも大事なものを守ることができるような、そのような人間であろうと私は思います。

そして、それは、卒業して社会に出た今もなお、私の中にあり続けています。私にとって大切なものを見つけ、自分にできることを見つけながら、自分の足で歩いていくために、私の居場所を作っていきます。最後になりましたが、この調査に協力し、私に様々なことを教えて下さった皆さまに、心から感謝します。

6

味合う

渡辺正人

阿部洋治

藤川友帆

永松実梨



釜石を美味しく楽しむ会／グルメリーダー／釜石フェスティバル

釜石での出会いから始まった

6-1

釜石を美味しく楽しむ会

渡辺 正人

釜石ファンを増やしたい

個人的な感想になりますが、私が釜石ボランティアスタディツアーに対して不満があるとすれば、内容が盛りだくさんすぎはしないか、ということでした。ボランティア活動や交流プログラムだけではなく様々な体験もするのですが、目いっぱいあまり空き時間がありません。せっかくの訪問ですし、それは学生にとっても私にとっても得難い経験なのですが、もう少し釜石の風景や食事を楽しむことも必要なのではないか、という思いでした。そういう釜石ファンも増やしたいとも思いました。そのような話をボランティア活動支援センターの川田さんや芦澤さんなどとしていました。

釜石からの帰りのバスでの企画会議

そのような折、2014年の8月の「よいさっ！ プロジェクト」の帰りのバスの中、釜石の食材を使って食事会を開きませんかという提案が二人からありました。震災直後、飲食店で、被災地の食材やお酒を頼むということで応援しようという動きがありました。二人の仲間たちでもそのような活動があったようで、そのような話題の中、本学でもやりませんか、といったことだったと記憶しています。車内で、「料理担当は私がやるよ、でも、場所がねえ。」ということであれこれと話しているうち、「結局では渡辺家で」、ということでその場で決定しました。

学生にばれて、学生だけの会も実施

さっそくその年の9月25日に第1回目の釜石を美味しく楽しむ会が開かれました。牡蠣のシーズンには少し早かったのでムール貝や、その他わかめなど釜石の食材を送ってもらい、にぎやかに会を開き、終電近くまで楽しみました。好評だったので、その年は12月22日にもう一度開催しました。この回から宮原駅近くの「テクテクカフェ」が会場になりました。その後、大人会はだいたい1年に一度、2015年の5月10日、17年の2月21日、18年の3月16日というペースで行いました。「大人会」と書いたのは、初回の会を、一部の学生に自慢した職員がおり、それがたまたま、私の属することも心理学科の学生だったため、「自分たちも」とせがまれ、ちょうどその12月会の翌日に、大人会の食材を流用して「学生会」を開きました。その後、15年5月の大人会の食材の宅配便が手違いで遅れて届いたことから、臨時にやはり翌日に急ぎよ開きました。

釜石の豊かな食材

素材は、なるべく釜石の食材を中心に、岩手県産の物、せめては三陸の物ということで選びます。調味料は釜石の藤勇の味噌と醤油です。少し範囲を広げるのはお米で、岩手県産の銀河のしずくや金色の風です。釜石の子持ちメカブとの相性はよく、これをご飯にかけてミニ丼にすると好評ですぐになくなります。

メインの釜石の食材は、魚介類を中心に送ってもらいますが、なかなか豪快です。ある回では70～80cm くらいの鮭が1匹まるまる届きましたし、また、大タコが1匹そのまま届いた時もあります。18年3月の回では、カレーが20匹くらい、鱈が4匹いっぺんに届いたので、さ



釜石の素材を使った料理が並び

てどう料理しようかと悩んだくらいです。「魚介類は〇〇を」、とお願いしても、海の状況によっては何が獲れるかわかりません。いつも届くまでは中身が分からないので、最終的なメニューを決定できるのが開催間際ですから油断できません。おおまかなメニューを決めておいて、後は届いた荷物を開けてから決めます。結局、カレーは煮つけにして、鱈は鱈ちり鍋、ムニエル、から揚げなどにしました。

具体的なメニューは、素材も違うのでその回によって違うのですが、いくつかのメニュー以外はなるべく同じものは作らない、という方針で作ります。これはある回のメニューです。

サラダ
牡蠣のオイル漬けカナッペ
生ハムの甲子柿ソースカナッペ
サヴァ缶サンド
子持ちメカブ冷ややっこ
釜石産わかめの酢の物
釜石産牡蠣（焼き牡蠣、蒸し牡蠣）
泳ぐホタテ（刺身・バター焼き）
ムール貝のワイン蒸し
ワカメの豚肉巻
しょっこ汁
釜石産わかめのしゃぶしゃぶ
子持ちメカブ丼（お米は銀河のしずく）
わかめ焼きそば（藤勇の塩麹味）
日本酒（浜千鳥）

素材が良いので、毎回作るのが楽しみです。設備の関係もあり、あまりこったものが作れないのがやや残念ですが、まだまだ試してみたいメニューもあり、会が続いてくれることを願っています。

6-2

釜石を美味しく楽しむ会 釜石の人々と味に魅せられて

阿部 洋治

「釜石で美味しいものをたくさん食べてくるぞ」という学生のことばに違和感

私の釜石との関わりは、2014年4月、4年間の女子聖学院中学高等学校での務めを終えて大学に戻り、ボランティア活動支援センター所長に就任した時からです。4月半ばのボランティアスタディツアー「桜プロジェクト」、8月には埼玉県立常磐高等学校の生徒さんや先生方と合同のスタディツアー「よいさっ！ プロジェクト」。私は、こうしたツアーを通して、釜石の人々や文化に対する学生たちの愛着と親しみに出会いました。極論すれば、ボランティアの使命感以上に、「釜石の人々にまた会いたい」、「釜石の美味しい食べ物を味わいたい」、そういう思いが学生たちをスタディツアーに駆り立て、少しでも何かお役に立ちたいという使命感につながっていたのです。

正直に告白しますと、夏のスタディツアーに出発する朝、動き出したバスの中で、「さあ、うまいものをいっぱい喰ってくるぞ!!」と氣勢をあげる学生の声が聞こえて来て、「こんなモチベーションの低い学生もいるのか」と内心憂いを覚えたものでした。

「釜石で美味しいものをたくさん食べてくるぞ」は釜石への尊敬と愛着

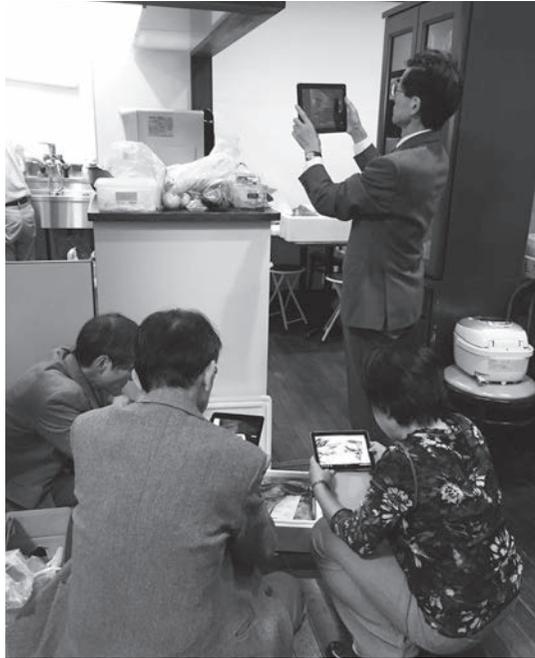
翌9月に、渡辺先生の自宅で、「釜石を美味しく味わう会」を行うということで、食べることにあまり関心のない私はそれほど期待もせずに参加しました。しかし、釜石の美味しい食材を使って渡辺先生が自慢の腕を奮った料理は、いずれも私の想像を超えた美味しさでした。こうして釜石を味わうことに含蓄された大切なものにふれることになり、私の考えは変えられました。「うまいものをいっぱい喰ってくるぞ!!」というのは、釜石の人々や文化への心の籠もった尊敬と愛着であることに気づかせられたのです。

漁協の組合長お手製のいか刺し

この年の11月、釜石の関係者の方々へのご挨拶のために、「サンタプロジェクト」の下見チームに合流し、さらに下見チームが帰った後もう一泊し、ボランティア活動支援センター職員の川田君に案内してもらいながら幾人かの方々を訪ねました。

中でも忘れることのできない経験は、釜石東部漁業協同組合長さんを訪ねた時のこ

とでした。初対面でお互いにどんな話題で対話すべきかを探しあぐねながらも、私は「釜石をおいしく味わう会」のことを話しました。すると、組合長さんが笑顔になり、「さっき獲れ立てのヤリイカが届いたところだけど、あんたら食べて見るかね」と言い、事務所に隣接するご自宅の庭に案内してくれました。そして組合長ご自身がさばいて御馳走して下さいました。北海道の山間育ちの私は、いか刺しの美味しさを味わったことはありませんでした。奥様が添えて下さった刺身用醤油とお手製のキュウリのお漬け物の味わいも格別のものでした。そして、この経験が、釜石の方々との接点の大切なものを教えてくれたのです。



新鮮な海の幸を撮影する教職員

■ 学園祭での釜石フェスタの実施へ

そして、12月のサンタプロジェクトで郷土料理研究会の方々のお世話で釜石の郷土料理を味わわせていただきました。この時、メンバーの一人が言いました。「あんたらの大学を一度訪ねて見たいと思っているのよね。来年は絶対に行くから」と。以心伝心、期せずして私が願っていた申し出でいただいたのです。実は、11月の釜石訪問の帰途の車中、「2015年の学園祭には“釜石フェスティバル”を企画し、そこに郷土料理研究会の方々もお招きして……」というアイデアを川田君と語り合っていたわけでした。

聖学院大学の釜石とのつながりが、表面的な使命感を越えて、釜石の人々と食べ物と文化への愛着と尊敬から始められ、今も続けられていることに、私は誇りを覚えます。聖学院大学と釜石とのこうした関係の中から、新しい歴史が形成されることを期待しております。

冷めても美味しいおにぎり

私は赤ちゃんのころから何か食べさせておけば大丈夫、と言われるくらい食いしん坊でした。それは大学生になってからも変わらず、それが功を奏してか初代グルメリーダーを任されることになりました。初代グルメリーダーの仕事は、スタディツアーのバスの中で、釜石のグルメ紹介や食レポが主なものでした。そこで、オススメのグルメを紹介したいと思います。

まず紹介させていただくのは、大渡町にある「仁平商店さんのおにぎり」です。このおにぎりは、スタディツアーでは恒例の朝ごはんです。ツアーの私の楽しみの一つ、仁平商店さんのおにぎりは冷めても美味しいのです！ 毎回、参加人数分を頼むとなると、早朝に到着することもあり、できたてを食べることが難しく残念ながらおにぎりが冷めてしまうのですが、仁平商店さんのおにぎりは、冷めても美味しいのです!!! 「えー、本当？ 釜石ラブだからって美味しく感じてるんじゃないの？」と疑う人もいるかもしれません。そう思っている方にこそ食べて頂きたい！ 冷めてもお米がふっくらと柔らかく、だからといって崩れてしまうわけでもありません。絶妙な握り具合！ その握り方こそが、冷めても美味しい秘訣なのだと思います。また、塩加減もちょうどよくどの具材を食べても美味しいので、夜行バスに揺られ、早朝6時に釜石へ到着しすぐに朝ごはん。「お腹なんて空いてないよ～」と思っていたはずなのに、食べ始めたら止まりません。それが、「仁平商店さんのおにぎり」です。当時は、男性陣と一緒に余ったおにぎりの争奪戦へと参加している私でありました。それくらい美味しいおにぎりなので、釜石へ行く際には是非足を運んで頂きたいお店です。



仁平商店でお店の方と

一口食べたら病みつきになるジェラート

次に紹介させていただくのは、「道の駅『遠野風の丘』のジェラート」です。道の駅で食べるこのジェラートは一口食べたらもう病みつき。私は、毎回必ず食べていました。味もバニラ、苺、チョコレートなどの定番から、ブルーベリーやリンゴなど新鮮な果物を使ったジェラートなど、また各季節に特化した期間限定の味が必ずあり、合計10種類程ありました。どれを食べても美味しく、ハズレはありません。また、お値段もシングル350円、ダブル400円とお財布にも優しいので、私は毎回ダブルにして2種類の味を楽しみました。

「他の休憩時間を削っても遠野のジェラートは食べたい!」と、そう思える一品です。是非、釜石へ足を運ぶ際には、休憩がてら遠野のジェラートを思い出して頂けたら嬉しいです。

今回は心に残っていた「仁平商店さんのおにぎり」と、「道の駅『遠野風の丘』のジェラート」について紹介させていただきましたが、釜石を含め東北にはまだまだ美味しいグルメがたくさんあります! 初代グルメリーダーとしてこれからも思い出に残る釜石グルメをたくさんの人たちに伝え、知ってもらうとともに、私自身もこれからも釜石グルメを探し求めたいと思います。美味しいものでたくさんの方が笑顔になり釜石の未来の活性化につながれば嬉しいです。

6-4

釜石フェスティバル

永松実梨

釜石の魅力を多くの人に知ってもらいたい

私たちはこれまで、ボランティアスタディツアーや、個人でのボランティアという形で釜石を訪れ、釜石の皆さんとの関わりを持たせていただきました。訪れるたびに様々な形でつながりが広がっていき、釜石の魅力の虜になっていきました。

大学一年生の頃から釜石を訪れ、皆さんから様々なことを教わってきた私たちは、震災から5年が経つ節目のこの時に、お世話になった釜石の皆さんに何かできることはないか、恩返しできないかと考えました。そのような時に、大好きな釜石の魅力をもっと多くの人に知ってもらいたいと思いました。

そこで、私たちができることの一つとして、同じ想いを持つ仲間を募り、釜石フェスティバルを開催するという答えにたどり着きました。

■ 三つの願いを込めたフェスティバル

釜石フェスティバルを開催するにあたって、私たちは、どのようなフェスティバルにしたいか、あるいはどのような想いを届けたいのか、ていねいに話し合いを重ねました。そして、私たちは三つの願いを持ってこのフェスティバルに臨むことにしました。

一つ目は、学生や地域の方に釜石の魅力を伝え、もっと身近に感じてもらうことです。釜石の皆さんをお招きして、人々の温かさやかっこいい背中を知ってもらったり、私たちが毎年教わっている郷土料理を販売して釜石の食を味わってもらったり、これまでの私たちの活動報告を展示して、釜石へ行ってみたいと思うきっかけをつくったり、そのようなフェスティバルにしたいと考えました。遠い場所のこととして伝えるのではなく、私たち学生が埼玉でその魅力を発信することで、より気軽に、身近に触れてもらえるのではないか、そしてその魅力に触れることで、釜石へ訪れたい人々が現れるのではないか、そんなことを期待しました。

二つ目は、風化しつつある東日本大震災のことを伝えることです。私たちはボランティアスタディツアーなどの活動を通じて、釜石で今起きていることを追いかけて、私たちなりに「復興」というものを考えてきました。そして、離れた地域で暮らしているからこそ、私たちの地域で、震災からこれまでの釜石の方々の歩みを伝えることも、できることの一つではないかと考えていました。他人事としてではなく、このようなふうになり立ちはだかっている皆さんがいるということを伝えたいと私たちは思いました。

最後は、お世話になった釜石の皆さんに、改めて誇りを感じていただけるようなフェスティバルにすることです。自分たちでは当たり前のように思っているような釜石の魅力も、この釜石フェスティバルで発信することで、改めて誇りを感じていただけたらと考えました。

■ 郷土料理の販売に加えてトークセッションも

聖学院大学の学園祭であるヴェリタス祭で、釜石の方々をお招きしての釜石フェスティバルを二日間開催することができました。これまでお世話になった、三陸ひとつなぎ自然学校や釜石・大槌郷土料理研究会の皆さん、そして宝来館の女将の岩崎さんをお招きしてフェスティバルを一緒に盛り上げていただきました。また、釜石と深くつながりのある東京大学社会科学研究所の玄田有史先生もお招きし、釜石の方々とのトークセッションのイベントもしました。

当日は、ボランティアでこれまで釜石を訪れた多くの学生がスタッフとして参加し、活動報告や、郷土料理の販売も行いました。活動展示には、大学周辺の方も多く訪れ、私たちのこれまでの活動をじっくりと見て下さった方もたくさんいらっしゃいました。

また、物販ブースでは、郷土料理研究会のお母さん方が作ったひつつみ汁やがんづきなどを販売し、どれも完売しました。釜石のお母さん方の心温まる味は、子どもから大人まで大人気でした。

また、釜石から取り寄せた麺とわかめで学生たちが釜石ラーメンを作り、連日行列ができるほどの人気ぶりでこちらも完売しました。食べて下さった方の中には、釜石出身で現在は埼玉にお住まいの方もいて、「釜石の味に近くて、懐かしかった」と喜んで下さいました。

そして、「よいさっ！プロジェクト」に参加した学生20名ほどでよいさ踊りの練り歩きも行いました。釜石の地で皆さんと踊っていた気持ちが蘇り、見ている方にも伝わるくらいに楽しく披露することができました。

フェスティバルは大成功となり、本当に多くの方に釜石の魅力に触れてもらうことができました。このフェスティバルを通して釜石を知ったという方もいらっしゃる、被災地としてではなく、釜石というまちの魅力をお伝えすることができたように思います。

感謝の気持ちで終えた釜石フェスティバル

私たちは、初めて釜石の皆さんをお招きし、これまでの活動の節目としてこのイベントを終えることができたことに感謝の気持ちでいっぱいでした。釜石の皆さんがお帰りになる際には、「ありがとう。釜石のためにここまでしてくれて、本当に嬉しかった」と言って下さり、このフェスティバルの本当の価値に気づくことができました。

私たちは、ボランティアというきっかけで釜石を知ったかもしれませんが、これまで築くことのできた関係は本当に大切なものです。これからも釜石の方々に様々なことを教わりながら、このつながりを大切にしよう、そして自分にできることを探し続けよう、そう心から感じることでできるフェスティバルでした。



釜石フェスティバル展示コーナー

おわりに

私たちはいつまで、「復興支援」を続けていくのか？

首都圏の大学が活動を終息していく中、私たちにとってもその問いは現実的な課題となっています。そのため、2017年度から3回、これまでの釜石との関わりを振り返るとともに、これからの釜石との関わりについて考える「釜石検討会」を開きました。メンバーは、復興支援団体の学生リーダー、釜石との関わりが深い教員、そしてボランティア活動支援センターのスタッフ、立場を越えて学生・教職員が真剣に議論を交わしました。

2019年は、三陸防災復興プロジェクト2019があり、釜石においてもラグビー・ワールドカップ2019の開催等、ひとつの大きな節目となるため、ここが我々の活動を転換する時期になるかもしれない。教職員側にはそのような空気も漂っていました。特にボランティアスタディツアーを続けるか、終了して新たな活動を始めるかは、大きなテーマでした。

ところが、学生たちからは、「釜石よいさを2ラウンド一生懸命踊って、そのあと、みんなでビールを飲みたい！」との意見ができました。それを聞いて、教職員は、「おー。それなら続けよう」と即答しました。続けるか続けないかともやもやしていたものが、あっさりと吹き飛びました。私たちにとって、重要な判断材料は、理屈ではなく想いでした。

震災直後、私たちは、東日本大震災の悲惨な状況を知り、「少しでも何かお役に立ちたい」との思いで、釜石の地に足を踏み入れました。しかし、たびたび釜石を訪れる中で、次第に私たちがお届けしているもの以上に、多くのものをいただいていることに気づきました。それは、おいしい海の幸・山の幸であり、美しい自然であり、虎舞を始めとした伝統であり、鉄とラグビーという町の歴史の魅力でした。そして何より、大きな災害の中からも、しなやかに、そして力強く復興への歩みを進めている釜石の人との出会いと交流を通して、多くのことを教えていただきました。命の尊さ、困難への向き合い方、真剣に生きるということの覚悟、笑顔の持つ力、その一つ一つが私たちの胸に刻まれています。

復興のステージは、すでに私たちよそ者が活躍するのではなく、釜石の方々自身が町のために立ち上がり、復興を成し遂げていく段階に入っていると感じています。そんな復興のために歩みを進めている釜石の皆さんの身近な応援団として、また仲間として、これからも共に歩ませていただければ幸いです。

私たちは、2019年を越えて、釜石に通い続けます。

資料編



釜石での出会いから始まった

1

出合いの積み重ねによる ネットワークの拡大

芦澤 弘子

2011 年度の主な動き

4 月

- ・聖学院大学復興支援委員会を設置し、復興支援活動の体制を整備

9 月

- ・人間福祉学科の教員が仮設住宅の調査で岩手県沿岸部を訪問。地域のリーダー的存在である柏崎龍太郎さんや旅館「宝来館」女将、岩崎昭子さん、民生委員・教育委員の市川淳子さんと出会う。

12 月

- ・復興支援「サンタプロジェクト」実施、鶴住居地区生活応援センターの協力で、仮設住宅への手作りオーナメント配布や、集会所で「こどもクリスマス会」を実施

2012 年度の主な動き

1 年通して

- ・ボランティアスタディツアーを年4回実施。春はさいたま市北区盆栽町にある「清香園」の協力で仮設住宅にお住いの皆様に盆栽桜をお届けする「桜プロジェクト」を行う。

4 月

- ・ボランティア活動支援センター、ボランティア支援課が組織される
- ・学生団体 復興支援ボランティアチーム【SAVE】結成
- ・こども心理学科教員の指導で、鶴住居の仮設商店街で「こどもあそびひろば」を展開
- ・伊藤聡さん、柏崎未来さんが「一般社団法人 三陸ひとつなぎ自然学校」（さんつな）を設立。現地ガイドやツアーコーディネートを引き受けていただく

8 月

- ・コミュニティ政策学科の教員が夏から漁村調査を開始
- ・人間福祉学科のゼミがツアーに合わせて、箱崎地区の高齢者との交流活動を実施

2013 年度の主な動き

1 年通して

- ・ボランティアスタディツアーを年2回実施
- ・冬のツアーより、学生との合同企画にシフト

6 月

- ・釜石との連携調査と市長との意見交流を実施

8 月

- ・SAVE主催「みんなで学ぼう！！ 防災講座」を大学地元の大谷地区の方々に呼びかけて実施

9 月・3 月

- ・コミュニティ政策学科のゼミが漁業体験、放課後こども教室、ぶどう植樹作業を実施

12 月

- ・釜石・大槌郷土料理研究会のお母さん方との「郷土料理づくり」を初開催。冬の恒例活動となる。

2014 年 1 月 29 日

- ・「釜石市と聖学院大学との連携に関する協定」を締結

2014 年度の主な動き

1 年通して

- ・ボランティアスタディツアーを年 3 回実施
- ・学生企画「かまっこ★あそびーらんど」を釜石全域の子どもを対象に実施

4 月

- ・仙寿院、釜石応援団の協力で「津波伝承の駆け上がり競争」初実施

8 月

- ・夏のツアーは、埼玉県立常盤高等学校（看護科）と合同で実施。「釜石よいさ」に初参加。

9 月

- ・「釜石を美味しく楽しむ会」をつながりのある漁師さんや水産業の方から釜石の幸を取り寄せて初開催。

12 月

- ・冬のツアーでは、地元高校生との交流が初めて実現。

2015 年 2 月

- ・学長が釜石で講演会を実施

3 月

- ・聖学院高校生徒会主催の東日本大震災を覚える「2015.3.11 いま僕たちにできること」実施協力として、学生が高校生へ被災地の状況を伝える活動を実施。この会をきっかけに、翌年度より関東圏の高校を対象とした「東日本大震災を風化させないプロジェクト」が始動する。

2015 年度の主な動き

1 年通して

- ・ボランティアスタディツアーを年 3 回開催
- ・「東日本大震災を風化させないプロジェクト」として、県内の高校に大学生が訪問し被災地の今や埼玉からできる支援について考える機会を作った
- ・「釜石学」開講
- ・「復興支援ボランティア交通費補助金制度」ができ、以降年 2 回まで被災地支援の交通費に補助がでるようになる

4 月

- ・仙寿院住職にご協力いただき、地元の若者との交流会を初開催。

6 月

- ・釜石学のゲストとして、三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤聡さんをお招きする

8 月

- ・夏のツアーは、埼玉県立常盤高等学校と聖学院中学高等学校と合同で実施。
- ・児童学科のゼミが子どもとのあそび活動、あそび場整備の活動を初実施

11 月

- ・釜石の魅力を発信する「釜石フェスティバル」を学園祭のなかで実施。

12 月

- ・釜石の方と学生が1対1になり、トークフォークダンス形式で語り合う「みんなでかだっぺし♪」初開催
- ・日向仮設住宅で地元高校生との掃除を初実施

2016 年度の主な動き

1 年通して

- ・ボランティアスタディツアーを年3回実施
- ・「東日本大震災を風化させないプロジェクト」として、県内の高校に大学生が訪問し被災地の今や埼玉からできる支援について考える機会を作った

4 月

- ・復興公営住宅での桜の植樹を初実施。

6 月

- ・SAVE がメンバーのみで行う「ボランティアスタディブチツアー」を初実施。
- ・釜石学のゲストとして、三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤聡さんと釜石高校生の寺崎幸季さんをお招きする

8 月

- ・夏のツアーは、埼玉県立常盤高等学校と聖学院中学高等学校と合同で実施。
- ・秋に開催されるいわて国体に出場する選手や来場者を花で出迎えようという「花いっぱい運動」に協力
- ・小佐野公民館職員さんのアドバイスのもと、「夏休み学び発見プロジェクト」を実施。

2017 年度の主な動き

1 年を通して

- ・スタディツアーを年3回実施
- ・「東日本大震災を風化させないプロジェクト」として、埼玉県内の高校に大学生が訪問し被災地の今や埼玉からできる支援について考える機会を作った
- ・「コミュニティサービスラーニング」開講。釜石プロジェクトが始動する。

1 月

- ・釜石虎舞連合会会長の岩間久一氏より、聖学院大学に虎舞の虎頭（白虎）が寄贈される。

6月

- ・釜石学のゲストとして、三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤聡さんをお招きする

8月

- ・夏のツアーは、自由の森学園高等学校と合同で実施。
- ・「釜石原木しいたけ再生プロジェクト」の活動に初参加。

9月

- ・政治経済学科の教員が災害復興公営住宅の自治会設立支援のしくみを調査

12月

- ・冬のツアーで実施した「みんなでかだっぺし♪」や「仮設住宅の清掃」では、釜石高校の生徒のべ35人が参加してくれた。

2月

- ・コミュニティサービスラーニング釜石プロジェクト受講生有志が地元高校生と一緒に「防災講座」を企画・運営。

2018年度の主な動き

1年を通して

- ・スタディツアーを年3回実施

4月

- ・春のツアーでは、鶴住居地区で住宅を再建された方のお庭に桜の植樹を実施。

6月

- ・釜石学のゲストとして、三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤聡さんと釜援隊の由木加奈子さん（本学卒業生）をお招きする

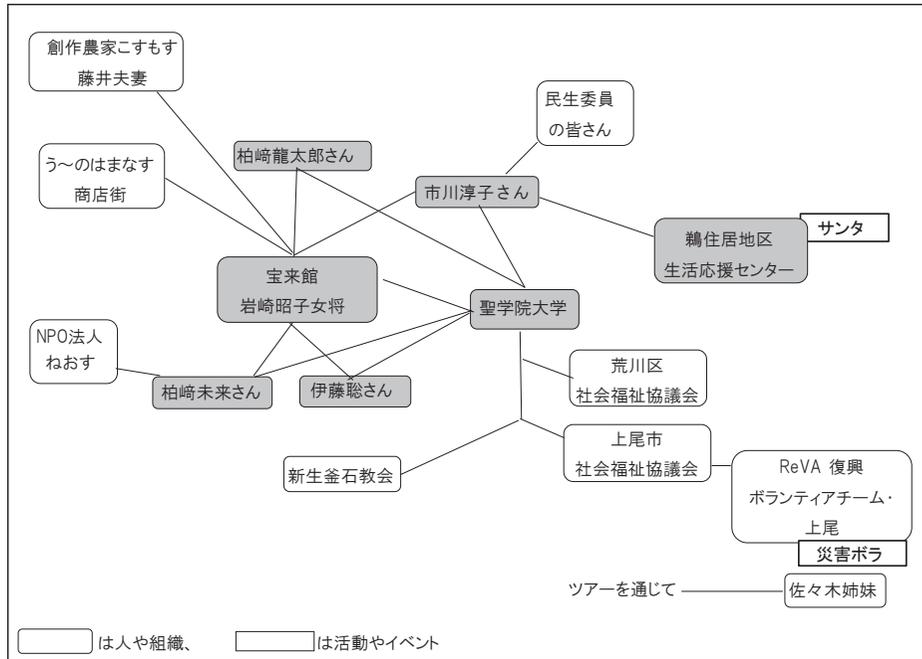
8月

- ・夏のツアーは、自由の森学園高等学校と聖学院中学高等学校と合同で実施。
- ・コミュニティサービスラーニング釜石プロジェクト合宿が行われ「防災講座」と「キャリア教育」をテーマにプロジェクトが始動した

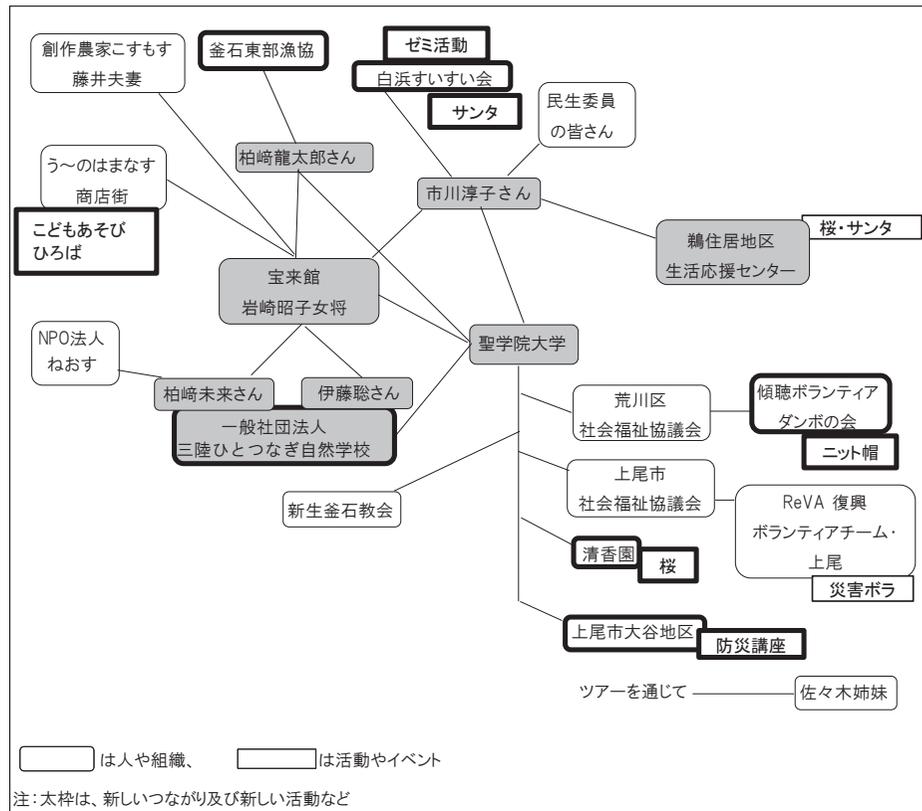
9月

- ・陸上競技部による「キッズかけっこ教室」を釜石こども園の園児に向けて初開催。

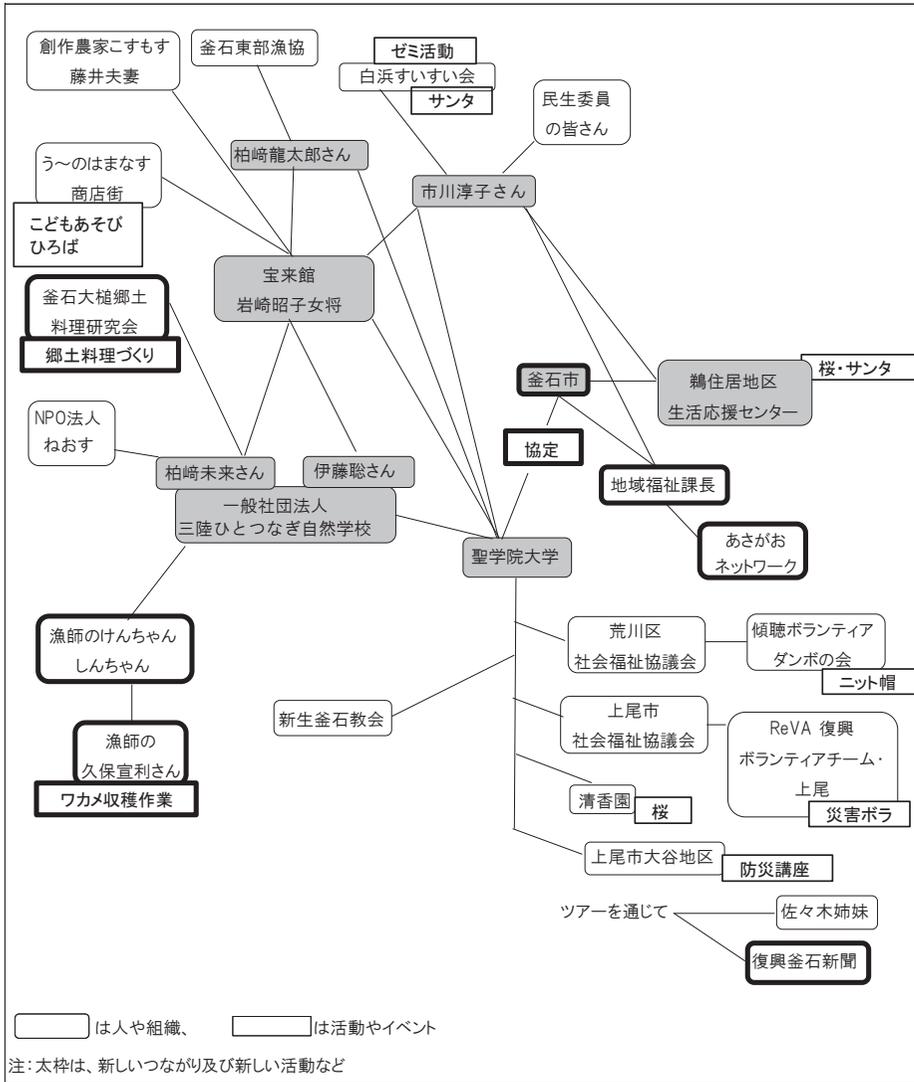
釜石つながりマップ・2011 年度版



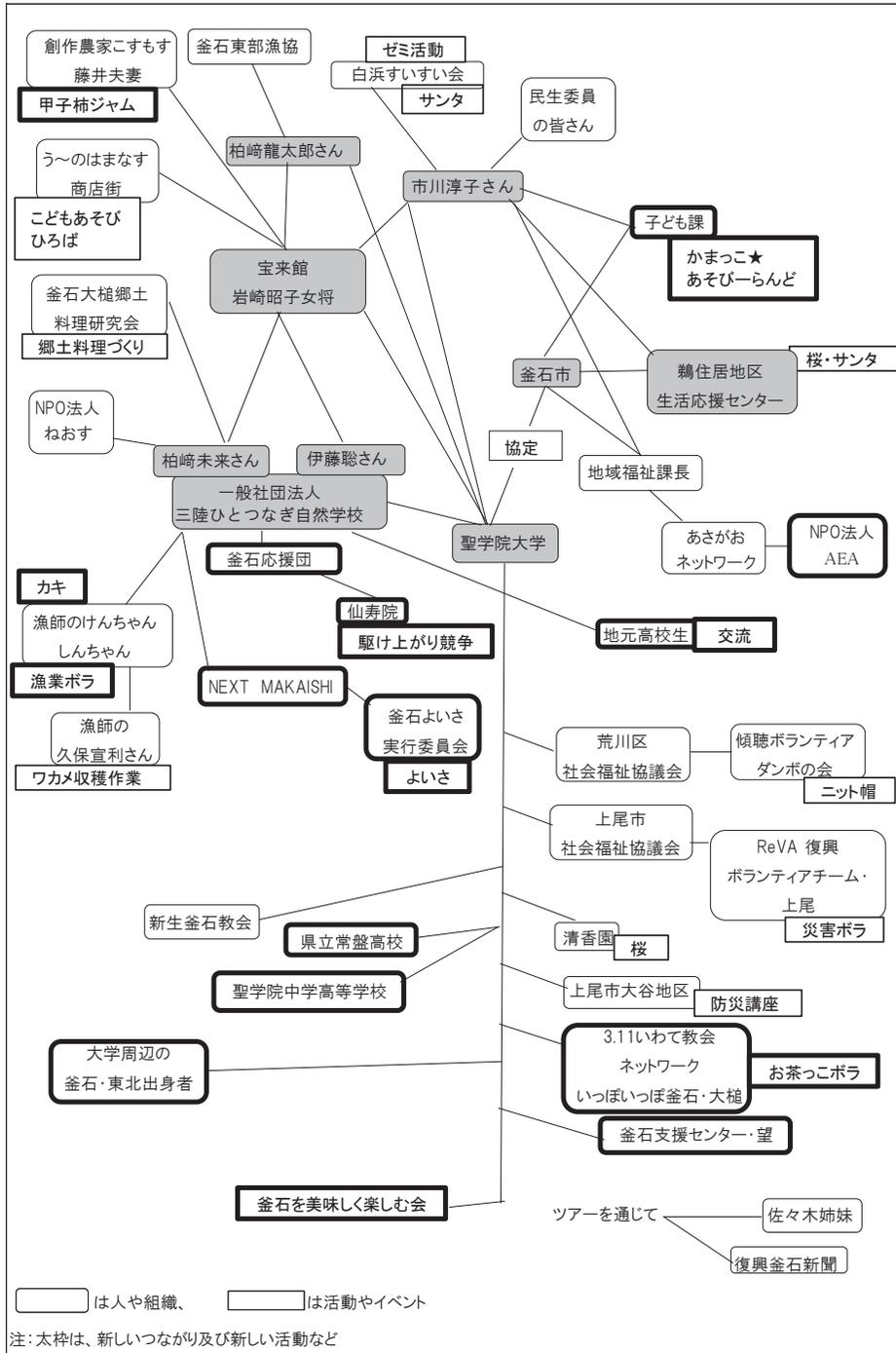
釜石つながりマップ・2012 年度版



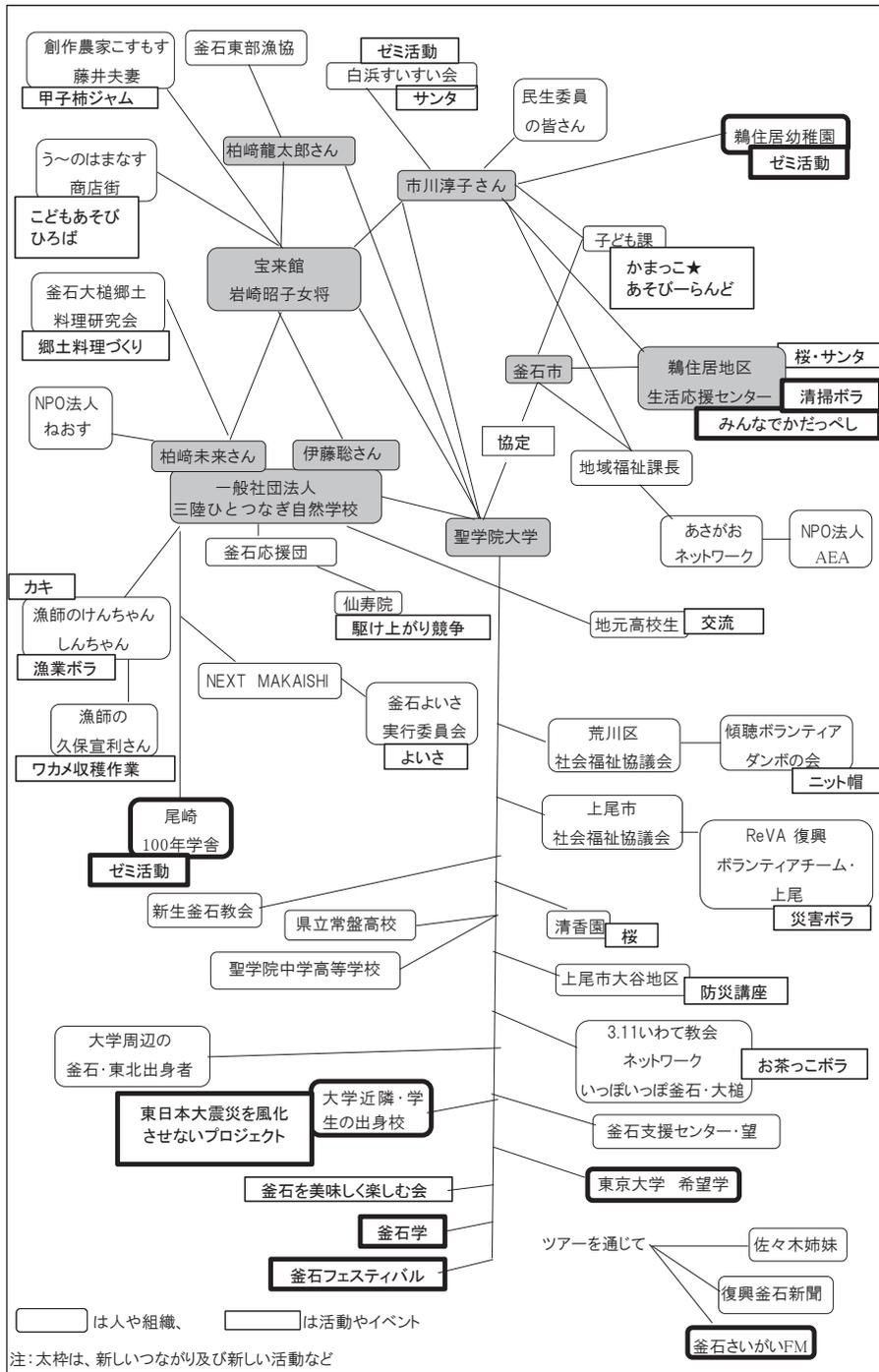
釜石つながりマップ・2013 年度版



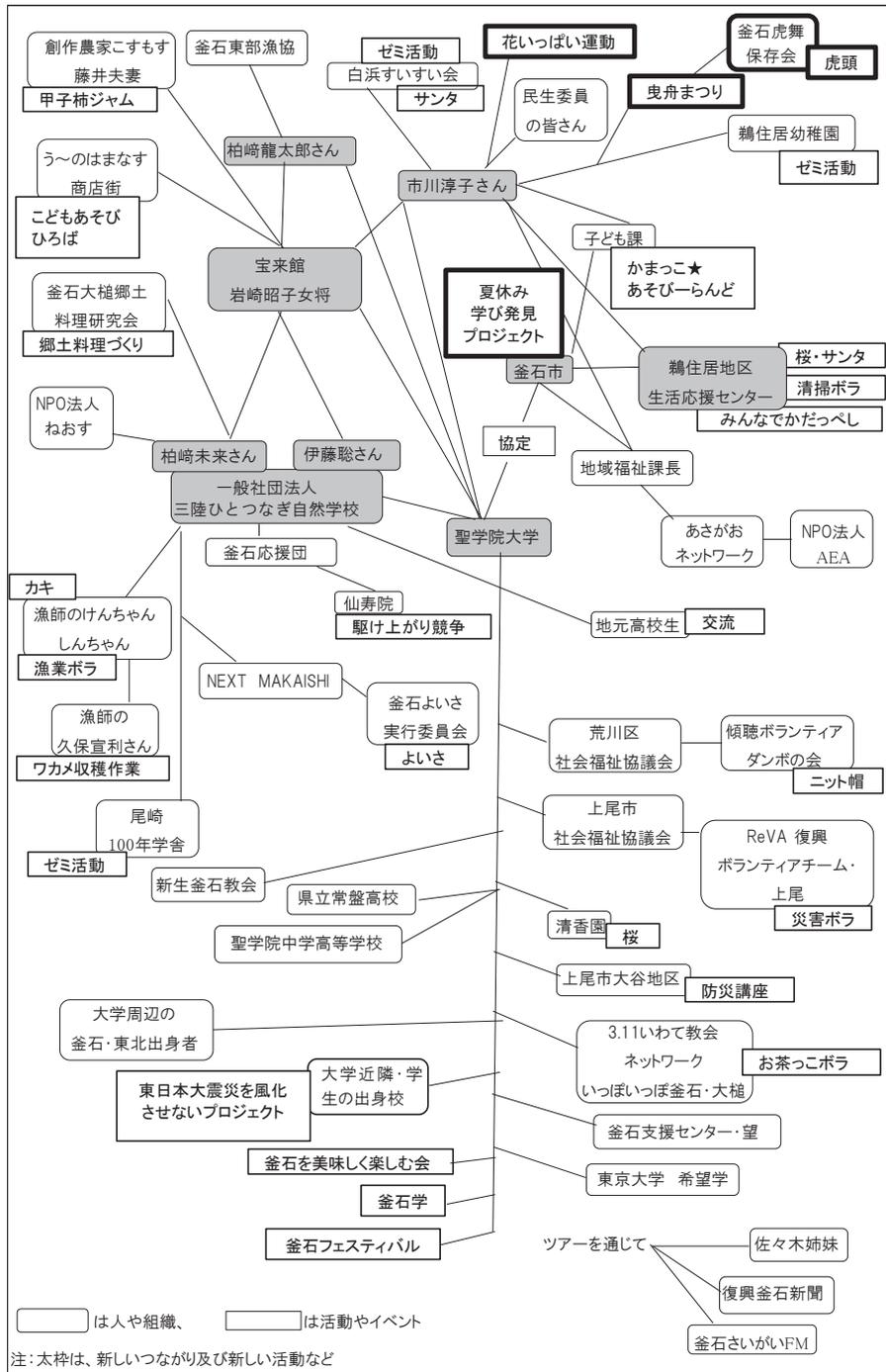
釜石つながりマップ・2014 年度版



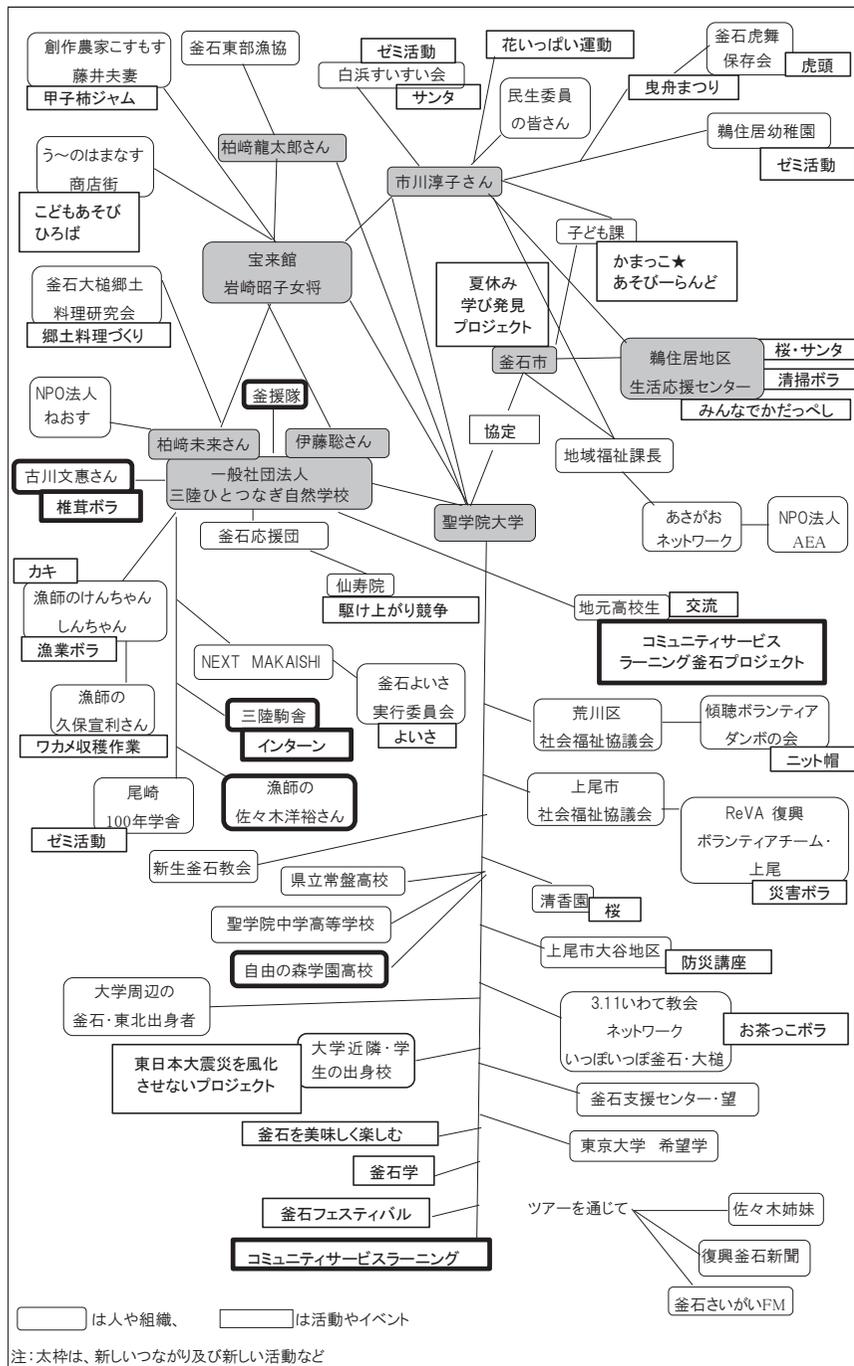
釜石つながりマップ・2015 年度版



釜石つながりマップ・2016 年度版



釜石つながりマップ・2017 年度版



2

あそび広場での子どもへの注意

金谷京子

〈発達期別起きそうな事故〉

乳児⇒誤飲、転倒、熱中症

幼児⇒誤飲、転倒、落下、衝突、熱中症、行方不明（迷子）、挟む、切る

小学生⇒転倒、落下、衝突、熱中症、行方不明、挟む、切る

〈事故防止・処置〉

- ① 必ず、受付で名前を記入してもらい、緊急連絡先も記してもらおう。
- ② 子どもに名札をつける。子どもがどのような服装だったか、どのような容服だか記憶する。
- ③ 持ち場担当は、自分の持ち場のみ見るのではなく、設営会場全体にも目を配る。
- ④ 緊急避難路も確認する。
- ⑤ 持ち場担当が、その場を離れるときには、他のスタッフに必ず声をかけて離れる。
- ⑥ 子どもは勝手に好きなおところへ出かけてしまうことが多い⇒必ず、受付を通してどこに行くか尋ね、動静を把握する。
- ⑦ 動線を考えた物の配置をする。子どもの目線の位置を考えて配置する。
- ⑧ 誤飲しそうなものを乳幼児のそばに置かない。
- ⑨ 上ったとき、座った時、立った時に転倒しそうな不安定なものに上らないように注意する。大型遊具などの場合は、目を離さない。下で受け止められるようにする。転倒、落下があっても最小限の怪我で済むように床を安全なものに工夫する（ラバー化、マットを敷く等）。
- ⑩ 机の角に安全具をつける。
- ⑪ はさみ、カッターナイフ等切る道具は年少児には、大人がそばについているところで使用するよう促す。
- ⑫ はし、鉛筆、定規等鋭利なものを持ったまま歩かないように注意する。
- ⑬ 床をすべりやすい状態にしない。水、のり、絵の具等への注意。
- ⑭ 水分補給を小まめにするよう促す（子どもの体温は高い。夢中になりやすく、汗をかいていても拭かない。水を飲もうとしないことがある）。
- ⑮ 万が一、子ども・大人に怪我や破損事故、体調不良等が起きた場合は、すみやかに大学職員に連絡する。勝手な判断で事を大きくしないよう注意する。職員、保護者に事の経過が説明できるように、事実関係を整理して報告する。
- ⑯ 子どもが怪我や体調不良になったとき、地震等が起きたときは、子どもをまず落ち着かせる。支援者が慌てない。

3

子ども対応ボランティア心得

金谷京子

〈ボランティア参加への準備〉

- ① ボランティア保険に必ず加入する。
- ② 体調管理に気を付ける。体調に変調のあるときは無理せず、参加を避ける。伝染性の疾患は子どもたちへの伝染の可能性もあるので、注意する。
- ③ 動きやすい服装で参加する。ピアス、ネックレス、指輪等装飾品を身につけないようにする。フード付きコートも避ける。爪を切っておき、マニキュアもしない。
- ④ 日ごろから禁煙することが望ましいが、遊びの会の前後は禁煙厳守。自分の健康のためばかりではなく、子どもたちへの影響があることを自覚すること。喫煙すると服にも臭いが染み付くことを自覚し、子どもたちへの配慮を忘れないようにする。

〈子どもへの接し方の注意〉

- ① 子どもに挨拶を自分からする。
- ② 子どもの目線に合わせて話しをする。
- ③ 子どもの年齢に応じた言葉遣いをする。学生言葉で話しかけない。
- ④ 過激な遊びで事故につながらないように注意する。
- ⑤ だっこ等の身体接触を迫られた場合、1人のみを抱くと他の子どもも抱いてはしくなるので、公平に接するようになる。
- ⑥ どんな境遇の子どもでも公平に接する姿勢を示す。
- ⑦ 大人の数が多い場合、よってたかって子どもを取り囲まないようにする。
- ⑧ 子どもの発想や提案を大事にする。大人のやり方を押し付けない。
- ⑨ 保護者同伴の場合は、保護者の同意を得てから活動を進める。

〈守秘義務〉

- ① ボランティア中に知り得た子どもや家族に関する個人情報等については、秘密保持（守秘義務）を厳守する（ボランティア後も同様）。施設外で不用意に話さないこと。
- ② 許可なく施設の設備や部屋、児童・利用者をカメラやビデオで撮影することは禁止。

〈被災地の子どもへの接し方〉

- ① 同情の目や、先入観で見ない。
- ② 子ども自ら災害のことを話す場合以外は、あえて聞き出すようなことはしない。
- ③ フラッシュバックを起こすような刺激を与えない（例：津波の話、地震のまね

等)。

- ④ 亡くなった人の話などを子どもがしたときに動揺しないようにする。静かに受け止める。
- ⑤ できるかできないかわからない約束はしない（例：○○にまた来るから、○○してあげる）。
- ⑥ 試し行動（子どもの挑発的行動）に過剰に反応しない。行動の背景を考える。

4

子ども関連イベント in 釜石

金谷京子

| 年 | 月 | プロジェクト名 | 開催場所 | 主な内容 |
|-------|-----|------------------------|--------------|--|
| 2011年 | 12月 | サンタプロジェクト・クリスマス会 | 長内集会所 | 歌、絵本読み聞かせ、クリスマスのお話、SPO演奏、クリスマスカードづくりなど |
| 2012月 | 5月 | あそび広場 | うーのはまなす商店街中庭 | バルーンアート、ストラックアウト、紙コップ工作、シャボン玉、バラバルーン |
| | 8月 | あそび広場 | うーのはまなす商店街中庭 | 水ヨーヨー、プラバン、竹トンボづくり、シャボン玉、ストラックアウト、そうめん流し |
| | 12月 | サンタプロジェクト・クリスマス会 | 長内集会所 | 歌、エプロンシアター、クリスマスのお話、オーナメントづくりなど |
| 2013月 | 4月 | 桜プロジェクト・あそび広場 | 宝来館前お | にごっこ、紙ロケットづくり、まつぼっくりひろい |
| | 12月 | サンタプロジェクト・クリスマス会 | 長内集会所 | クリスマスのお話、絵本の読み聞かせ、まつぼっくりツリー作り、歌、ゲーム |
| 2014月 | 4月 | 桜プロジェクト・かまっこ★あそびーらんど | シープラザ遊 | もうじゅう狩り、ドッチボール、だるまさんの1日、不思議な牛乳パックなど |
| | 8月 | よいさプロジェクト・かまっこ★あそびーらんど | シープラザ遊 | スタンプラリー、大縄とび、ドッチボール、マラカスづくりなど |
| | 12月 | サンタプロジェクト・クリスマス会 | 長内集会所 | 歌、ビンゴ、タイのクリスマス紹介、クリスマスのお話、紙粘土ツリーづくりなど |
| 2015月 | 4月 | 桜プロジェクト・かまっこ★あそびーらんど | 長内集会所・公園 | 玉入れ鬼、ぶんぶんゴマ、巨大お絵かきなど |
| | 8月 | よいさプロジェクト・かまっこ★あそびーらんど | イオンタウン釜石 | じゃんけん列車、砂鉄あそび、釜石の手（手形で釜石の海を描く）など |
| | 12月 | サンタプロジェクト・クリスマス会 | 長内集会所 | 焼き芋づくり、歌、●×クイズ、クリスマスのお話、紙製ツリーづくりなど |
| 2016月 | 8月 | よいさプロジェクト・かまっこ★あそびーらんど | イオンタウン釜石 | 紙飛行機フライト、輪投げお絵かきコーナーなど |

| 年 | 月 | プロジェクト名 | 開催場所 | 主な内容 |
|-------|-----|------------------------|-------------|--------------------------------|
| | 12月 | サンタプロジェクト・クリスマス会 | 長内集会所 | 歌、手遊び、クリスマスのお話、スノーボールづくりなど |
| 2017月 | 8月 | よいさプロジェクト・かまっこ★あそびーらんど | 鶴住居生活応援センター | まとあて、ほーりんぐ、なぞなぞなんでもすくい、スイカわりなど |
| | 12月 | サンタプロジェクト・クリスマス会 | 鶴住居生活応援センター | 歌、絵本読み聞かせ、クリスマスのお話、紙皿リースづくりなど |
| 2018月 | 8月 | よいさプロジェクト・かまっこ★あそびーらんど | 鶴住居生活応援センター | 防災グッズづくり、すいか割りなど |

執筆者一覧 (五十音順)

| | |
|-------|---|
| 芦澤 弘子 | ボランティア活動支援センターコーディネーター |
| 阿部 洋治 | 前ボランティア活動支援センター所長 / 前人間福祉学部チャプレン |
| 新井 達也 | 自由の森学園高等学校校長 |
| 大井 恵子 | 前聖学院大学事務局長 |
| 大川 愛加 | コミュニティ政策学科 2017 年卒 |
| 香椎佐久美 | 人間福祉学科 2014 年卒 |
| 金谷 京子 | 聖学院大学心理福祉学科 / こども心理学科教授 |
| 金子 朋寛 | 人間福祉学科 2018 年卒 |
| 川田 虎男 | ボランティア活動支援センターアドバイザー / 講師 |
| 神吉乃三巳 | 学務部副部长 (前地域連携・ボランティア支援課課長) |
| 菊地 順 | 聖学院大学政治経済学科教授 / 政治経済学部チャプレン (元ボランティア活動支援センター所長) |
| 菊池祐太郎 | 欧米文化学科 2015 年卒 (復興支援チーム SAVE2013 年度代表) |
| 児玉 拓哉 | こども心理学科 2018 年卒 (復興支援チーム SAVE2016 年度代表) |
| 坂本佳代子 | 聖学院大学児童学科非常勤講師 (前聖学院大学児童学科客員教授) |
| 島村 宣生 | 聖学院大学管理部部長 / 地域連携・ボランティア支援課課長 |
| 菅原 幸秀 | 児童学科 4 年 (復興支援チーム SAVE2017 年度代表) |
| 平 修久 | 聖学院大学副学長 / ボランティア活動支援センター所長 / 地域連携・教育センター所長 / 政治経済学科教授 (前復興支援ボランティアセンター長) |
| 永松 実梨 | こども心理学科 2017 年卒 (元釜石フェスティバル実行委員長) |
| 西浦 昭英 | 聖学院中学高等学校教諭 |
| 西川 正 | 特定非営利活動法人ハンズオン埼玉常務理事 |
| 野口 祐子 | 日本工業大学建築学部建築学科教授 (前聖学院大学人間福祉学科教授) |
| 藤川 友帆 | こども心理学科 2016 年卒 (復興支援チーム SAVE2014 年度代表) |
| 古橋 亮 | 聖学院大学大学院政治政策学研究科 2014 年卒 |
| 前島 沙紀 | 児童学科 3 年 (復興支援チーム SAVE2018 年度代表) |
| 溝橋 亮太 | コミュニティ政策学科 2016 年卒 |
| 守屋 有紀 | 埼玉県立常盤高等学校教諭 |
| 山口 雄大 | 人間福祉学科 2014 年卒 (復興支援チーム SAVE2012 年度代表) |
| 由木加奈子 | 釜援隊 (こども心理学科 2018 年卒) |
| 渡辺 正人 | 聖学院大学こども心理学科教授 / 大学事務局長 |

「釜石での出会いから始まった」

2019年3月15日 初版第1刷

■発行

聖学院大学ボランティア活動支援センター
聖学院大学地域連携・教育センター
〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号
<https://seig-vc.jimdo.com/>

■印刷

株式会社クイックス

柏崎龍太郎さんとの出会い

岩崎昭子さんとの出会い

伊藤聡さんとの出会い

市川淳子さんとの出会い

佐々木波香ちゃん・佐々木結香ちゃんとの出会い

佐々木健一さんとの出会い

佐々新一さんとの出会い

虎舞との出会い

フ

被

釜石

子ども

ハンド

2年通

キッズか

さんつなでの長期ボラ

2016年台風10号に関するボランティア

防災教室

釜石の話を礼拝で

お母さんたちから教わった郷土料理

同世代交流



遊園(仮設)での遊び

